

NIAD-UEシンポジウム

国際共同教育プログラムの質保証：

日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは

報告書



平成26年11月27日(木)

於：一橋講堂

主催：  独立行政法人 大学評価・学位授与機構

NIAD-UE シンポジウム「国際共同教育プログラムの質保証:
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは」

報告書

目 次

はじめに	1
当日プログラム	2
「キャンパス・アジア」パイロットプログラム一覧	4

第1部: イントロダクション、ポスターセッション

開会挨拶

佐藤 東洋士 モニタリング委員長/学校法人桜美林学園理事長・桜美林大学総長	7
---------------------------------------	---

日本側1次モニタリングの紹介

秦 絵里 大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長	9
ポスターセッション	25

第2部: 各論

1. 基準横断的テーマ

一橋大学	一條 和 生	一橋大学大学院国際企業戦略研究科長	31
東京大学	宮 本 弘 暁	東京大学大学院公共政策学教育部特任准教授	37

2. 中韓との協働による教育

名古屋大学・東北大学	土 井 隆 行	東北大学大学院薬学研究科教授	41
政策研究大学院大学	細 江 宣 裕	政策研究大学院大学政策研究科准教授	49
九州大学	田 邊 哲 朗	九州大学大学院総合理工学府特任教授	53
神戸大学	田 中 悟	神戸大学大学院国際協力研究科特命准教授	57
立命館大学	廣 澤 裕 介	立命館大学文学部准教授	61

3. 日中韓学生交流に対応した環境づくり

東京工業大学	原 正 彦	東京工業大学大学院総合理工学研究科教授	65
岡山大学	長 塚 仁	岡山大学グローバルパートナーズ副センター長 (大学院医歯薬総合研究科教授)	73
	小 野 真由美	岡山大学グローバルパートナーズ講師	
名古屋大学(法)	宇田川 幸 則	名古屋大学大学院法学研究科教授	79

4. モニタリング学生部会 ～後輩に伝えたいこと、次のCA学生のために何を考えていくべきか(質保証の観点から)～

モデレーター	中 田 佳珠美	神戸大学大学院国際協力研究科修士課程修了	83
発表者	伊 藤 光 理	名古屋大学法学部	
	パク ボムジュン	東京大学大学院公共政策学教育部	
	ズ リシン	九州大学大学院総合理工学府	

第3部: パネルディスカッション

パネルディスカッション	93
-------------	----

(参考) ウェブサイトでの当日配布資料と「キャンパス・アジア」日本側1次モニタリング資料のご案内	107
--	-----

はじめに

「キャンパス・アジア」では、日中韓の大学において様々な共同教育プログラムが行われています。このプログラムの運営にあたっては、大学のみならず、3か国の政府や質保証機関が共同で質保証に取り組むことが重要になっています。大学評価・学位授与機構(以下、当機構)が、中国・韓国の質保証機関(中国教育部高等教育教学評価センター(HEEC)、韓国大学教育協議会(KCUE))と協力して実施しているモニタリングプロジェクトもそういった取組みの一つです。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムは、文部科学省が平成 23 年度「大学の世界展開力強化事業」のうち、日中韓トライアングル交流事業として、採択したものです。このプログラムは5年間の事業として運営されています。本シンポジウム「国際共同教育プログラムの質保証：日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは」では、「キャンパス・アジア」の10プログラムの質保証の取組みについて、プログラム開始から3年目にあたる平成 25 年度に、当機構が実施した日本側1次モニタリングで抽出した優れた事例を紹介しました。また、各プログラム代表者やプログラムに参加した学生、文部科学省、1次モニタリングを実施したモニタリング委員の皆様とディスカッションを行い、それぞれの立場から様々なご意見をいただきました。ここでは、「キャンパス・アジア」を通じて、質を伴った国際共同教育プログラムの運営にあたっての課題や今後の在り方について議論を深めました。

本報告書には、シンポジウムで発表された各プログラムの優良事例やディスカッションの様子などが掲載されております。日中韓の枠組みに限らず、国際共同教育プログラムの運営・実施に関わっている、あるいは、これから着手しようとしている高等教育関係者の方々にとって、参考となれば幸いです。

平成 27 年3月

独立行政法人大学評価・学位授与機構理事
岡 本 和 夫

N I A D - U E シンポジウム

国際共同教育プログラムの質保証：日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは
平成26年11月27日（木） 13時～18時15分（開場：12時30分）
一橋講堂（ポスターセッション：中会議場）

プログラム

13:00～14:25

第1部：イントロダクション、ポスターセッション

● 開会挨拶

佐藤 東洋士 モニタリング委員長/学校法人桜美林学園理事長・桜美林大学総長

● 日本側1次モニタリングの紹介

秦 絵里 大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長

(13:45～14:25)

ポスターセッション

各プログラムによるポスターセッション（2階中会議場）

（各プログラムの説明者については、「ポスターセッション担当者一覧」をご参照ください。）

14:25～16:45

第2部：各 論

1. 基準横断的テーマ

一橋大学
東京大学

一條 和生 一橋大学大学院国際企業戦略研究科長
宮本 弘 東京大学大学院公共政策学教育部特任准教授

2. 中韓との協働による教育

名古屋大学・東北大学
政策研究大学院大学
九州大学
神戸大学
立命館大学

土井 隆行 東北大学大学院薬学研究科教授
細江 宣裕 政策研究大学院大学政策研究科准教授
田邊 哲朗 九州大学大学院総合理工学府特任教授
田中 悟 神戸大学大学院国際協力研究科特命准教授
廣澤 裕介 立命館大学文学部准教授

休憩（10分）

3. 日中韓学生交流に対応した環境づくり

東京工業大学
岡山大学

原 正彦 東京工業大学大学院総合理工学研究科教授
長塚 仁 岡山大学グローバルパートナーズ副センター長
（大学院医歯薬総合研究科教授）
小野 真由美 岡山大学グローバルパートナーズ講師
宇田川 幸則 名古屋大学大学院法学研究科教授

4. モニタリング学生部会

～後輩に伝えたいこと、次のCA学生のために何を考えていくべきか（質保証の観点から）～

モデレーター
発表者

中田 佳珠美
伊藤 光理
パク ボムジュン
ズ リシン

神戸大学大学院国際協力研究科修士課程修了
名古屋大学法学部
東京大学大学院公共政策学教育部
九州大学大学院総合理工学府

16:45～17:00

休 憩(15分)

17:00～18:10

第3部：パネル

モデレーター 岡 本 和 夫 大学評価・学位授与機構理事

パネリスト モニタリング委員長 佐 藤 東洋士 学校法人桜美林学園理事長

モニタリング委員・専門部会長

牟 田 博 光 一般財団法人国際開発センター理事

文部科学省 松 本 英 登 文部科学省高等教育局高等教育企画課

国際企画室長

「第2部」のプログラム発表者、学生代表者

●第1部、第2部フォローアップ

●ディスカッション

18:10～18:15

●閉会挨拶

岡 本 和 夫 大学評価・学位授与機構理事

18:30～19:30

情報交換会（1階特別会議室101～103）

「キャンパス・アジア」パイロットプログラム一覧

平成23年度大学の世界展開力強化事業タイプAーⅠ
日中韓のトライアングル交流事業

大学名	構想名称	相手大学		発表内容
		中国	韓国	
一橋大学	アジア・ビジネスリーダー・プログラム	北京大学	ソウル国立大学校	プログラム設計
東京大学	公共政策・国際関係分野におけるBESETO ダブル・ディグリー・マスタープログラム	北京大学	ソウル国立大学校	独自コースの設定、学生リクルート
名古屋大学 東北大学	持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成	南京大学 上海交通大学	ソウル国立大学校 浦項工科大学校	研究活動の認定
政策研究大学 院大学	北東アジア地域における政策研究コンソーシアム	清華大学	KDI(韓国開発研究院)スクール	プログラムの内容・方法
九州大学	エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム	上海交通大学	釜山大学校	国際共同ダブルディグリー、成績評価体制
神戸大学	東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム	復旦大学	高麗大学校	国際会議における学生セッション・学習成果
立命館大学	東アジア次世代人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス	広東外語外貿大学	東西大学校	到達度アンケート
東京工業大学	日中韓先進科学技術大学教育環	清華大学	韓国科学技術院(KAIST)	実施体制ガイドライン
岡山大学	東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム	吉林大学	成均館大学校	語学カフェ、オーダーメイド保険整備、現地語・文化学習
名古屋大学 (法)	東アジア『ユス・コムーネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成	中国人民大学 清華大学 上海交通大学	成均館大学校 ソウル国立大学校	質保証のための参加大学間協議会、学生支援、学生への事前の情報提供

※上表は、本シンポジウム「第2部」における発表順

第1部

イントロダクション、ポスターセッション

1. 開会挨拶
2. 日本側1次モニタリングの紹介
3. ポスターセッション

開会挨拶

学校法人桜美林学園理事長
桜美林大学総長
佐藤 東洋士

モニタリング委員会、委員長の佐藤でございます。大学評価・学位授与機構主催シンポジウム、『国際共同教育プログラムの質保証:日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは』の開会にあたり、一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

本日はこの様に、全国各地から多くの皆様にお集まりいただき、誠にありがとうございます。感謝申し上げます。日本、中国、韓国の3カ国は、従来から大学間交流や学生・教員の移動など、高等教育分野の交流が活発であり、我が国に來ている外国人留学生の数も、約13万人にのぼります。その75%が中国、韓国からの学生であることは、皆様もご承知のとおりであります。一方、近年の国際教育のグローバル化を背景として、国境を越えた教育の質の保証への取組みが世界的に課題となっており、日中韓、3カ国においても、質保証に関する課題に一体的に取り組むことが重要なテーマとなっております。その様な課題に対応すべく、大学評価・学位授与機構、中国の中国教育部高等教育教學評価センター(HEEC)、韓国の韓国大学教育協議会(KCUE)、この三者が互いに連携し、3カ国の政府が共同で進める質の保証を伴う大学間交流プロジェクトである「キャンパス・アジア」のモニタリングに取り組んでいるところであります。その1回目となるモニタリングは、3カ国共同で実施枠組を決定したうえで、2013年から2014年にかけて各国で個別に実施を致しました。モニタリングは、事例の発信と活用を大きな目的の一つと定めており、機構では本年度1次モニタリング成果発信の取組みを進めているところです。本日のシンポジウムはそうした取組みの一つとして開催させていただきました。

国際的な教育の提供においては、同じものは一つとしてなく、パートナー大学の国の教育制度や質保証制度、教育や学生の特徴を、いかに相互に理解し尊重しながら大学間の互恵的な関係を構築していくかは、大変重要でありながらも、難しい場面が多くあると思います。そうした意味では「キャンパス・アジア」のプログラムはいずれも、国際的な共同教育の企画、運営にあたって様々なご苦労があり、それを乗り越えてきた、いわばパイオニア的存在であります。また、プログラムの開始から4年目へ向け、日々の取組みの中で現在もご苦労されていることもあろうかと存じます。各プログラムより本日はご紹介いただく取組事例には、いずれもプログラムの特徴や、中国、韓国のパートナー大学との交流経験を活かした工夫がみられ、我が国の大学の国際的な交流活動の質にとって有益な視点、メッセージとなるものであると考えております。

本日は「キャンパス・アジア」の各プログラムはもとより、広く海外の大学との連携共同教育プログラムに関わっている方、「キャンパス・アジア」のプログラムについてもっと知りたいという方など、全国から多くの方々に参加していただいております。このシンポジウムが皆様の情報共有の場となり、質の保

証を伴った国際的な共同教育プログラム作りのヒントとなることが出来たら、この上ない喜びであります。特に今回は、従来、2国間で行っていたものが、「キャンパス・アジア」という広がりの中で、韓国、中国も含めて多国間の交流が始まったものです。これが段々と発展し、ヨーロッパのエラスムス計画のような形に発展していくことを、個人的に期待をしております。

最後になりますが、本日はご多忙の中ご登壇をお引き受けいただいたプログラム関係者の皆様、また、学生の皆様にも改めて御礼を申し上げますとともに、会場にお集まりいただいた皆様にもう一度感謝を申し上げ、開会の挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

日本側1次モニタリングの紹介

大学評価・学位授与機構評価事業部国際課長

秦 絵 理

大学評価・学位授与機構の国際課の秦と申します。よろしくお願い致します。今日は、プログラムの関係者の皆様、学生の皆様から色々なお話を聞ける良い機会だと思っておりますが、始めに少しお時間をいただき、大学評価を行なっている私共、大学評価・学位授与機構が、なぜ、どのように「キャンパス・アジア」構想に関わっているのか、といった背景をお話させていただきたいと思います。

本日、私からお話するのはこのような内容です。まず、教育の質モニタリングの活動についてですが、これは、大学の教育の質向上を支援する質保証機関、すなわち私共のような大学評価機関と大学の連携した取組みだと思っていただけたらと思います。また、先ほど佐藤委員長からお話がありましたように、日本だけの取組みではなく、中国、韓国含めて、3カ国の質保証機関と大学が連携しているプロジェクトのご紹介になります。

モニタリング・プロジェクト実施の背景でございますが、始めに、「キャンパス・アジア」構想につきまして、皆さんご存知の方も多いと思いますが、おさらいをさせていただきます。この構想は、日中韓、3カ国の政府が大学間交流、連携を推進するものであり、3カ国の大学がコンソーシアムを組んで展開する教育プログラム10件がパイロット・プログラムとして採択されています。これらのプログラムは、3カ国の政府の共同審査により採択されており、日本では平成23年度の大学の世界展開力強化事業として5年間の補助事業という形で開始されています。規模観ですが、5年間でこういったプログラムに参加する学生数がどれ程か、これは当初の数ですが、日本に受け入れる学生としては1,000人程、日本から中国、韓国へ派遣をする学生数も1,100人程という構想です。

「キャンパス・アジア」構想時には、いくつか促進したい取組みが設定されています。国際的に連携した教育、ダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーといった共同教育プログラムを目指す取組み、積極的な単位互換、また単位互換を活用して行なうプログラムの工夫といったことが謳われています。これらの推進する取組みでは、共通して「質の伴った」や「質向上」といったキーワードが出てきます。ここで教育の質保証や質向上とはどういうことか、確認したいと思います。大学教育において保証すべき対象は、学生の学びの質と水準となろうかと思います。そして、この質と水準を保証するよう、大学が主体的に行なう活動が「質向上の取組み」や「質保証にかかる活動」とお考えいただけたらと思います。「キャンパス・アジア」を支える「質保証」ですが、まず、政府レベルで「日中韓の質の保証を伴った大学間交流に関するガイドライン」を策定しました。既にご存じの方も多いと思いますが、このガイドラインには、政府が行なうべきこと、大学が行なうべきこと、そして質保証機関など第三者機関が行なうべきことがらについて、簡潔に整理してあります。例えば、大学に対するガイドラインにおいては、内部質保証システムの構築、交流プログラムの効果的な実施、良質の学生支援といった三点に整理されています。そもそも日中韓の大学間交流プログラムの推進のために作られたガイドラインである

ものの、普遍的に書かれているもので、その他の国との連携を行なう際にも充分参考になるものと考えられます。

一方、3カ国の質保証機関レベルでは、2011年3月に日中韓質保証機関協議会を設立しました。協議会では、各国の質保証制度の相互理解をすすめること、また、3カ国の大学間交流を質保証の側面から支援していくことが当面の目的として謳われています。協議会は、共通の課題意識を持っています。ここに挙げたものは3カ国だけの課題ではなく、現在、グローバル化が進んでいる中で世界の質保証機関が共通して認識する課題として位置づけられると思います。まず一点目に、質保証において大学は、教育研究活動について目標に応じた活動が出来ているか、自ら点検して自己評価を行なって質の向上に努めるといったような流れがあると思います。こういった中で外部評価や第三者評価を受けるものと思います。海外の大学と連携した教育連携においては、自分の大学の中でマネジメントするだけでなく、パートナーの大学と協力した点検が必要ですので、様々な面で複雑さが増すということが想定されます。そこで、国際的な共同により質保証にも新たな観点が求められる可能性があります。二点目に、高等教育の発展経緯や文化が異なる国同士では、高等教育システムはもとより、質保証のシステムについても当然異なります。例えば、日本の大学設置基準で満たさなければならない要件が、中国や韓国の法律・規則では矛盾するという可能性があります。守らなければならない要件が国によって異なれば、質保証のあり方も異なってきます。したがって、複数の国の大学が共同して提供する教育の質保証とは、どのようなシステムで行なうべきか、どの物差しで考えていけば良いのか、といったことが課題として考えられます。三点目に、このような背景の中で複数の国の大学が共同して提供する教育の質保証について、各国の質保証機関も国境を越えて連携することが望ましい、ということです。先ほども少し触れましたが、異なる基準でそれぞれ自己点検や評価を行なうということは、例えば日中韓であれば、同じプログラムに関して3回、第三者評価の視点が入ることになるので、大学にとっても混乱を招く可能性があると考えられます。こういった背景があり、日中韓質保証機関協議会では国際連携を伴うプログラムの質保証の仕組みを共同で開発していくことを目指しています。そこで、政府が推進する「キャンパス・アジア」のパイロットプログラムにおける教育の質保証の活動を見させていただき、国際連携を伴う教育プログラムの質保証について、大学と一緒に考えていくのが、キャンパス・アジアのモニタリングプロジェクトです。

次に、実際のモニタリングにおいてどのようなことを行なっているかをご説明します。始めに、質保証モニタリングでの視点です。現場で教育プログラムを実際に運営している方々が、色々な計画をし、自己点検をし、改善をしてというPDCAサイクルがありますが、この流れを見させていただくのがモニタリングです。世界展開力強化事業における評価というものも別にあります。事業の評価においては、補助事業として計画の実施状況について、どこまで出来ているかが主たる視点になるため、実績評価的なものになります。モニタリングでは、質保証活動が展開されているかをみます。モニタリングの目的として3カ国の質保証機関が合意していることは、ここに挙げたような事柄です。まず、教育の質の観点からの優良事例を把握し、広く大学関係者が参照できるようにすることです。この目的に応じ、本日のシンポジウムがモニタリングで抽出した優良事例を発表していただく場となります。二つ目に、その後、3カ国の質保証機関が活用できる、国際連携を伴う教育の質保証に

関する共同ガイドラインを作成するとの目的を定めています。これは、日中韓中心の取組みですが、いずれはもう少し広い視野を持って普遍性の高いものを開発していくことを目的としています。

モニタリングのスケジュールでございますが、5年間の補助事業の期間の中で、2回のモニタリングを実施することと、3カ国は合意しております。1次モニタリングは、3カ国で基準や大きな枠組みを協議したうえ、それぞれの国での制度や質保証の文化を尊重して、まず、それぞれで作るということにしました。1次モニタリングは2013年から2014年にかけて3カ国で別々に実施されています。2次モニタリングにつきましては、まず、1次モニタリングの結果を共有して比較分析、その後、共同のモニタリングへ移すとのことで概ね合意しております。

続きまして、実際に採用した日本の手法の説明をします。モニタリングでは、一般に第三者評価で使われる手法を取り入れています。大学の自己分析から始まり、大学から提出された自己分析書の第三者による書面調査、個別の大学訪問調査、報告書の作成がこれにあたります。書面調査や訪問調査においてご協力いただいた方々とは、国際交流等に知見のある大学教員、大学等の職員、ならびに企業関係者の方々と、専門部会を作りご協力いただきました。本日も来ていただいておりますので、第3部で意見交換が出来るかと思えます。また、モニタリングは評価ではないため、大学との連携を重要視しました。モニタリングの手法から基準作りまで、採択校との連絡会を通じて何回か議論をしております。1次モニタリングの結果についても、昨年度の末に共有させていただきました。それまでの間も、良い取組みについては採択校同士で情報を交換し合い、取入れたと聞いております。更に、新しい取組みとして、質保証活動への学生の参画という視点を取入れました。モニタリング委員会とは別に学生部会を設けました。これは「キャンパス・アジア」プログラムに参加する学生19人で構成しており、昨年12月にワークショップを開催し、学生の提言書をまとめています。これにつきましても、本日第2部の後半で発表がございます。

次に基準についてです。各国の質保証機関は、大学の自己分析に際していくつかの基準を定めました。これは、どういった事柄について、どのような観点で質保証活動をモニタリングするのかを示すものです。ご覧の通り、始めに日中韓でもかなり協議をしましたので、基準は概ね似ています。ですが、それぞれの国で重視する点が少しずつ異なります。中国では、国際共同教育から得られる付加価値をモニタリング活動から見ていきたい、とのことです。韓国では、受け入れの際の学生支援体制は重要だと考えており、それぞれ特徴があります。

続きまして、こちらは日本の基準の少し細かい部分です。現在、大きく7項目ありますが、各基準に基づきまして、二つのサブカテゴリーごとに、取組みを抽出する視点の例を設けています。次の18番目と19番目のスライドで、例として、基準の「2-2 教育の内容・方法」を取り上げて、日本の基準の作りを少し説明させていただきます。一番上に書かれている「目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同で検討され、実施されているか」という点が基準です。この基準を基に各大学でイエスなのか、ノーなのかを分析します。その下には、基準に優れた取組みを抽出する視点例が書かれています。あくまでも例ですが、いくつか掲げて示しています。大学には、自己分析の際に、これらを参考に自らの活動のうち、優れていると思われるものについて書き出させていただきました。こちらは基準2-2の続きです。優れた取組みを総合して、この基準において質保証活動が進展しているか

を自己判断する際に参照する「段階判定の尺度と説明」を設けております。3カ国の大学間の共同性が高くなればなるほど、「優れて進展している」となる設計になっております。このような基準を基にプログラム実施側の大学に自己分析を行なっていただき、また、モニタリング委員会もこの基準を基に、パイロット・プログラムにおける大学の活動で優れた取組みを抽出していきましました。また進展度についても判断を行ないました。本日は優良事例集をお配りしておりますが、各大学のモニタリングの結果については、大学ごとに報告書を作成しています。本日、ホワイエにも並べてありますが、1次モニタリングの成果についてまとめた総括報告書を出版しています。ウェブサイトからもダウンロードできますので、是非ご関心のある方はこちらも合わせてご覧ください。また、先ほどの基準ですが、7基準が全て優良事例集の後ろのページに載っております。こちらも、大学の教育連携に携わっている方にはプログラムを設計していく段階で考えられる視点として、是非参照していただけたらと思います。

モニタリング結果の概要として、傾向を少しご紹介いたします。全部で7項目ある基準につきまして10 プログラムを見たところ、段階判定の分布を示したグラフがこちらです。パイロット・プログラムが開始し2年が終了し、3年目に入ったところでモニタリングを行なった結果です。教育の内容、目的、体制などについては進んだ取組みが多く見られました。一方、プログラムを修了した学生がまだそれほど多くないこともあり、3カ国共同で学習成果を計る取組みは少ない、全体的な運営体制は整備されていても、まだ内部質保証として恒常的に質保証を確認する活動が少ないといったことがわかりました。基準3と4にあたる取組みはこれからの課題だろうとモニタリング委員会では結論づけています。先ほどご紹介した、基準2-2の優良事例のご紹介が、こちらのスライド 22 枚目です。参加大学間で共通性の高いプログラムの実施として、共通科目や「キャンパス・アジア」科目などを設けている大学が多くございました。また、それぞれの目的に応じたカリキュラムの工夫も見て取れます。例えば、各国の歴史を当該国の高校の教科書を用いて学ぶ授業の開講など、国際連携ならではの取組みもございました。更に、学生の効果的な学習を促進する工夫などもみられました。一方、基準2-2において、今後、更なる取組みを期待する点をまとめたスライドがこちらです。より共同して、目標とする学習成果を明確に示し、それに基づいて教育内容・方法を発展させていくこと、また、中韓の大学の学位授与に関する情報をきっちり入手し、プログラムの相乗効果を高めること、研究活動を中心としたプログラムにおける教育指導の工夫や単位付与のための参加大学間の協議を更に進めることなどが挙げられます。

1次モニタリングの結果として忘れてはならないのが、学生からの提案でございます。こちらに簡単にまとめておりますが、学習面では、多くの学生が派遣前の研修に力を入れてほしい、選択科目を増やしてほしい、単位互換できる柔軟なシステムを作してほしい、留学先での学習までをサポートしてくれる一貫した指導教員がほしいなどと挙げています。生活面では、留学先の大学で窓口は誰なのかという不安を抱える学生も多かったようです。また、現地の学生ともっと交流をしたいという意見もありました。概して学生からは「キャンパス・アジア」のパイロット・プログラムが素晴らしい取組みであると聞いており、後輩に是非推薦できるよう、質改善に貢献するような声を発していきたいと学生部会から報告を受けています。

最後に、中韓の1次モニタリングについて少しご紹介をし、私からのお話を終わります。先ほど日本

の手法についてお話をしましたが、中韓でも似たことを行ないました。異なる点としては、中国については訪問調査をしなかったことです。代わりに電話インタビューを行ない、また、詳しい方法は聞いておりませんが、採択校の大学間で相互に評価しあうことを推奨したようです。韓国については、日本の手法に非常に似ており、強いて違う点は、自己分析書の書き方を事細かに指導をしたと見受けられる点です。自己分析書もかなり膨大な厚さになったと聞いております。中国、韓国の質保証機関と、モニタリングを行なった後の意見交換から聞いた中韓における結果について少しご紹介いたします。中国においては、日本の結果と同じように人材目標の設定はどの大学も3カ国でよく協議が出来ており、また、国際的な共同プログラムの特色性もよく考えて作られているとのことでした。同じように実施体制や教育についても、ほとんどが良好であると言っています。学生サポートについても、同じようなことですが、ソフト面ではまだ一層整備していける部分があるのではないかと言っています。大学における質保証活動と学習成果に対するアプローチについては、今後に期待したいとのことで、ほぼ日本の結果と同意見と見受けられます。韓国につきましては、韓国において「キャンパス・アジア」自体が一般の交換留学プログラムとどう違うか、比べてどうなのか、といった視点で見ると、このようなことが言えるのではないかと、という観点での意見を聞きました。「キャンパス・アジア」自体が共同学位をはじめとした学生交流の土台作り貢献しているとみているようです。また、地方大学の特性化において良い事例が見て取れた、教員の間でもティーチングにおいてチームとして取組む意識が上がってきている、また、日中韓の共通の関心事項を協議し、それを反映したプログラム作りが出来ているといった話が出てきています。今後の工夫が必要な点として、次のことがあげられます。一言で表せば、プログラムの更なる連携強化ですが、共同学位をどう実現していくかといった視点や、共通的に活用可能な学生満足度の調査ツールの開発、卒業生に対する進路モデルの提示などがありました。

以上が、現在までの1次モニタリングの状況でございます。駆け足の説明になりましたが、少しでもこれまでの質保証機関の取組みについて、ご理解いただければ幸いです。本日は、題目にもあるように、1次モニタリングの結果が示す優良事例を共有する場ですが、各大学での現場がどのように3カ国の間で話をしながら共同プログラムを開発してきたか、学内でどのような苦労があって、どう工夫して解決してきたかをご紹介していただきます。その中で、国際共同教育プログラムにおいて重要視しなければならない質保証活動とは何なのかを一緒に考える機会としていただけたらと願っています。また、今日は皆さん国際連携教育に関心のある方々がお集まりですので、色々なご意見を頂戴しながら、広い視点で、日中韓の枠も超えて連携教育を考えることができたと思います。

簡単ですが、私からの説明は以上でございます。優良事例集はお配りしていますが、関連する出版物として、1次モニタリングの成果をまとめた総括報告書及び自己分析の手法に関するハンドブックがあります。これらは、当機構のウェブサイトからダウンロードできますのでご覧いただきたいと思います。

拙い説明でしたが、ご清聴ありがとうございました。

日中韓の連携による教育の質モニタリング ー「キャンパス・アジア」の1次モニタリングー

NIAD-UEシンポジウム 「国際共同教育プログラムの質保証：
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは」
2014年11月27日（木） 於：一橋講堂

大学評価・学位授与機構



2

モニタリング実施 の背景



本日の話題

- モニタリング実施の背景
- 「キャンパス・アジア」のモニタリング
- 日本の1次モニタリング－手法、基準、スケジュール
- 日本の1次モニタリング結果（概要）
- 中国・韓国 の1次モニタリング



1

モニタリング実施の背景

キャンパス・アジア構想

- ◆ 日中韓の政府が推進する大学間交流・連携の促進
- ◆ 3か国の大学が連携して提供する教育プログラムに対する支援事業の実施（平成23年度～平成27年度*）
⇒10のパイロット・プログラムを共同審査により採択

* 日本における支援期間。
日本では「平成23年度大学の世界展開力強化事業」として支援



3

5年間で、
「キャンパス・アジア」プログラムに
参加する学生

日本に受入れる学生：1,030人
日本から派遣する学生：1,145人

4

モニタリング実施の背景

キャンパス・アジアと質保証

日中韓政府

- パイロットプログラムの選考に際し、共同ガイドラインを策定
日中韓の質の保証を伴った大学間交流に関するガイドライン（2010年12月）

日中韓の質保証機関

- 日中韓質保証機関協議会を設立（2011年3月）
 - 日本：大学評価・学位授与機構（**NIAD-UE**）
 - 中国：教育部高等教育評価センター（**HEEC**）
 - 韓国：大学教育協議会・大学評価院（**KCUE**）

⇒ 各国の質保証システムの相互理解
⇒ **3か国の大学間交流を質保証の側面から支援**

6

モニタリング実施の背景

キャンパス・アジア構想で推進する連携の特徴

- 質の伴った**国際連携教育**
- 共同教育プログラムを目指す取組み
（ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー等）
- 相互に単位互換の仕組みを工夫
- 連携した教育の**質向上の仕組み**

5

モニタリング実施の背景

日中韓質保証機関協議会

共通の課題認識

～国境を越えた連携・共同を伴う教育プログラムの質保証～

- 国際的な共同により質保証にも新たな観点が求められる可能性
- 複数国により提供される教育（共同プログラム等）は、国の質保証システムにとって新たな課題
- 第三者評価などの外部質保証システム側の体制を考えると、**複数国の質保証機関が連携することや、分担を行って相互に承認する**などの方法が望まれる可能性

⇒ **国際連携を伴う教育プログラムの質保証の仕組みの共同開発**

7

モニタリング実施の背景

日中韓質保証機関協議会

キャンパス・アジアのパイロットプログラムにおける**教育の質保証の取組み**を共同モニタリングし、**国際連携を伴う教育プログラムの質保証を試行**

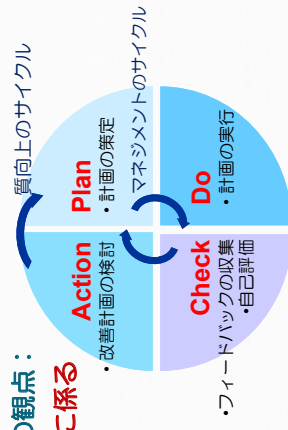
キャンパス・アジア のモニタリング



キャンパス・アジアのモニタリング

質保証モニタリングでの観点：

教育プログラムの展開に係るPDCA



＜参考＞大学の世界展開力強化事業における「中間評価」の観点
・・・補助事業としての計画の実施状況、補助金の使用状況

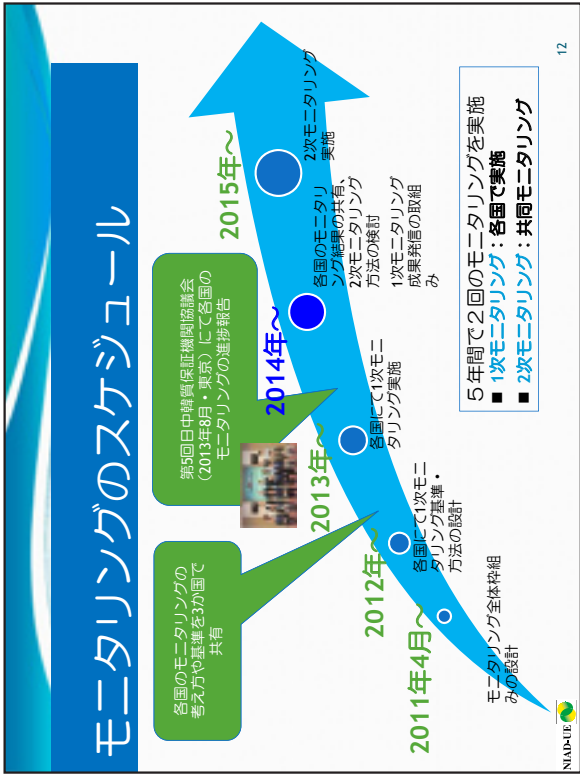
キャンパス・アジアのモニタリング

モニタリングの目的：

- **教育の質の観点からの優良事例**を把握し、広く大学関係者が参照できるよう、これらの情報を普及
- 日中韓の質保証機関が活用できる、国際連携を伴う**教育の質保証に関する共同ガイドライン**を作成



東アジアの高等教育の質保証・質向上を促進する
体制構築



日本の1次モニタリングの手法

■ 平成24年度	： 採択校との意見交換 (計3回の連絡会) モニタリング準備委員会 (計3回)
■ 平成25年4～5月	： 大学側の自己分析 (自己分析書の提出)
■ 平成25年6月～	： 書面調査 モニタリング基準に基づき自己分析
■ 平成25年7～10月	： 個別の訪問調査
■ 平成25年11月	： モニタリング報告書 (案) の策定
■ 平成25年12月	： モニタリング報告書 (案) の大学側への提示
■ 平成25年12月	： モニタリング学生会部会ワークショップ
■ 平成26年1月	： モニタリング報告書の確定
■ 平成26年2月	： 採択校との連絡会<結果の共有>

14



モニタリング学生会部会

The Monitoring Student Committee is a group of students from 3 countries, totaling 19 people, who are involved in the monitoring process. They are responsible for the following tasks:

- 「キャンパス・アジア」モニタリング学生会部会 (Monitoring Student Committee of Campus Asia)
- 3か国の計19人の学生で構成 (Composed of 19 students from 3 countries)
- 「キャンパス・アジア」についての学生ワークショップを開催 (2013年12月 於：東京) (Organize a student workshop about Campus Asia (December 2013, Tokyo))
- ワークショップの議論を「学生提言書」としてまとめ学生代表がモニタリング委員会で報告 (Summarize the discussion of the workshop as a 'Student Proposal' and report it to the Monitoring Committee through the student representative)

学生部会ワークショップ当日の記録映像はウェブサイトからご覧いただけます。
http://www.niad.ac.jp/english/campusasia/monitoring_student_committee.html

15

1次モニタリング基準：3国比較

3か国で基準の数は異なるものの、基準の基本構成はとも類似。各国が基準のなかで重視する視点が異なっている。

日本	中国	韓国
1. 教育プログラムの目的	1. 目的	1. 教育プログラムの目的および実現に向けた取組み
2-1. 実施体制	2. 実施体制	2. 学生支援システム
2-2. 教育内容・方法	3. 教育の実施	3. 教育内容
2-3. 学習・生活支援	4. 学生支援	4. 学習成果
2-4. 単位互換・成績評価	5. 質保証	5. 質保証システム
3. 学習成果	6. 学習成果	6. 学習成果
4. 内部質保証システム		

日本は、「単位互換・成績評価」を重視（基準2-4）

韓国は、「学生支援」を重視（基準2）

16



1次モニタリング基準：日本

基準	サブカテゴリー（優れた取組を抽出する視点的要素）
1. 教育プログラムの目的	a) 教育プログラムの目的（育成する人材像を含む）〈視点例6つ〉 b) 教育プログラムの目的の大学間での共有〈視点例3つ〉
2-1. 実施体制	a) 組織体制〈視点例4つ〉 b) 教職員〈視点例3つ〉
2-2. 教育内容・方法	a) 教育内容・教育方法〈視点例7つ〉 b) 学生受け入れ〈視点例3つ〉
2-3. 学習・生活支援	a) 学習支援〈視点例6つ〉 b) 生活支援〈視点例4つ〉
2-4. 単位互換・成績評価	a) 単位認定・互換〈視点例2つ〉 b) 成績評価・学位授与〈視点例4つ〉
3. 学習成果	a) 学習成果の測定と結果〈視点例4つ〉 b) プログラム履修後の状況〈視点例3つ〉
4. 内部質保証システム	a) 内部質保証システムの体制〈視点例5つ〉 b) 改善実績・将来計画〈視点例4つ〉

17



基準2-2 教育内容・方法

目的を達成するために適切な教育内容や教育方法が共同して検討され、実施されているか。

＜優れた取組を抽出する視点的例＞

a) 教育内容・教育方法

- 育成する人材像（例えば、東アジアにおけるグローバル人材のニーズ）に期待される知識・スキル・態度等の学習成果に適した教育内容を形成しており、そのことを体系的に分析している。
- 学生が履修する教育内容について、参加大学の間でカリキュラム構成や科目の権限を共有するとともに、一つのプログラムとして統合的・体系的な構成となるように意図している。
- 国際的な共同を行うことによる教育面での付加価値や国際競争力の向上が明確になっている。
- 海外での企業や公的機関等によるインターンシップ等の、プログラム目的に即した効率的な教育方法がとられている。
- 各国の言語や文化・社会の教育が効果的に行われている。
- 英語での授業の実施など、外国人学生が履修しやすい教育方法の工夫が行われている。
- 学生が移動することに適した教育方法（e-learningの活用や教員が出向いて行う共同指導など）がとられている。

b) 学生受け入れ

- 学生選抜の方法（基準や選抜の体制）を教育プログラムの目的や教育内容を踏まえて、参加大学間で共同して設定し、運用している。
- 参加希望者が適切な人数存在し、参加学生数の双方向性（交流のバランス）が実際に確保されている。
- 集約に受け入れた学生の構成やその学力水準（語学力を含む）が、教育プログラムの目的や教育内容に適したものであるとしている。

18



段階判定の尺度と説明（基準2-2 教育内容・方法）

尺度	各段階の説明
課題が頻っている	● 各大学内に開講されているカリキュラム構成や科目の情報が参加大学間で相互に把握されていない。教育内容と期待される学習成果との関係が明確でない。 ● 学生募集の方法が明確でない。計画した学生数が確保されておらず、参加大学間で偏りがある。
標準的	● 参加大学間でカリキュラムや科目の権限を共に把握し、学生が履修する内容の調整を行っている。教育内容が期待される学習成果に即して構築されている。国際的な共同教育に適応した教育方法がとられている。
進展している	● 計画した学生数が確保されており、プログラムの教育内容を学ぶのに適切な学力水準（語学力を含む）が確保されている。 ● 参加大学間でカリキュラムを共同して検討し、教育プログラムの目的を重視するために適切な教育内容となっている。国際的な共同を伴うことで実現しうる教育が行われている。国際的な共同教育に有効な教育方法が工夫されている。教育内容・方法と学習成果との関係が明確に分析されている。
優れて進展している	● 計画した学生数が確保されており、参加学生の選抜方針を調整して各大学で実施している。 ● 参加大学が強みを有する内容を連携させるなどとして体系的な教育内容を構築しており、国際的な共同教育によって、国際的にも優れて特徴的なものとなっている。教育内容・方法と期待される学習成果との関係の分析を行い、定期的に見直ししている。 ● 志願者が量・質ともに高く、学生の選抜を参加大学間で共同して決定した方針・方法によって行っている。

19





日本の1次モニタリング 結果（概要）



20

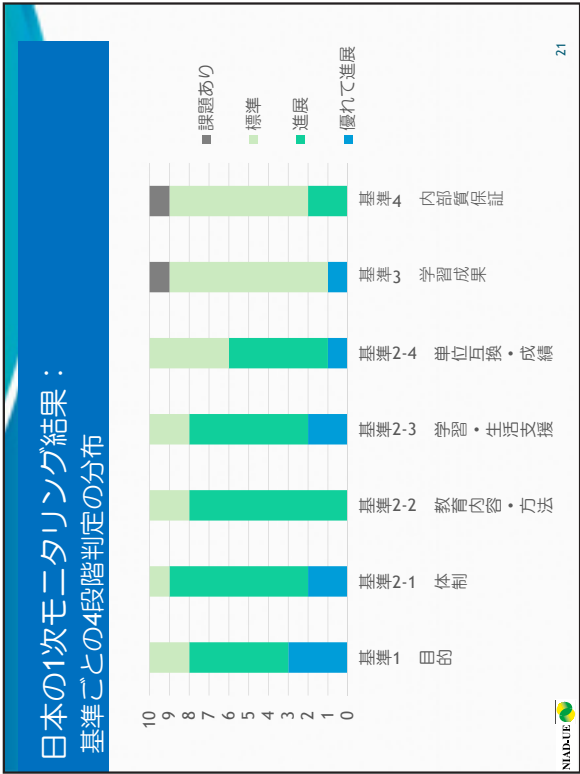
日本の1次モニタリング結果： 優れた取組みの例

参考：「優良事例集」
「モニタリングで抽出された「優れた取組み」と今後への期待」
http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/campusall/

- 教育内容・方法（基準2-2）**
 - プログラムの設定における相互連携
参加大学間で共同の意思決定機関である委員会の設置
参加大学間で共通性の高いプログラムの実施（共通科目やCAA用の科目等を設置）
移動キャンパス
- 特性や状況を意識したカリキュラム設定**
 - 各国や各大学の特徴を活かした内容（各国の歴史を当該国の教科書を用いて学ぶ授業など）
専門職人材としての育成像を強く意識した内容（国内外での実習・インターンシップの活用）
- 学生の状況やニーズを重視した内容**
 - 学生の状況に即したプログラム
研究活動を中心とするプログラムでの工夫
学習成果の証明における学生ニーズの把握（成績表における工夫、修了証の共同発行）
- 効果的な学習と相互理解のための方策**
 - 英語や母国語による授業の提供
派遣・導入のための事前学習やフォローアップ等
現地における語学・文化の学習等



22



日本の1次モニタリング結果： 今後の取組みに期待する点

参考：「優良事例集」
「モニタリングで抽出された「優れた取組み」と今後への期待」
http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/campusall/

- 教育内容・方法（基準2-2）**
 - 目標とする学習成果の明示、教育内容・方法の共同の開発
より具体的な教育内容・方法へと、共同で検討・実施していくこと
- 相手大学との学位授与に関する情報共有**
 - ダブル・ディグリープログラムにおいて、学位授与の審査を個別の大学が独立に行う場合には、参加大学間での審査基準や評価の観点等の情報共有がすすむこと
- 研究活動を中心とするプログラムでの工夫**
 - 学修の過程と成果に対する適切な評価と、それに基づき単位の授与のための参加大学間の協議
検討をささらにすすめること
- 学生の参加と相互交流の促進**
 - 同国出身の学生のみとの共同学習が生じがちな傾向を避け、3か国の学生相互の交流が深化でき
るような授業の工夫



23

学生からの提案 （「キャンパス・アジア提言書」より）

http://www.niad.ac.jp/in_kokusai/dkcouncil/na17_student_recommendations.pdf

学習面の改善点

- ✓ 派遣前の事前研修の実施
- ✓ 選択科目の拡充、他の授業への参加を認めてほしい
- ✓ 用意された授業以外にも単位交換できる柔軟なシステム
- ✓ スムーズに単位互換できる仕組み
- ✓ 留学先での学習をサポートしてくれる一貫した指導教員（アカデミックアドバイザー）の配置

生活面の改善点

- ✓ 留学先大学での責任者の明確化
- ✓ 奨学金支給のタイミングの改善（留学前に支給してほしい）
- ✓ 現地の学生、「キャンパス・アジア」以外の学生と交流できる機会の拡充

その他

- ✓ 就職活動に影響が出ない仕組みとすること
- ✓ 「キャンパス・アジア」の制度そのものをもっと周知すべき
- ✓ 異なる「キャンパス・アジア」の学生が交流する機会の拡充

中国・韓国の1次モニタリング手法

中国：

- 自己評価、大学間の相互評価、専門パネルによるレビュー、報告書作成
- 電話インタビュー（訪問調査の実施はなし）

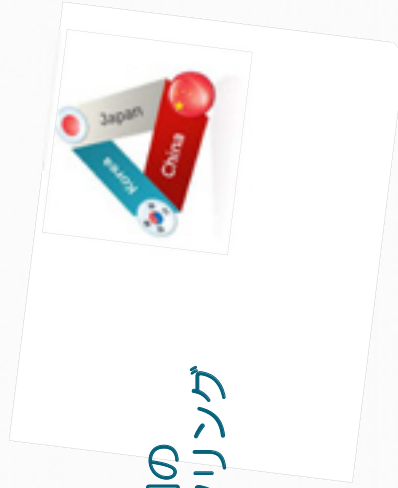
韓国：

- コンソーシアム連絡会、自己分析、書面調査、訪問調査、報告書作成
- 自己分析書を重視。モニタリング実施前にコンソーシアム連絡会を開催し、自己分析書の書き方を説明
- プログラム選定者がモニタリング委員。全ての訪問調査に参加

1次モニタリング基準：中国

Criteria	descriptions
I. Goals and Objectives	3 descriptions related to: Consistency with the contextual general goals of talent cultivation; goals based on analysis of the academic quality of the university; goals leading to double degrees/joint degree
II. Organization & Implementation	4 descriptions related to: Resources on/off campus to guarantee its implementation; written documents with partners; establishment of steering committee; goals and objectives are fully understood by personnel at different levels in the university
III. Teaching	4 descriptions related to: Curriculum design, a faculty team, cultivation of innovation and practical abilities of the students; a pedagogic and teaching methods
IV. Student Support	5 descriptions related to: Good learning environment; students' rights and obligations; language training classes; cross-culture exchange; respect foreign students' ethnic culture, national sentiments, religious belief
V. Quality Assurance	6 descriptions related to: Effective IQR systems; definite quality standards for all the work; regular inspection of the implementation of the project; a routine quality control of the teaching processes; assessment of the personnel; quality analysis; external panel for audit
VI. Learning Outcomes	5 descriptions related to: Scientific assessment system of learning outcomes; credit transfer system; satisfaction survey among students; a follow-up system for the graduates; a result of the evaluation of the learning outcomes and surveys

中国・韓国の 1次モニタリング



1次モニタリング基準：韓国

Criteria	Sub-criteria
1. Purpose of the Academic Program and Efforts of Fulfillment (10%)	1-1 Validity
	1-2 Efforts of Achievement
	2-1 Admission System
2. Student Support System (20%)	2-2 Campus Life Support
	2-3 Learning Support
3. Contents of Academic Program (30%)	3-1 Design & Management of Curriculum
	3-2 Design & Management of Extracurricular Activities
	3-3 Grading System & Credit Transfer
4. Learning Outcome (20%)	4-1 Academic Achievement
	4-2 Student Satisfaction
5. Quality Assurance System (20%)	5-1 Self-Review
	5-2 Quality Improvement Cooperation System

28



中国の1次モニタリング結果（概要）

（報告書の結論部分より主なもの）

- 「**目的設定**」
 - ほとんどのプログラムで、3か国の協議による明確な人材目標を設定
 - 各プログラムにおいて、国際的な教育プログラムの特色性と付加価値がみとめられる
- 「**実施体制**」、「**教育**」
 - ほとんどのプログラムにおいて、基本的な組織・実施と教育活動が良好に実施
- 「**学生サポート**」
 - ほとんどのプログラムで、学生にとって満足な支援システムを整備
学習指導や相談サービス等「ソフト」面ではまだ整備すべき点がある
- 「**質の保証と学習成果**」
 - 全体的に今後の取組みに期待
 - プログラムの実施プロセスにおいて、「質」、「学生の発展」、「学習成果の到達」の意識をしっかりとつづける必要がある

29



韓国の1次モニタリング結果（概要）（1）

（報告書の序論・結論部分より主なもの）

- 「**キャンパス・アジア**」の成果：
（個別大学レベルで実施されている既存の交換留学プログラムと比較して、「キャンパス・アジア」パイロットプログラムの妥当性はどうか）
 - 日中韓の大学の在学生間の交流が本格化。共同学位プログラムをはじめ、システマティックな学生交流が可能な土台作りが進展
 - 参加学生は「キャンパス・アジア」をポジティブに評価
 - 「キャンパス・アジア」を通じて優秀な学生を受け入れ、大学広報のための主要戦略として活用しており、地方大学の活性化における良い事例としても評価できる
 - 夏学期を活用した集中プログラムを開発、日中韓参加大学間の相互交流を促進
 - 教員間のチームティーチャリングを通じて相乗効果もたらされ、これまでになかった新しい学習モデルを確み出せるなど、スローガンではなく可視的成果のある実質的教育協力を具現化することができた
 - 日中韓の大学が共同開催する国際学術大会を通じて教員のみならず大学院生が参加、研究結果を共有
 - 日中韓の共通の関心事が強調され、これを反映した共通科目開発の努力が加速化
 - 国際的な高等教育の質保証、単位・学位認定に関する政府／質保証機関、個別大学レベルの進化した議論が展開

30



韓国の1次モニタリング結果（概要）（2）

（報告書の序論・結論部分より主なもの）

- 「**キャンパス・アジア**」の効果を高めるために工夫が必要な点：
 - CAの安定的な継続のため、多様なルートを通じて課題に取り組む必要
（例：学術セミナー開催、メディア活用）
 - 3か国の政府レベルの積極的な努力、採択プログラムや大学レベルで解決できない制度的・政策的問題解決に取り組む必要
 - 3か国の異なる制度により、最終目的とする共同学位をどのように実現するかについて時間をかけて工夫が必要。大学側のみならず、政府レベルの法的措置を含む協力と支援が必要
 - 韓国側の採択プログラムで共通的に活用可能な学生満足度調査ツール（派遣・受入両方）の開発と定期的な実施。その結果を自己分析書に記載することで相互比較可能にする必要。
 - CAの卒業生に対し、進路モデルを提示する必要。政府レベルでの積極的な支援も必要
（例：CAに参加した学生が日中韓関連の国務機関に就職／インターンシップできる機会を与える）。これにより、CAの可視性を高め、参加を促す効果が得られると考えられる。
 - 学生が修了後につなぐつながりを維持できる仕組み
（例：同窓会、プログラムレベルの共同ウェブサイト）

31



キャンパス・アジアの経験から見えるものは

国際共同教育プログラムの質とは？

学生経験の質向上に何が大切か？

- ・「キャンパス・アジア」実施大学（プログラム）の経験
- ・ 参加学生の経験
- ・ 質保証機関の経験
- ・ 「キャンパス・アジア」以外の国際共同教育プログラムの経験

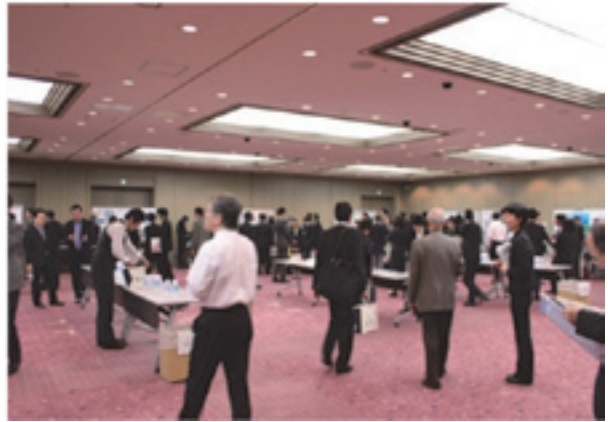
ご清聴ありがとうございました

「キャンパス・アジア」モニタリング
ウェブサイト
(日本語版・英語版) を開設しています
[http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/
campusasia/](http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/campusasia/)



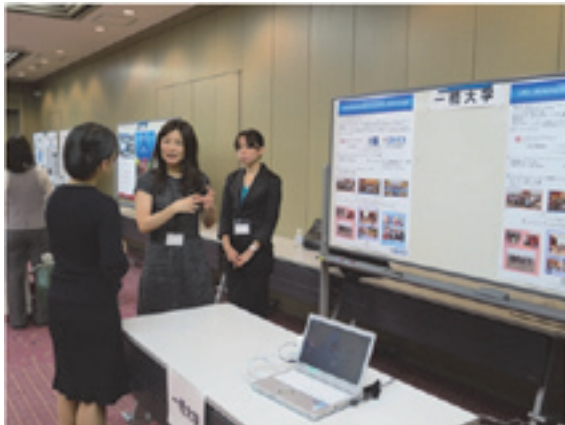
ポスターセッション

「第2部：各論」に先立って、「キャンパス・アジア」のパイロットプログラム担当者によるポスターセッションが開催された。各プログラムとも特性および進行状況を説明したポスターやパンフレット等、工夫に満ちた資料を用いた意欲的な展示をおこなった。各ブースでは来場者との熱心な質疑応答が交わされ、共同運営プログラムへの関心の高さがうかがわれた。



ポスターセッション会場の様子

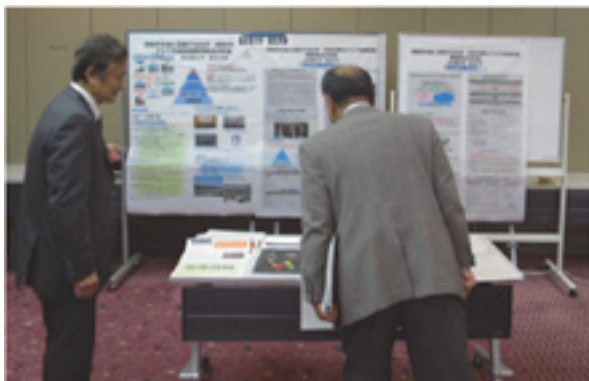
－各パイロットプログラムによる展示ブースの模様－（「第2部」発表プログラム順）



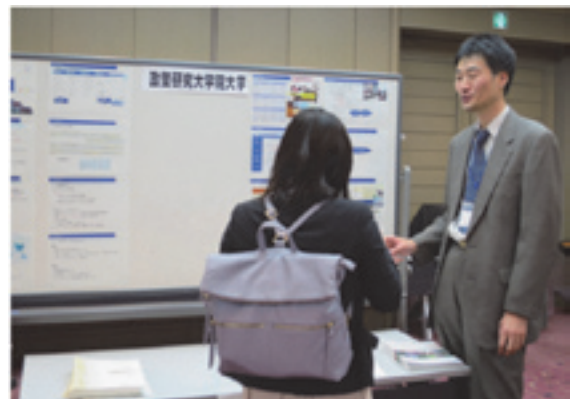
一橋大学



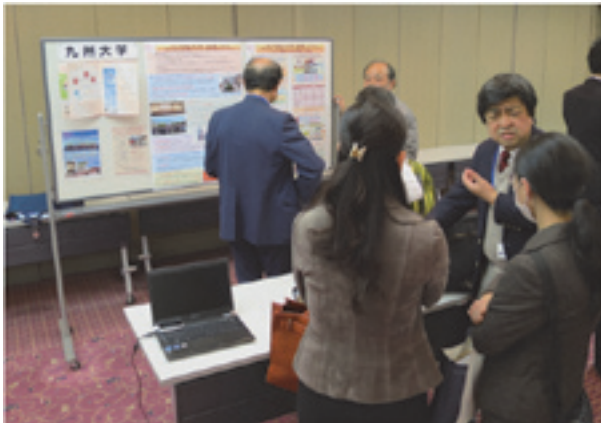
東京大学



名古屋大学・東北大学



政策研究大学院大学



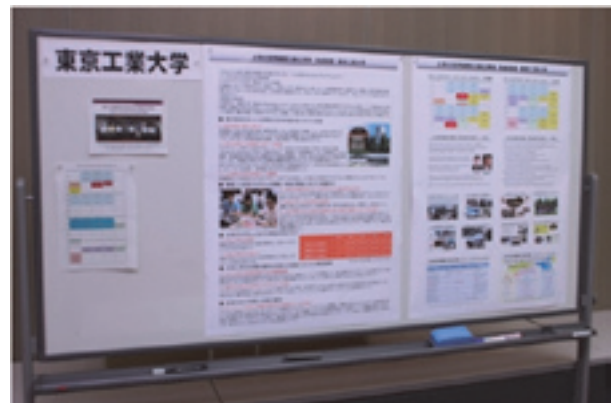
九州大学



神戸大学



立命館大学



東京工業大学



岡山大学



名古屋大学（法）

ポスターセッション担当者一覧（「第2部」発表プログラム順）

一橋大学

宮崎 れい子
浦 綾

一橋大学大学院国際企業戦略研究科特任助手
一橋大学大学院国際企業戦略研究科特任助手

東京大学

小川 琴子

東京大学大学院公共政策学教育部学術支援専門職員

名古屋大学・東北大学

加藤 清則

名古屋大学大学院理学研究科研究員

政策研究大学院大学

細江 宣裕

政策研究大学院大学政策研究科准教授

九州大学

三淵 未来

九州大学「キャンパス・アジア」テクニカルスタッフ

神戸大学

岡本 宜高

神戸大学大学院国際協力研究科教育研究補佐員

立命館大学

金 泰勲

立命館大学文学部講師

東京工業大学

原 正彦

東京工業大学大学院総合理工学研究科教授

岡山大学

云 洪凌

岡山大学グローバルパートナーズ事務職員

名古屋大学(法)

佐藤 綾

名古屋大学大学院法学研究科特任講師

第2部

各 論

1. 基準横断的テーマ

一橋大学、東京大学

2. 中韓との協働による教育

名古屋大学・東北大学、政策研究大学院大学
九州大学、神戸大学、立命館大学

3. 日中韓学生交流に対応した環境づくり

東京工業大学、岡山大学、名古屋大学(法)

4. モニタリング学生部会

「キャンパス・アジア」プログラムを経験した学生による発表

一橋大学 「アジア・ビジネスリーダー・プログラム」

一條 和 生

(一橋大学大学院国際企業戦略研究科長)

＜発表の概要＞

今回は、アジア・ビジネス・リーダー・プログラム(ABLP)の設計を中心に紹介したい。

本プログラムの母体となる本学大学院国際企業戦略研究科の MBA プログラムは、世界に向けた経営大学院として、9月開始の学事暦かつ全て英語で授業を行うこととし、2000 年に始動した。

MBA プログラムへの入学希望者には、TOEFL および経営大学院への入学希望者を対象とした入学適性テスト GMAT を課しているところであり、MBA プログラム入学者の GMAT スコアの平均は世界の名立たる経営大学院と同レベルに達している。また、学生の8割が外国人であり、アジアを中心とした様々な出身国の学生で構成され、多様性のあるプログラムとなっている。

MBA プログラムは1年制および2年制の2種類が存在し、ABLPは主に2年制の学生を対象に実施している。当初から、世界の代表的な経営大学院と1対1の連携を結び、学期間の短期留学を実施していたが、昨今、企業のオープン・イノベーションへの移行に伴い、世界の経営大学院の連携の在り方としても1対1からネットワーク型モデルに大きく変容しており、ABLPもこのような潮流の中に存在する。

今後の世界の中心はアジアであり、アジアの中心たる日中韓で、将来のリーダーを育成していこうという共通認識の下、2011 年に北京大学、ソウル大学校、一橋大学の戦略的提携“The BEST Alliance”が締結された。The BEST Alliance の MBA に関する活動が Campus Asia 構想プログラム、つまり ABLP として採用され、ダブル・ディグリープログラム、学期間の交換留学プログラム、3週間の短期集中プログラム(DBiA)プログラムが順次開始されるに至った。The BEST Alliance では、3大学の教員間で頻繁なコミュニケーションも図っており、さらに、年に1回のシンポジウムにおいてその年の活動の総括、次年度の計画の議論を行うことで、強固な信頼関係を構築している。

経営大学院の特性として、初年次で学ぶ内容を含めて、カリキュラムが世界で標準化されていることが挙げられる。また、AACSB(The Association to Advance Collegiate Schools of Business)、

EQUIS (EFMD (European Foudation for Management Development) Quality Improvement System)という認証団体に応募できることが世界の経営大学院として認められることに繋がる。当該認証の応募基準に沿う基盤づくりを行うとシステムが共通化していくことや、GMAT を利用しての同レベルの機関検索が可能であることから、3大学間の連携は容易であった。

最後に、実現のイネーブラーとして、優秀なスタッフの存在と事務スタッフの強力なサポートがあることを紹介したい。また、本プログラムは、イノベーションやグローバル化への先進的実験として本学本部からも期待もされているところである。

提携大学

中国:北京大学

韓国:ソウル国立大学校

NIAD-UEシンボジウム
国際共同教育プログラムの質保証

アジア・ビジネス・リーダー・プログラム

27 November, 2014

一橋大学大学院国際企業戦略研究科
研究科長 教授
一條和生


The Global Knowledge Hub in Tokyo

©2014 Hitotsubashi University. All rights reserved.

Our Students
-Class of 2014-

Average Age
• 31

International
• 79%
• From 14 countries

Female
• 36%

Average Work Experience
• 5.8 years

GMAT
• Mean 606
• Median 600
• Highest 770



Hitotsubashi ICS-Global B-School

• Full-Time MBA Program, all classes in English (全て英語で教えるMBAプログラム)

• School Calendar starts in September (欧米MBAと同じ9月スタートのカリキュラム)

• One of Japan's first graduate-level "professional schools" approved by MEXT (国立大学初の専門職大学院 (文科省認可) の一つ)


The Global Knowledge Hub in Tokyo

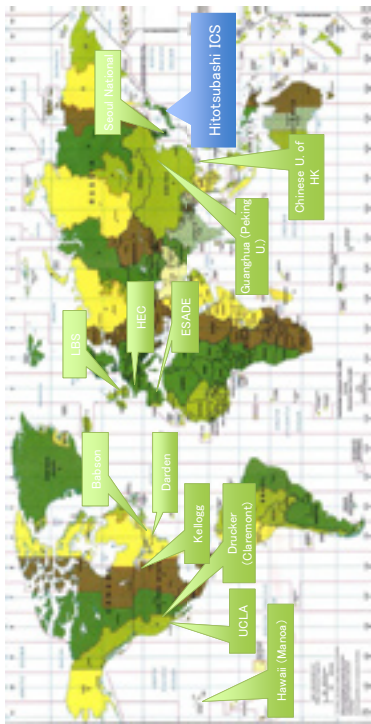


Our Programs

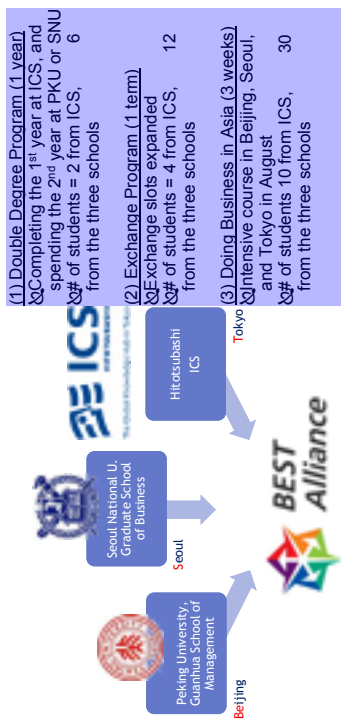




Our Partners

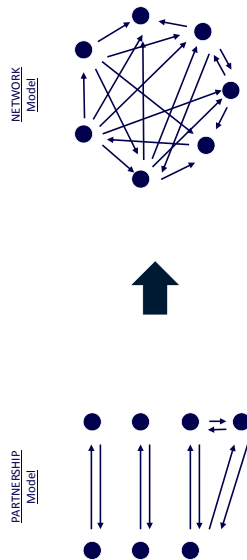


The BEST Alliance (2011-)



MBA、ファカルティリーサーチ、エグゼクティブ教育に関する戦略的提携

Network Modelへの変化



The BEST Allianceの歴史

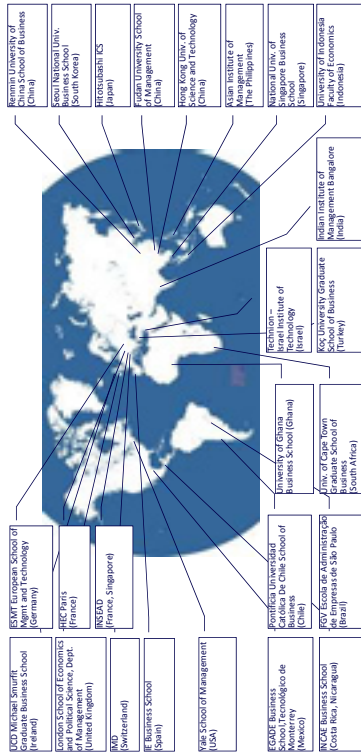
- 2010年春：3大学連携の議論が起こる
 - ファカルティ間の交流が経緯
 - ICSとSNUとの2校間連携協定にPKUが参加する形でThe BEST Allianceをスタート
- 2011年1月：The BEST Alliance三校間連携協定締結
- 2011年10月：The BEST AllianceのMBAに関する活動がCampus Asia構想プログラムとして採用される
- 2012年1月：専門のスタッフ（2名）の採用、本格的な活動のスタート
- 2012年8月：第一回DBA実施
- 2012年10月：Exchange programスタート
- 2013年9月：DDスタート

ABLP概要

- Campus Asiaの採択プログラムとして平成23年度より開始。
- 目的
 - 日中韓の将来のビジネスリーダーを教育するためのカリキュラム開発。
 - 教育の質に関する共通の基準作成：学生の評価、カリキュラムの評価、3大学間の単位認定に関する基準
 - アジア企業の将来のための人材を育成
- プログラム
 - Double Degree Program (1 year): Completing the 1st year at ICS, and spending the 2nd year at PKU or SNU
 - Exchange Program (1 term)
 - Doing Business in Asia (3 weeks) : Intensive course in Beijing, Seoul, and Tokyo in August

GNAM: Global Network for Advanced Management

Network of 27 business schools – Africa (3), Asia (9), Europe (7), Middle East (2), Latin America (4), Canada (1), and U.S. (1).



The BEST Alliance

- 3年間の活動を経て強固な連携基盤が作られる
- DBIA program、Exchange Program、DDの定着
- フォカルティー間の信頼のネットワーク
 - 頻繁なコミュニケーション
 - 必要であればすぐに英語でSkypeを使ったコミュニケーション
 - Face to face meetingも必要であれば開催
- 年に一回のThe Best Symposiumで一年の成果を総括、次年度の計画を議論、信頼のネットワーク構築

Global networkのさらなる推進：それがB-school発展（生き残り？）の基盤

GNAM Programs

1. Global Network WEEK
 - One week intensive program at 10+ locations
 - Twice a year: October and March
 - Students: Can choose 10+ programs including one at home.
 - School: Responsible for hosting one week program at home institution.
2. Global Network COURSE
 - Online, participation-based course
 - Students: Selected from 23 member schools
 - School: Yale provides a pilot course on Competition Law using IE's Adobe connect platform
3. Global Network CASES
 - Co-development of cases (paper-based, online, video-format, etc.)
4. Global Network Week for Alumni (2015)
 - In the future, executive education possibilities

Global Network Week, March 2014

One-week Intensive Program in March 2014
Hosted by 12 GNAM Member Schools

Innovation: x Globalization: Japan Style



13

実現のイネーブラー

- 優秀な担当スタッフメンバー
 - バイリンガル、プロフェッショナル、献身性
- スタッフの強力なサポート
 - 国立本部、文部科学省、Campus Asia Team間のネットワーク構築
- 大学本部からの期待
 - グローバル化への先進的実験との位置付け
- ファカルティへのコミットメント
 - Program in Charge 制



15

B-School連携の基盤

- プログラムの世界標準化
 - カリキュラム、システムの標準化
 - AACSB, EQUISという二大世界的学位認証機関の存在：標準化を促進
- ファカルティ間のネットワーク
 - 国際的なB-schoolで働く、いわば「国際労働許可証」としてのアメリカのトップB-schoolのPh.D：皆が「同じ釜の飯を食べた仲間」
- 適切なパートナー選定のインフラの存在
 - GMAT Score



14

東京大学 「公共政策・国際関係分野における BESETO ダブル・ディグリー・マスタープログラム」

宮 本 弘 暁

(東京大学大学院公共政策学教育部特任准教授)

＜発表の概要＞

社会・経済の今日的課題の解決には、公共政策、国際関係学が非常に重要であり、本プログラムは、この分野について次世代のアジアのリーダー育成を目的として構築されたものである。

本プログラムでは、先例のない3方向のダブルディグリー(DD)・プログラムや、交換留学プログラムを開設しており、参加学生は3か国での学修が必須となる。本プログラムは大学院レベルであり、専門的な科目を英語で学ぶことで言語の障壁を取り払いつつ、日中韓の文化理解のため各国の言語も学び、多文化理解も促進している。また、毎年3か国の学生が一堂に会し、その時々で、アジアが抱える問題について学生・教員が議論するサマースクールや、リーダーシップを発揮し、世の中に貢献するために必要となる、現地企業や国際機関でのインターンシップなど、現地での就業体験も実施し、さらには将来につながるネットワーク形成にも力を入れている。

プログラムは、DD プログラムと交換留学プログラムの 2 種類がある。DD プログラムの場合、例えば、東京大学とソウル大学校で各1年間、北京大学で半年履修すると、東大の公共政策の修士号、ソウル大の国際関係の修士号が授与される。交換留学は、東大で1年間、ソウル大と北京大学の2大学で各半年間履修すると、東大の修士号と2大学の認定証が授与される。

3大学間で DD・交換留学プログラムを実現するに当たって、教育の質は極めて重要になる。本プログラムでは、3大学が自大学の教育の質の保証をする仕組みを構築している。とりわけ、教育内容、教育方法、学生の支援体制を各大学が自己検証しながら質を確保している。質の高いカリキュラムを提供することで、グローバル化の進展に伴う課題を適切に認識・分析し、政策的なインプリケーションを考案して、実際に実行できる人材、また、国際的なコミュニケーションの手段として高度な英語能力を持つ人材を育成することが本プログラムの重要な目的である。さらに、3大学での DD プログラムや交換留学プログラムの実施に際して、単位認定や成績管理、学位授与のプロセスの明確化が不可欠であるため、単位の算出方法のルール化や、修了要件を比較した上で学位の付与について議論するなど、学びのプロセスを明示する取組みを考えている。また、留学生のサポート体制も3大学で連携している。

2013 年度には、CAMPUS Asia に特化した「公共政策キャンパスアジアコース」を本大学院内に開設し、毎年決まった人数(10 名)を入学させることで、学生のモビリティにバランスを持たせるようにしている。

その他、相互訪問等によって教職員同士の交流・議論を促進させていることや、広報活動を充実させて質の高い学生を維持しつつ、発信を強化していることが大きな特徴となっている。

提携大学

中国：北京大学

韓国：ソウル国立大学校



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO







CAMPUS Asia プログラム概要

- 先例のない**3方向**ダブル・ディグリー・プログラム
 - BESETO (BEIJING-SEOUL-TOKYO) の3大学からなるコンソーシアム
- 3大学院の間での**交換留学・ダブル・ディグリー・プログラム**
 - 参加学生は3か国で学ぶ体験をする
- 大学院レベルの英語によるプログラム
 - 公共政策・国際関係分野





CAMPUS Asia プログラム概要



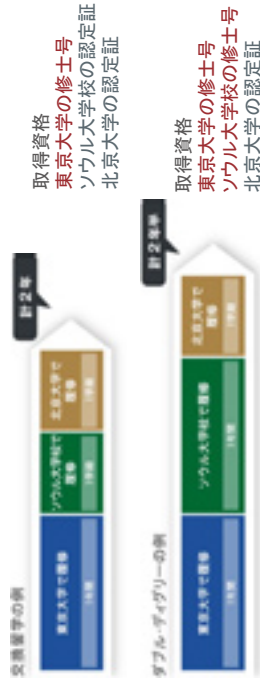




CAMPUS Asia プログラム概要

- 日中韓の言葉も学び、多文化の視点を持つ「語学教育」
- 3カ国の学生が一堂に会する「サマースクール」の実施
- 現地就業体験
 - 各国(日本・韓国)の現地企業や国際機関などでのインターンシップ
- 将来につながるネットワークの形成

交換留学・ダブルディグリー



- ・ **交換留学**: 出身大学で1年、他の2大学で1学期ずつ学び、単位の相互認定によって、**出身大学の学位及び他の2大学による認定証**を取得
- ・ **DD**: 出身大学で1年、次の大学で1年、さらにもう一方の大学で1学期間学び、**2つの学位と1つの認定証**を取得

CAMPUS Asia

5

「質」を参加大学が保証

- ・ **単位の相互認定、成績管理、学位授与に至るプロセスを明確化**
 - ①相互で単位あたりの授業時間をもとに換算方法をルール化、②各大学の修了要件を比較、③コアコースについては、単位の読み替え先として対応する科目を事前に協議の上一覧にまとめ、④学生の一般的な履修モデルを提示する
- ・ **学生の履修の不安を解消する環境整備**
 - 入学、留学、帰国、卒業まで、担当教員とスタッフが一貫して相談に応じる体制。各国スタッフの連携によるサポート体制。
- ・ **2013年度より「公共政策キャンパスアジアコース」を新設**

CAMPUS Asia
CAMPUS Asia

7

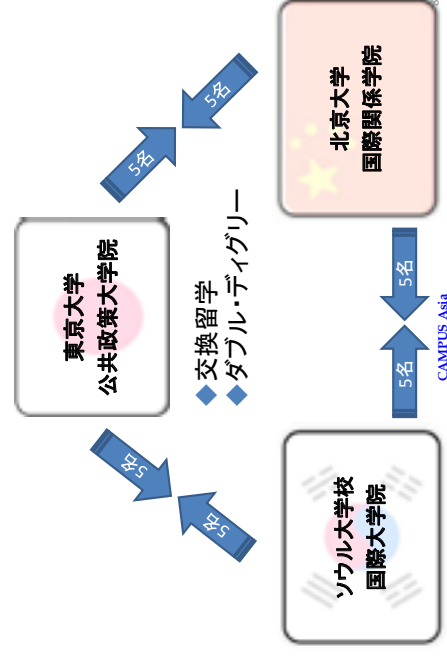
「質」を参加大学が保証

- ・ **「教育内容」「教育方法」「支援体制」などを参加大学が自己検証**
- ・ **質の高い教育**
 - 世界トップクラスの公共政策、国際関係の大学院とのダブル・ディグリー実施により、世界的に通用するカリキュラムを構成
- ・ **人材育成ニーズに合った教育内容**
 - グローバル化の進展に伴う課題を適切に認識しリーダーシップを発揮できる政策担当者、国際的なコミュニケーションの手段として高度の英語の能力を持つ人材の育成

CAMPUS Asia

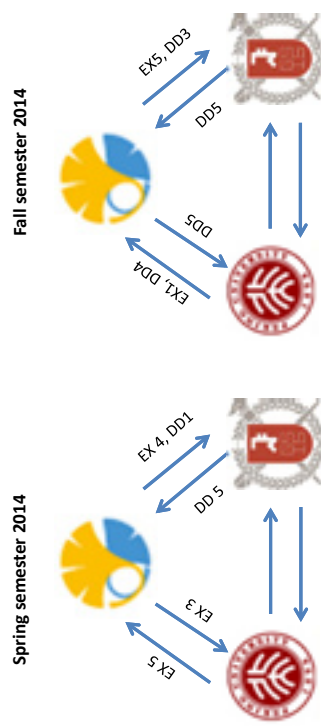
6

学生のモビリティ(基本)



学生のモビリティ(実際)

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO



CAMPUS Asia

9

その他特徴

GraSPP
THE UNIVERSITY OF TOKYO

- 相互訪問等により**職員同士の交流**を促進
- 広報活動の充実
 - ホームページ、動画、現地レポート

CAMPUS Asia

10

名古屋大学・東北大学 「持続的社会に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成」

土 井 隆 行

（東北大学大学院薬学研究科教授）

<発表の概要>

本プログラムは、日中韓の大学6拠点から発信する化学のスペシャリストの育成を推進している。大学院、特に博士課程（後期）の学生が中心であり、日中韓の提携6大学の化学系研究室に所属し、研究活動を通じた実習を行うことが特徴である。学生は、自身の研究の高度化、または、異なる分野を選び研究の幅を広げるといういずれかの目的でテーマを設定することが可能であり、学生のニーズに合ったプログラムを組み、研究室とのマッチングを行う。実際の派遣の前にシンポジウムやセミナー参加による国際交流の促進や短期留学によって、学生が長期留学を実施する前に準備段階の支援を行うことも特徴の1つである。

留学決定のプロセスとしては、留学を希望する学生はウェブ上で閲覧可能な「ラボリスト（研究室一覧）」をもとに研究室を選択し、指導教員に留学時期を含めた相談を行い、実際の留学先を決定する。なお、本プログラムは、一律の内容ではなく、学生個々のニーズに合ったプログラムを組んでいくものである。

単位認定の方法は2通りある。1つ目は、留学する学生が予め派遣先大学の教務体系に合わせて単位を申請するものであり、この場合、派遣先大学による単位判定を経て修得し、派遣元の大学が認定するというプロセスを経る。例えば、ソウル大学校や浦項工科大学校では、留学前にウェブ上で単位の事前申請が必要なため、予め情報を伝えた上で、学生が必要な手続きを行う。2つ目は、留学による研究活動が評価されて得られる単位であり、留学後に学生が留学先大学に研究報告書を作成し、留学先大学の担当教員が評価した上で、派遣元大学の担当教員がその評価を基に学生にヒアリングを行って単位を認定する、というものである。

また、学生は留学後に報告書を派遣元大学に提出し、留学修了書が授与される。この留学修了書を用いて、学生は就職活動時等に、参加したプログラムの内容を説明できるようにしている。さらに、留学後に、インパクトファクターの高い雑誌へ共同研究成果を投稿し、掲載されたことや、上海交通大学の博士課程学生が、東北大学の助教に着任したという好例も生まれている。

留学支援に限らず、サマースクール・短期留学も支援し留学につなげていく、という広い支援を行っており、例えば、サマースクールでは学生自身によって海外学生の招待も含めて国際会議を企画・運営し、学生交流・発表会を実施している。その他、連携大学で行われる討論会やセミナー、シンポジウムへの参加等、実際に相手大学に赴く機会や、自大学の留学生のティーチング・アシスタントを担当することによる国際交流を設け、留学しやすい環境を整備している。

提携大学

中国：南京大学、上海交通大学

韓国：ソウル国立大学校、浦項工科大学校

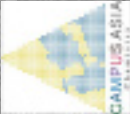
平成23年度 大学の世界展開力強化事業
「キャンパスアジア」モニタリング成果発信シンポジウム

持続的・社会的に貢献する化学・材料分野 のアジア先端協働教育拠点の形成

名古屋大学・東北大学

構想責任者
関 隆広 名古屋大学大学院工学研究科・教授
田中健太郎 名古屋大学大学院理学研究科・教授

構想責任者
森田 明弘 東北大学大学院理学研究科・教授
土井 隆行 東北大学大学院薬学研究科・教授



本プログラムの特徴

- 日中韓連携6大学間相互で、提携6大学の化学系研究室に、一定期間所属し、**研究活動を通じた実習**
- 学生本人が自分の研究テーマに近い分野を選び研究を高度化する、あるいは異なる分野を選び研究の幅を広げる、これを**マッチング**
- 3ヶ月～12ヶ月**の研究室留学
- 実際の**派遣の前**にシンポジウムやセミナーなどで交流1ヶ月以内の短期受入・派遣システムもあり




日中韓の参加大学

持続的・社会的に貢献する化学・材料分野のアジア先端協働教育拠点の形成



ソウル国立大学校
南京大学
上海交通大学
浦項工科大学校
東北大学
名古屋大学

アジアの中核拠点から発信する
化学のスペシャリストの育成

学術交流・産業界との交流
によるグローバルな視野を
持つ世界の化学材料分野の
リーダーを輩出

留学決定のプロセス

学生：ラポリスト(研究室一覧)から留学希望研究室を決める

指導教員の承認 → 派遣元CAでの申請書審査

マッチング ↓ **開始時期、期間** → **研究により個々異なるプログラム**

受入教授へ打診 → 受け入れ大学CAへの**申請書提出**

受け入れ大学の担当オフィス等での審査

受け入れの決定・受入通知

留学手続きを開始

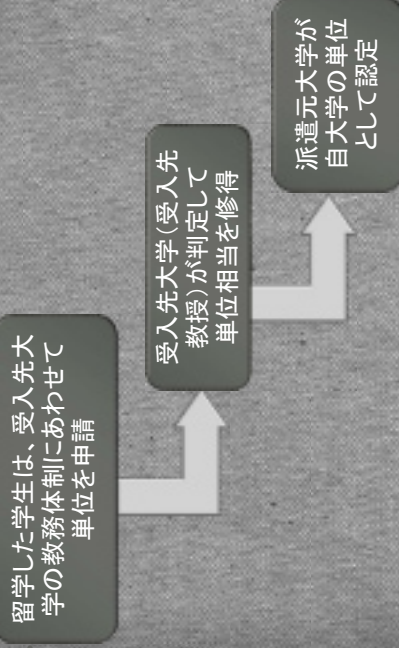
ラボリストに記載している事項

- ・連携大学キャンパスアジアメンバー
研究室一覧(☆エクセル管理で毎年更新)

記載項目

- ・部門、研究室
- ・教授氏名、教授の e-mail address
- ・研究キーワード
- ・研究室URL

留学の単位認定 (1)



申請書の記載要求項目

氏名・所属大学等のほか、下記項目を記載する。

1. 派遣希望期間
2. 受入大学・研究室
3. 学部/修士/博士課程の研究テーマ
4. 応募動機・研究計画
5. 派遣元大学の指導教員の署名

別添 英語能力証明
指導教員推薦書
(研究能力証明)

留学の単位認定 (2)

研究活動認定

留学による研究活動をどのように評価するか

- ・学生は、受入先大学へ留学で行った研究報告書を提出する
- ・受入先大学の該当分野の教員が審査し評価する
- ・派遣元大学の教員が、学生が「受入先大学へ提出した報告書」、「受入先教員の評価」及び学生へのヒアリングで単位を認定する

留学で修得する単位

名古屋大学

東北大学

国際協力共同研究(4)

海外特別研修(2)

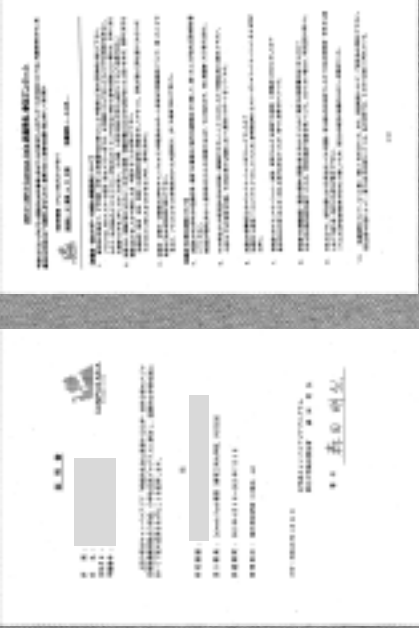
海外研修(2)

「授与する単位名称(単位数)」

派遣元大学において証明

留学証明書

アンケート



受入先大学において評価

留学報告書

留学修了書

成績証明書



留学から生まれた論文発表リスト

南大大学から<東北大学>へ留学

1. **Yu, Ren D.**, Pinkovitz, Yoon, K. Kim, Li-Min Zheng, B. K. Breedlove, and M. Yamashita, "Dry(III) Single-Ion Magnets Showing Extreme Sensitivity to (De)hydration," *Inorg. Chem.* **52**, 8342–8348 (2013)

2. **Zhikuan Zhou**, Yi Chang, Soji Shimizu, John Mack, Christian Schütt, Rainer Herges, Zhen Shen, and Nagao Kobayashi, "Core-Modified Rubyrins Containing Dithienylathene Moieties," *Angew. Chem. Int. Ed.* **53**, 6563–6567 (2014)

ソウル国立大学から<名古屋大学>へ留学

1. Ryoaki Tsutsumi, **Seonwoo Kim**, Daisuke Uraguchi, and Takashi Ooi, "The Practical Preparation of Chiral N-Sulfonyl Oxaziridines via Carbonyl Asymmetric Payne Oxidation," *Synthesis* **46**, 871–878 (2014)

2. **Jin Wook Park**, Shusaku Nagano, Seong-Jun Yoon, Tomoki Dohi, Jangwon Seo, Takahiro Seki, and Soo Young Park, "High Contrast Fluorescence Patterning in Cyanostilbene-Based Crystalline Thin Films: Crystallization-Induced Mass Flow via a Photo-Triggered Phase Transition," *Advanced Materials*, **26**(9), 1354–1359 (2014)

上海交通大学から<東北大学>へ留学

1. Ilya D. Gridnev, Christina Kohrt, and **Yuanqian Liu**, "Direct Experimental and Computational Evidence for the Dihydrate Pathway in Tm(PhOS)-Ru Catalyzed Asymmetric Hydrogenation," *J. Am. Chem. Soc.* **136**, 1785–1790 (2014)

2. **Yuanqian Liu**, Ilya D. Gridnev, and Wanbin Zhang, "Mechanism of the Asymmetric Hydrogenation of Enocyclic α,β -Unsaturated Carbonyl Compounds with an Iridium-Biphenyl Catalyst: NMR and DFT Studies," *Angew. Chem. Int. Ed.* **53**, 1901–1905 (2014)

3. Ilya D. Gridnev, **Yuanqian Liu**, and Tsuneo Imamoto, "Mechanism of Asymmetric Hydrogenation of β -dehydroamino Acids Catalyzed by Rhodium Complexes: Large-Scale Experimental and Computational Study," *ACS Catalysis* **4**, 203–219 (2014)

4. **Xiaohong Huo**, Guoqiang Yang, Delong Liu, **Yangang Liu**, Ilya D. Gridnev, and Wanbin Zhang, "Palladium-Catalyzed Alkyne-Alkylation of Simple Ketones with Alkyl Alcohols and Its Mechanistic Study," *Angew. Chem. Int. Ed.* **53**, 6776–6780 (2014)

5. Xu Liang, John Mack, **Li-Min Zheng**, Zhen Shen, and Nagao Kobayashi, "Phosphorus (I)-Carbonyl Synthesis, Spectroscopic Properties, Theoretical Calculations, and Potential Utility for in Vivo Applications in Living Cells," *Inorg. Chem.* **53**, 2797–2802 (2014)

留学後に連携大学へ就職

アカデミックポストへ就職

Lin Wang 博士
2012年11月～2013年2月：上海交通大学より名古屋大学へキャンパスアジア留学
2013年10月：東北大学にてポストドク
2014年10月：東北大学理学研究科森田研究室にて助教に就任



左より：SJTUの指導教授、Lin Wang博士、名古屋大学での留学受入教授、東北大学で採用した教授

留学生受け入れ実績

	2011	2012	2013	2014	2015	計
交換留学 (3～12ヶ月)	C 1	10	8	13		32
	K 0	2	3	4		9
交換留学 (1～2ヶ月)	C 0	3	0	0		3
	K 0	3	2	1		6
学生交流 (サマースクール等)	C 0	3	3	23		29
	K 0	2	4	7		13

留学生派遣実績

	2011	2012	2013	2014	2015	計
交換留学 (3～12ヶ月)	C 0	0	2	2		4
	K 0	2	6	3		11
交換留学 (1～2ヶ月)	C 0	0	0	0		0
	K 0	5	3	3		11
学生交流 (サマースクール等)	C 0	3	22	0		22
	K 0	2	18	9		29

留学を頂点とする多彩な学術交流



派遣候補の学生が交流の主役

：サマースクール

サマースクール(2014年8月25-26日:東北大学:毎年開催)

＜大学院生が企画・運営しスクールの前面に＞
日中韓、欧米の研究室から博士課程の院生を招待(2014年:18名)
国際会議の企画・運営、学術的交流、親睦を深める



キャンパスアジアサマースクール
(2014年8月17-23日:ソウル国立大学校)



本プログラムから9名の学生が参加

学生の国際交流

教育研究討論会

学生派遣のサポートを強化

- ①日本側の担当教員および留学希望の学生が韓国/中国の大学を前もって訪問して留学準備のための教育交流検討会を開催。
- ②留学後の学生に対して、研究成果のまとめをサポート。
ソウル国立大学校・浦項工科大学校
(H24/12～25/1月)
上海交通大学・南京大学 (H25/3月)

上海交通大学分野間交流セミナー

(2013年9月、2014年3月)

- ①教職員4名、学生12名が参加し、上海交通大学・名古屋大学に留学した学生研究員のラボツアーを実施。
- ②H25年度の上海交通大学からの派遣学生と面談し、希望動機・リサーチテーマ・スケジュールについて打ち合わせ。

キャンパスアジア公開シンポジウム

学生が参加、口頭・ポスター発表

名古屋大学(2011年度)、南京大学(2012年度)、ソウル国立大学校(2013年度)、**東北大学(2014年度)**



上海交通大学



POSTECH



研究留学をした 派遣・受入学生の印象的なコメント

受入学生

- 最新機器で測定できた
- 異分野領域が身に付いた
- 勤勉さを見習いたい
- 至る所 綺麗

派遣学生

- 国際性を意識した 異文化を体験した
- 高い意識で研究推進 積極性が身に付いた
- 視野を広げることができた
- 英語でのディスカッションに自信がついた



ティーチングアシスタント(TA)制度

受入学生の支援

- 留學生1名につき1名のTAを配置
- 円滑な留學生生活・実験/研究を支援
- 国内で国際交流を体験



2011年～2014年度で

50名の留學生にTA配属

留学の準備

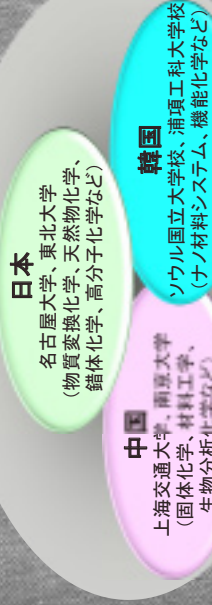
- 英語のプレゼン講義
- サマージョイントの運営
- 短期派遣で国際交流を体験



活発な学生交流を推進
留学に向けた基礎力アップ

協働教育拠点の形成のための相補性と準備状況

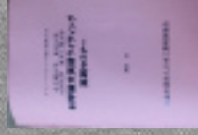
化学を基盤とした持続的社會形成への
広範な貢献ができる人材の育成



三カ国で強い分野を補完し合う教育拠点

将来の研究にマストである語学 スキルサポート体制

- 英文プレゼンテーション講習
- 論文英語セミナー
(TV会議により理系連携大学に配信)
- オンライン論文英語添削指導
- パワーポイントスライドセミナー
- スピーチセミナー
- 外国人特任教授の授業



政策研究大学院大学 「北東アジア地域における政策研究コンソーシアム」

細 江 宣 裕

(政策研究大学院大学政策研究科准教授)

＜発表の概要＞

本プログラムは、本学(GRIPS)、KDI School of Public Policy(KDI スクール)および清華大学公共管理学院により構成されており、すべて公共政策大学院である。プログラムへの参加者は、現職の公務員・公共部門の関連職員であり、1年～2年間休職して履修に臨む。また、清華大学では昼間は勤務し、夜間に学ぶ学生が多い。3大学ともに英語のみで教育が完結する国際修士プログラムである。

課題として、ミッド・キャリア学生は多忙であり、また、職場を離れられない学生もいるため、長期的なダブル・ディグリー(DD)プログラムや単位互換を伴う学期単位の留学が難しいことが挙げられる。

その解決策として、サマー・プログラムを構築し、3大学共通でスケジュールを合わせることが可能な8月に実施することとした。直近の例では、2014 年8月に、GRIPS においては2週間の日程で2大学から14 名を受入れ、反対に、KDI スクールおよび清華大学に対しては1か月の日程でGRIPS からそれぞれ3名を派遣し、学習・交流を行った。

サマー・プログラムの制約としては、まず予算の問題があり、GRIPS は財源があるが、清華大学はほぼ自主財源がない状態である。また、8月という時期については、夏休みのため、講義を担当する教員を確保するのが難しい状況である。これらを解決するために、GRIPSは2週間のプログラムで2単位の講義を1つ開講することとし、その合間に座学として、単位の出ない特別講義やワークショップを入れ、さらに教室内だけでなく、フィールド・トリップなども組み込み、プログラムの広がりを確保したところである。KDI スクールと清華大学においても、1か月のプログラムでフィールド・トリップや特別講義等を含めたプログラムを組んでいる。

今回の GRIPS のサマー・プログラムを振り返ると、本構想の財源の支出に係る制約上、来日学生に対して3か月未満の滞在では奨学金を付与できないことから、本来は1か月実施したいと考えていたが滞在費も考慮して2週間としたところ、多忙すぎるという意見も聞かれたため、さらに改善が必要であると考えている。また、サマー・プログラムにおいて付与される2単位については、全体の修了要件単位数から勘案して、GRIPS としてはそれほど重要視していなかったが、相手大学の教員・学生からは、短期間でも単位取得につながる授業が存在することが重要という意見が聞かれた。

サマー・プログラムは3大学ともスケジュールの都合上、同時期に実施しており、現在では1人の学生が他の2大学のサマー・プログラムへ参加することは不可能である。しかし、意欲的に複数参加を希望する学生が多数現れれば、長期派遣に向けてのステップになると期待している。

提携大学

中国：清華大学

韓国：KDI(韓国開発研究院)スクール



NIAD-LIENプログラム
国際共同教育プログラムの質保証
北東アジア地域における政策研究コンソーシアム
政策研究大学院大学





2. 交換留学

ミッド・キャリア学生

- ・ **忙しい**
 - － GRIPSでは1年間の修士課程
 - ・ 半年でコースワーク、残り半年で論文執筆
 - － 清華大学では多くがパートタイム(夜間)

どうする?...2つのモード

- ・ 長期: ダブル・ディグリー(1年間)、単位互換(学期単位)
- ・ 短期: **サマー・プログラム**(夏期集中講座)等
例)2014年夏
 - － GRIPS(2週間; 14名受入)
 - － KDIS(1ヶ月; 3名派遣), 清華(1ヶ月; 3名派遣)

3



1. 公共政策大学院間の共同プログラム

【3つの公共政策大学院プログラム】

- ・ 政策研究大学院大学(GRIPS)
- ・ KDI School of Public Policy & Management
- ・ 清華大学公共管理学院



【共通の背景】

- ・ **ミッド・キャリア**の公務員・公共部門関連職員
 - － 社会科学を中心とした分野横断的な政策ソリューションのための学び
 - ・ 経済、政治、行政、開発、経営、数理工学
- ・ (英語だけで教育が完結する)国際修士プログラム

2



3. サマー・プログラム

制約

- ・ 時間: 8月が3学共通のウィンドウ
- ・ 予算: 大学(国)によって使える予算・使途(含む、対象学生)が違う
- ・ 人員: ふつうの人には...「夏休み」

内容

- ・ 通常講義(単位付与)
- ・ 特別講義、ワークショップ(単位なし)
- ・ フィールド・トリップ等の課外・学外イベント

4

4. サマー・プログラム@GRIPS

Urban Development Policy
(2単位) by 元世銀職員

本所防災館
(フィールド・トリップ)

特別講義 (non-Credit)
by 元世銀職員 & CA教員

Week	Aug 14 (Thu)	Aug 15 (Fri)	Aug 16 (Sat)	Aug 17 (Sun)
Week 1	Arrival at GRIPS Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 2	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 3	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 4	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 5	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration

5. サマー・プログラム@清華大学

集中講義(北京), ワークショップ
by IMF, ILO, 大学教員

フィールド・トリップ(上海等)

Week	Aug 14 (Thu)	Aug 15 (Fri)	Aug 16 (Sat)	Aug 17 (Sun)
Week 1	Arrival at GRIPS Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 2	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 3	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 4	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration
Week 5	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration	GRIPS orientation Self-orientation and registration

5. サマー・プログラム@KDISクール

Week	Title
1st Week	Arrival and Dorm Check in Orientation
2nd Week	Korea Field Research and Study Home-Visiting Program KFRS Report Writing Period Dialogue with the Professor over Lunch
3rd Week ~	OECD Lecture Policies For Development: The OECD Development Centre at Work Self Research Period (Submit CAMPUS Asia report)
4th Week	Seoul City Tour
5th Week	Dorm Check out and Departure

6. まとめ

忙しい現職公務員向けの短期集中プログラム

- 「GRIPSサマー・プログラム」(1.5ヶ月程度)の一部に組み込む
 - GRIPS学生との相乗効果&交流
 - 人員・予算の問題を少なく
- 2週間...GRIPSの予算の都合
 - 来日学生への奨学金は3ヶ月以上滞在が必要
 - KDISは派遣予算小、清華大は派遣予算なし
- 教訓
 - 短期でも「単位」に対する需要は強い
 - 少し多忙なプログラムに...勉強はできたが、「日本」を感じられたか?
- 韓国・中国のサマー・プログラムへの派遣
 - やる気と問題意識のある学生
 - 長期派遣へのステップ

九州大学 「エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための大学院協働教育プログラム」

田 邊 哲 朗

(九州大学大学院総合理工学府特任教授)

<発表の概要>

本プログラムでは、理工系修士のダブル・ディグリー（DD）取得に係る期間を、通常3年のところを2年で修了するという野心的なプログラムの構築に成功しているが、これにはエネルギー環境理工学に特化させたカリキュラムを付加させていることが、成功の要因と考えている。

まず、ベースとして派遣元大学にて学生の所属する専攻の通常プログラムを履修させた上で、3大学共通にエネルギー環境理工学に特化したプログラムをサマースクール等を通じて履修させる。DD 取得のために、学生は合計 45～50 単位の取得が必要だが、解決策として、九大ではエネルギー環境理工学国際コースを設け、そこに3大学共同で行うサマースクール等の共通のプログラムを組み込み、必要単位の取得を可能とした。重要な点は、派遣先大学で修得した単位を最大10単位まで派遣元大学に移管すると共に、サマースクールで取得した単位は、派遣元／先の両大学で認定することにより、必要単位数を確保できるようにしたことである。なお、同コースの科目はすべて英語で開講しており、また、留学生は、派遣先大学での専門科目もすべて英語で受講することになっている。日本人学生は、同コースの英語教育科目を受講することが必須となっている。

サマースクールでは、3大学の学生が授業のほか、校外学習及びセミナーや討論を行うので、国際交流の貴重かつ重要な機会となっており、学生からも大変な好評を得ている。3大学間では、入学時期やコースがそれぞれ異なっている。DD 取得に至るプログラムは、各大学の規則を満たすように構築されている必要があり、調整を重ねる必要があった。この点が非常に苦労した点と言える。

本プログラムでは、各大学の規定に反することなく修了要件を満たすことができる修学パターンは複数ある。例えば、九州大学院生は、九大入学から半年後の9月に上海交通大学に正規の学生として入学し、14 単位以上を取得して帰国し、修士研究を行う。修士論文の中間評価を、修士2年時のサマースクールにおいて3大学合同で実施し、これに合格した学生は、派遣元／先の両大学による共通の修士論文審査、派遣元大学の個別審査に合格すれば、DD 取得修了となる。九大学部学生は、九大を2年間で修了するが、派遣先大学では、釜山大、上海交通大のいずれであっても1.5年間の短縮修了となる。反対に、九大に留学してくる上海交通大学の学生は、同大学を9月に入学し、九大には4月に正規学生として入学するので、九大を2年間で、全体を2年半で修了する。3月に釜山大に入学し、9月に九大に入学する釜山大の学生の場合は、九大を1.5年間で短縮修了、全体では2年間での修了となる。その他、成績換算表を用いた成績評価や、互いに派遣元の選抜結果を尊重しつつ各自入学試験を課した受入学生の決定を行うなどのシステムも構築している。

将来的には、国際連携大学院を設立し、ジョイント・ディグリー・プログラムに発展させていきたいと考えている。

提携大学

中国：上海交通大学

韓国：釜山大学校



「キャンパス・アジア」はニタリングは東洋と東南アジアの国境を越えてきたことは、平成26年11月27日
 「EEST ASIA」はニタリングは東洋と東南アジアの国境を越えてきたことは、平成26年11月27日
 「EEST ASIA」はニタリングは東洋と東南アジアの国境を越えてきたことは、平成26年11月27日

EEST ASIA Energy-Environmental Science and Technology, Advanced School of International Alliance

九州大学・上海交通大学・釜山大学

EEST ASIAプログラム

エネルギー環境理工学グローバル人材育成のための
 修士課程ダブルディグリー取得を可能にした大学院協働教育プログラム

事業推進担当：九州大学大学院総合理工学府

故寺岡 靖剛 教授

中島 英治 学府長 (時間教授、ご照会により H26.07/02より交代)

スタッフ
 コーディネーター 田辺 恵朗 対面言語 日、英、日
 准教授 王冬 (Wang Dong) 日、英、日
 准教授 朴在日 (Park Jaell) 日、英、日
 テクニカルスタッフ 三洲 未来 日、英、日
 同 市村 菜穂子 日、英、日
 事務補佐員 浅川 花三子 日、英、日



エネルギー環境理工学(EEST)国際コースの設置

九州大学大学院総合理工学府では、DD取得を可能にするため、平成25年度、
 英語のみで履修/修了が可能な、エネルギー環境理工学国際コースを設置。

アジアはエネルギー/環境問題の現場



エネルギー環境理工学グローバル人材育成

- ダブルディグリーを取得した世界で活躍できる高度研究者・技術者
- ① 専門分野の深い知識とそれに基づく研究開発能力
 - ② 現状の正しい認識力、深い洞察力、発展的考察力
 - ③ グローバルに活動するために必要な英語力
 - ④ 研究者・技術者倫理、異国の文化・人・社会の理解



EEST ASIA 修士課程協働教育プログラム

パイロットプログラムとして通常の修了年限内でダブルディグリーを取得可能に

3 大学合同のコース修了証明書

ダブルディグリーの修了
 (母大学と協働大学)

既存の専門教育カリキュラム

- 各大学で開講している専門基礎科目を利用(原則)
- 単位互換/移転による相互認定
- 客員教員任用による正規授業
- 教育手法や評価法の共有・共通化(合同(分担)授業の開講、講義資料の共同開発)

エネルギー環境理工学国際コース(EESTコース)カリキュラム

- エネルギー環境理工学グローバル人材の育成のための協働教育カリキュラム
- インタラクション科目、課題解決型科目、研究者・技術者倫理(知財を含む)科目、英語科学技術科目 等々
- 各大学のカリキュラムへ組み込み、サマースクールを利用した3大学共同の開講、運営
- サマースクールは平成25年度より国内外の大学にオープン化

修士論文研究 論文内容評価の共通化

- 中間審査、最終発表審査は2大学共通の審査委員会にて実施
- 中間審査、最終発表審査は2大学共通の審査委員会にて実施

英語教育

- 英語英検教育科目、修了を通しての英語スキルの向上
- 英語力測測と年度別達成度を設定(日常・ビジネスコミュニケーション、専門英語力)
- TOEIC等受験による向上度の定量的測測

文化、語学などに関する教育

- 各大学が留学生対象に開設している科目を留学期中に履修

2015年3月、第一期 DD 生が、3大学で修了予定



各大学修士修了/学位取得要件

	九大	上海交通大	釜山大
英語のみで履修可能なコース	G30コース	留学生コース	留学生コース
通常	2	2.5	2
最短期間(年)	1	1.5	1.5
修学期間(年)	4月-8月	3月-7月	3月-7月
学期開始-修了時期	10月-2月	9月-1月	9月-1月
修了	>30	>30	>24
必修単位	2-4(専攻科目) +9(EEST科目) ^{注1}	6(数学)+2(中国語) +2(中国語) +6(専攻科目)	6(専攻科目) +2(韓国語)
修士論文関連課題	6 ^{注2}	0	4
移管/互換可能単位	10以下	15以下	12以下
修士論文	○	○	○
研究発表審査	○	○	○
付加要件	学会発表 ^{注2}	学会誌に発表 ^{注2}	修了試験(3科目)

注1 エネルギー環境理工学国際コース(EEST)コース設置により対応
 (九大では英語のみで修了できる、G30 外国人留学生特別コースを除外)

注2 付加要件は DD生には付加しないことに決定

エネルギー環境理工学国際コースを修了するためには、交換留学生が配属された専攻またはグローバルコースの要件を満足すると共に、エネルギー環境理工学国際コースの選択必修科目(正課)から9単位以上を取得しなければならない。

修得したエネルギー環境理工学国際コース科目は、各専攻あるいはグローバルコースの関連授業科目として取扱い、修得した単位は課程修了の要件となる単位として取扱い。

交換授業先での取得単位は、単位互換制度により最大10単位まで該当する専攻授業科目または関連授業科目の単位として修得が認められる。

エネルギー・環境理工学国際コース				要件
	専 業 科 目 名	単位数	取得時期	
選択 必修 科目	エネルギー・環境理工学 基礎Ⅰ	1	サマースクール (夏期集中コース) にて取得	左記科目から 9単位以上
	エネルギー・環境理工学 特論Ⅰ	1		
	エネルギー・環境理工学 演習Ⅰ	1		
	エネルギー・環境理工学 基礎Ⅱ	1		
	エネルギー・環境理工学 特論Ⅱ	1		
	エネルギー・環境理工学 演習Ⅱ	1		
	太陽エネルギー概論	2	交換留学中に取得	
	環境にやさしい化石燃料の エネルギー変換	2		
	エネルギー・環境学特別演習	2		
選択 科目	交換留學生のための現地語 (日本語・韓国語・中国語のいずれか)			交換留學生のみ

九大生の上海交通大学修士課程修了のための修学パターン

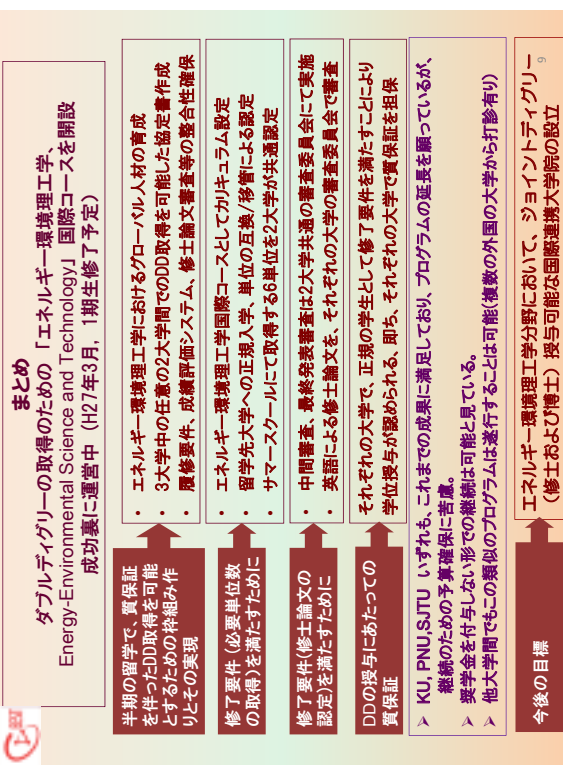
[illegible]

入学許可と単位認定

DD取得を可能にする学生交流協定を締結し、その条文第4条に「キャンパスアジアプログラムの交換プログラムに参加する交換留學生は、派遣大学が最初に選考し、受入大学が固々の學生に対して受入の最終決定を行うものとする」と記載しており、これに従って決定。

派遣学生の決定: 応募者への面談、TOEFLの点数等を考慮後、応募者の所属専攻からの派遣許可可取得し、派遣大学として、派遣国を決定後、成績証明書、推薦書等必要書類を送る(受入大学へ推薦書、受入学生の決定: 各派遣大学から推薦された候補者(各大学5名)について、成績証明書等の書類による審査、及び必要に応じてインタビュー等)を行い、通常の大学生として合否を判定する。

成績換算表			
九大	上海交通大		金工大
	評価点	評点	成績評価
90-100	秀	95-100 A ⁺	96-100 A ⁺
80-90	優	90-94 A ⁰	90-95 A ⁰
		85-89 B ⁺	85-89 B ⁺
		80-84 B ⁰	80-84 B ⁺
70-80	良	75-79 C ⁺	75-79 B ⁺
		70-74 C ⁰	70-74 B ⁰
		65-69 D ⁺	67-69 C ⁺
60-70	可	60-64 D ⁰	63-66 C ⁰
60 >	不可	F ⁰	0-59 D
	不合格	Non Pass	P
	合格	Pass	Pass



神戸大学 「東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム」

田 中 悟

(神戸大学大学院国際協力研究科特命准教授)

＜発表の概要＞

本プログラムは社会科学系であり、博士前期課程の大学院生を対象とした、ダブルディグリー（DD）および交換留学のプログラムである。本プログラムを通じて相手大学に留学した学生は、交換留学生は現所属大学で1本、DDの場合は両大学で2本の修士論文を執筆することが必須とされている。

本プログラムにおいて留学する学生は、同プログラムに所属しているにもかかわらず、同時期に他大学に留学する学生とはすれ違い、知り合う機会が全くない場合もあった。そこで、その解決策として、プログラム参加学生が一堂に会し、その研究成果を披露しつつ、学生相互の交流を後押しする機会となる企画を、年次のシンポジウムに盛り込むこととなった。

経緯としては、2012年に上海で行われたシンポジウムにおける実務者会議の場で、本学から、年次シンポジウムにおいて学生セッションを設置し、教員だけでなく学生の発表機会を設けることについて提案した。議論の結果、提案が認められ、翌年のソウルシンポジウムにおいて学生セッションを開くことが決定された。ソウルシンポジウムでは、本プログラムを通じて各留学先で修士号を取得した学生が対象となり、各大学から2名、合計6名の学生が発表を行った。その際にも再度、実務者会議でこの件が議題となり、各大学において好評であるため、2014年も引き続き学生セッションを実施すること、またシンポジウムのプログラムそのものも、学生セッションの比重を高めたものとするのが、方針として決定された。

2014年の神戸シンポジウムでは、口頭発表に加えてポスターセッションも導入し、3大学の学生を対象に、プログラム修了者・学位取得者だけでなく、留学中の者、留学に向けて準備を行っている者、さらには本プログラムへの参加を希望する者も含めて、幅広く募集・選抜を行い、発表内容の質と権威を高めた。当日は、学生セッションを3回に分けて設け、各大学の教員がモデレーター・コメンテーターを務める中、9件の口頭報告、10件のポスター発表が行われた。

さらに、これとは別に、他大学で開催された研究大会において、本プログラムの学生・修了生2名が報告の機会を得た。両学生は、現役学部学生に向けて本プログラムを通じて得られた体験を発表することとなった。

2015年度に向けては、東南アジアでのシンポジウム開催も目指しており、今回のポスターセッションも好評であったことから、さらに新機軸を打ち出すことや、学生セッションの募集方式を見直し、報告の質の更なる向上を高めていくこと、また、本プログラム修了生を招いたキャリアセミナー的な要素の導入も検討し、議論を重ねていく予定である。

提携大学

中国：復旦大学

韓国：高麗大学校

文部科学省「大学の世界展開力強化事業」



CAMPUS ASIA Program in KOBE University

東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム

NIAD-UEシンポジウム

国際共同教育プログラムの質保証

— 一日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは —

第2部「各論」(於：一橋講堂)

2014年11月27日(木)

2013年度のソウルシンポジウムに向けて

- 2012年11月、上海シンポジウム (2012 Symposium of Campus Asia Program “Building Resiliency for Emergency Management in East Asia and the World”) の実務者会議において、年1回開催のプログラムシンポジウムに学生セッションを設置することが、神戸大学から復旦・高麗両大学に提案された。議論の結果、最初の学位取得者が出る時期に合わせ、翌2013年11月のソウルシンポジウムから学生セッションを開くことについて、各大学の賛同を得た。
- ソウルシンポジウムにおいては、本プログラムを通じて各留學先で修士号を取得した学生を対象とし、各大学から2名の学生 (合計6名) を報告者とすることが取り決められた。
- 2013年11月、ソウルシンポジウム (2013 CAMPUS ASIA Seoul Conference - “Compound Risk and Regional Collaboration in East Asia”) の第2日目に、学生セッションを実施するとともに、プログラム同窓会の結成に向けての準備会合が学生主導で開催された。

学生の研究成果報告に至るまでの経緯

- 本プログラムの対象となるのは、神戸・復旦・高麗の三大学に在籍する博士前期課程の大学院生
- ダブルディグリープログラムもしくは交換留学を通じて各大学に留學した学生は、留學を通じて獲得した経験や知見を通じて、1本もしくは2本の修士論文を執筆することになる。

※ 派遣元・受け入れ先となる各大学の大学院は、いずれも修士論文の執筆を課しており、ダブルディグリー生は各大学院での修士論文の提出が必須となっている。

- ほとんどのプログラム参加学生は、一つの大学を留學先とするため、他の大学へ留學した学生や、時期的に入れ違いとなった学生と知り合う機会が乏しい。

→ プログラム参加学生の研究成果を披露し、学生間相互の交流の枠組みを構築したい。

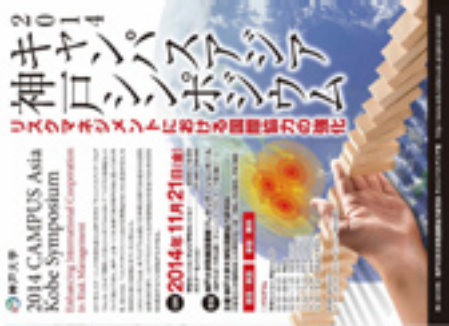
November 2, Graduate Student Panels

Workshop Topic Chair	Time	Events	Location
Nov 2 Panel 1	09:30-10:00	Risk Management and Civil Society The Role of Local Citizens in the Business Process after the Great East Japan Earthquake Changwon Sanggye (Korea University)	Room 324 1st Hall
	10:00-10:30	The Influence of Environmental NGOs on Environmental Policy Making in China Nobu Yoshida (Kobe University)	
	10:30-11:00	As a result of the earthquake and Civil Society's disaster prevention based on Social Capital Theory Discussion	
	11:00-11:30	Q&A Session	
	11:30-12:00	Risk Management and International System Discussion	Room 324 1st Hall
Nov 2 Panel 2	09:30-10:00	Strategic Issues of Environmental Policy Making in Korea Jong-ho Lee (Korea University)	
	10:00-10:30	Strategic Issues of Environmental Policy Making in China, U.S. and Korea Discussion	
	10:30-11:00	North Korean Energy Cooperation Jung-ho Lee (Korea University)	
	11:00-11:30	China's Education Aid to African Countries Yuhui Shih (Kobe University)	
	11:30-12:00	Discussion Discussion	
Lunch	12:00-13:00	Q&A Session Research Lunch Symposium	



2015年度に向けての方向性

- ▶ 2014年の神戸シンポジウム実務者会議において、翌2015年のシンポジウム（バンコクなど第三国での開催を検討中）においては、学生中心の大会としてさらに新機軸を打ち出すことを検討するという方針が決められた。
- ▶ 神戸シンポジウムの新機軸であったポスターセッションは、学生の発表機会を大幅に増やすだけでなく、教員を交えるつも三大学の学生間の直接的な交流を深める意味でもたいへん好評であった。
- ▶ 来年度大会については、学生セッションの比重を高めた今回の経験を踏まえ、報告の質の更なる向上をはかるための募集方式の見直し（例えば一般公募の導入）や、プログラム修了生を招いたキャリアセミナーなどを念頭に置いて、さらに議論を進めていきたいと考えている。



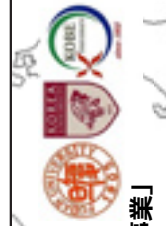
文部科学省「大学の世界展開力強化事業」

CAMPUS ASIA in KOBE University

東アジアにおけるリスク・マネジメント専門家養成プログラム

神戸大学大学院国際協力研究科 キャンパスアジア室

<http://www.edu.kobe-u.ac.jp/gsics-cp-asia/>



立命館大学

「東アジア次世代人文学リーダー養成のための、日中韓共同運営トライアングルキャンパス」

廣 澤 裕 介

(立命館大学文学部准教授)

<発表の概要>

今回は本プログラムにおいて、本学、広東外語外貿大学および東西大学校の3大学共同で開発、実施している学生の「到達度アンケート」を中心に紹介したい。

本プログラムは、次世代の人文学リーダーを担う、日中韓3か国の言語の習得、日中韓3か国の人文学専門知識、そしてコミュニケーション能力を有した人材を育成することを目標としている。3つの育成能力のうち、語学力と専門知識は容易に成長が測れるが、コミュニケーション能力は測定が難しい。このコミュニケーション能力を中心とした様々な成長・変化の検証方法を模索する中で、この「到達度アンケート」の開発に至った。本アンケートは同時に本プログラムの有効性や効果を検証し、問題点や解決の鍵を見つけるツールにもなり得る。また、学生個人の成長や心理的变化も捉え、個人や学生間の問題にもアプローチできるのではないかと考えた。また、本アンケートの質問項目自体が、人文学リーダーとして必要なメンタリティやパフォーマンスの在り方の指針ともなり、アンケートへの回答を通じて目指す人材像を意識させるねらいも持っている。

まず、本学の教学教育開発推進機構(IR)と共同でアンケート票作成に着手し、青少年のメンタルを図る標準的な既成アンケートを参考としつつ、中韓の言語にも翻訳を行い、各大学と意見交換を重ねた上で作成した。アンケートの結果はIRが分析し、その分析結果を3大学の合同教職員会議等で報告した上で、状況や問題を共有して、各大学のプログラム運営に反映している。

本アンケートは、3つの分析観点から、主に10の要素を測定するため、88の質問項目を設けて、いつでも回答できるようオンラインにて環境を整備し、3大学の学生に定期的にアンケートを実施している。アンケート結果については、学生に還元するため、個票を作成して個人面談を実施している。例えば、1回目と2回目の結果をグラフにまとめ、その間の変化が可視化されたかたちで提示すると、学生も率直に意見を述べたり、変化が生じた理由を自分なりに分析したりする、という事例がみられた。なお、面談は中韓の学生も対象とし、母語でも対応できるよう、中国語・韓国語ネイティブの教員が実施した。

以上の取組みの成果として、学生に変化があると担当教員が感じたとき、データの裏付けがあると声がけしやすく、学生が、自分のストレスや精神状態をどのように把握しているかを確認することもできる。さらに、本アンケートに自由記述欄を設けることで、本プログラムに対する学生の意見を集約するチャンネルとしても開拓できた。口頭で言い難い事項を伝えたい場合、または語学力に自信がない場合に活用でき、学生から投稿された意見を反映し、カリキュラムの改善や進路就職ガイダンスの実施、課外活動の交流企画を実施した例もある。

提携大学

中国：広東外語外貿大学

韓国：東西大学校



DSU

NIAD-UJ シンポジウム
第2部 各論 ― 中韓との協働による教育⑤
立命館大学「到達度アンケート」



金沢大学
Kanazawa University



京都大学
Kyoto University



広島大学
Hiroshima University



EAST ASIA STUDIES

立命館大学文学部 キャンパスアジア事務局
プログラム・マネージャー 廣澤 裕介

1 概要 (2) ― 経過

- 1 検証したい観点(要素)を絞り込み、既存のアンケートを基にして
本学の教學IRと共同で質問票を作成。
- 2 質問票を広東外大・東西大で中国語・韓国語に翻訳。両大学と
内容や目的実施方法を確認・共有。三大学の事務局が連動し、
合計4回、実施。
(12年8月(フレテスト)、13年2月、14年2月、8月)
- 3 学生たちの回答は教學IRの専門家が分析。
結果を中韓の大学と共有し、各大学のプログラ
ム運営に反映。また、学生にも還元して成長を振
り返る機会に繋げた。



1 概要 (1) ― 作成のきっかけ

- 3つの育成能力(語学力・専門知識・コミュニケーション能力)のうち、
試験や語学検定といった客観評価では測定が難しい部分一特にコ
ミュニケーション能力の検証方法を模索
- 学生一人ひとりに焦点を当て、変化・成長が測定できるツールの
導入を検討
- アンケートを通じて目指すべき人材像を学生へ認識させ、学生は
現在地を把握し、目標を立てる機会を得られる

2 分析観点 (1)

【観点①】 社会的スキル

他者との関係を構築する力／他者との関係を維持する力／
感情をコントロールする力／問題を解決する力

質問例①

- ▶ 初対面の人に、自己紹介が上手にできますか？
- ▶ 仕事や作業をする上で、どこに問題があるかすぐに
みつけることができますか？

【観点②】 リーダーシップ

グループを牽引する力／
グループ内の関係を調整・統率する力

質問例②

- ▶ 所属するグループの目標を中心となって立てる
- ▶ 新しい仲間が馴染めるような雰囲気を作る努力をしている

2 分析観点 (2)

【観点③】
ストレスに対する力

チャレンジする力／感情に流されず行動する力／
目標に向けて努力する力／粘り強く継続的に取り組む力

質問例③

- ▶ 色々なことにチャレンジするのが好きだ
- ▶ づらい出来事があると耐えられない(※逆転項目)

- ・ これら3つの観点／10個の要素を測定するため、4つの設問／88個の質問からなる質問票を作成した(+自由記述1問)

4 学生への還元と面談



(集約)



(個別面談)

- ・ 1回目(2013年2月実施)と2回目(2014年2月実施)の結果をグラフ形式でまとめた便票を作成し、学生に提示
- ・ 約1年間(＝移動キャンパス1年目)の経験を通じてグラフ上に表れた変化を、学生自身に振り返らせた
- ・ その振り返りの結果を基に、日本学期期間中の5月～6月にかけて学生一人ひとりと個別面談を実施

3 回答集約方法

(回答画面)



(集約データ)



- ・ 「WEB履修管理システム」(ポータルサイト)を用いて、オンライン上で、いつでも・どこでも回答できる環境を用意
- ・ 回答は専門家が分析しやすいよう、Excel形式で出力できるようにした

5 成果

- 1 教職員が時どき感じた学生の変化成長が、アンケート上でも表われることが多く、「学生一人ひとりに焦点を当て、変化・成長を測定する」という目的については一定の効果があつたと思われる
- 2 個別面談を通じて、学生の葛藤や成長など、数値上の変化の裏側にある、人間적・内面的な変化を拾い上げることができた
- 3 自由記述の問題を設け、プログラムに対する学生の意見を集約
- 4 集約した意見は三大学で共有し、プログラムの運営に反映させた



6 自由記述の回答例とプログラムへの反映例

回答例 ④・(東西大生)中国学期では中国語の授業のみで、日本語を使う機会が無く、忘れてしまう。その国の言語以外の授業も設けて欲しい。

- ③ (広東外語外貿大學生) 立命館大学の起活動にも参加させて欲しい。
- ④ (本学学生) きちんと就題できるが不安です。
- ⑤ (広東外語外貿大學生) 日本でのインターンシップに参加したいが、同学金が割れば難しいため、不安です。

反映例 ⑤ 日本学期に本学の学生向けに開講を予定していた中国語・韓国語の授業を中韓の学生にも開校。2年目には三大学が自国以外の学期にも通講講義を提供。

- ③ 起業や就、落選といった課外活動との交流企画を実施。
- ④ 遠隔講義システムを用いて韓国にある三大学の学生向けに、進路指導ガイダンスを実施。
(大学のキャリア形成支援部署の協力ののもとに開催)



「黒田は眼力、ダンスの両方」

ご清聴ありがとうございました

東京工業大学 「日中韓先進科学技術大学教育環」

原 正 彦

(東京工業大学大学院総合理工学研究科教授)

<発表の概要>

東京工業大学では全学を挙げて「キャンパス・アジア」プログラムに取り組んでいる。サマー・プログラムについては東工大が中心となって作っているが、欧米やアジアの他大学から来た「キャンパス・アジア」以外の学生にも公開されており、単位互換および質の保証を伴う形でも他国の学生の来日リクエストに答えるものとなっている。研究志向のため学生は各自研究室に所属し、日本語教室や文化体験等のほか、最後には報告会も実施している。

本プログラムの「実施体制ガイドライン」はコンソーシアムとして全体の協定書を作成したもので、「Appendix」は3カ国の相違点、つまり、質保証や単位互換を考える際に具体的にどういった数字を見なければならないかを3大学でまとめたものである。「実施体制ガイドライン」においては、まず、どのようなタイプの留学制度をつくっていくか、何人の学生を交換するかが非常に重要なポイントとなり、告知、学生の選出、受入のプロセスも3カ国で同様に実施した。また、どういったことを学習するか、研究室で何を行なうかを計画書として作成し、終了時には報告書を作成し、両国の先生にサインをもらうこととしている。

実施する留学制度のタイプについては、1学期間滞在、サマー・プログラムのほか、特にグラデュエート・コースを対象とした研究センターの留学を作りこんできた。アカデミック・カレンダーが非常に重要なポイントで、どの時期に授業時間を設けているか、単位を発行するためにいなければいけない時期等をそれぞれ確認しなければならない。何週間を以って1学期とするか、基本が2単位か3単位か、セメスター期間も3大学で微妙な違いがあり、試験期間を含めるかどうかとも考慮して調整しなければいけない。

修士修了に必要なクレジット数では、単位互換において何単位がトランスファー可能かというリミットが、ダブル・ディグリーを進める際に非常に大きな問題となり、大学間での調整が非常に困難だった。クレジット数はそれぞれの大学の規定が異なっており、教員もしくは国際室のレベルで意見を交わすことが非常に重要なポイントとなる。何単位まで互換できるかについては、3大学で規定が異なっているが、他校の修了要件も満たさなければいけないので、夏休みの時期などの行き来をどうするかという点と合わせて、現在作り上げている。

GPA をどう考えるかという点も非常に重要なポイントで、GPA を基準とした成績、その前の質保証が必要で、修了要件の単位数をどう満たすかとの点も含めての比較もこれから作り上げていかなければならない。

実施体制のガイドラインを3大学で共有することにより、相違点のうち、特に微妙な数字の違いが、かなり大きな違いであることが分かってきた。これをどう調整していくのか、ジョイント・ディグリーの前に、まずダブル・ディグリーについて議論をしているところである。

提携大学

中国：清華大学

韓国：韓国科学技術院(KAIST)

1

日中韓学生交流に対応した環境づくり 「実施体制ガイドライン」

NIAD-UEシンポジウム
国際共同教育プログラムの質保証
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは

東京工業大学
日中韓先進科学技術大学教育環
構想責任者 原 正彦

2

「実施体制ガイドライン」

1) Implementation Guidelines for
TKT CAMPUS Asia Consortium

2) Appendix to the Implementation
Guidelines

NIAD-UEシンポジウム
国際共同教育プログラムの質保証
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは

東京工業大学
日中韓先進科学技術大学教育環
構想責任者 原 正彦

3

Tokyo Tech International Education and Research Program (TIER) Network

Europe
(IDEA League)
Imperial College
London
TU Delft
ETH Zurich
RWTH Aachen
Paris Tech

TKT CAMPUS Asia
Tsinghua University
KAIST
Tokyo Tech
The Hong Kong University of
Sci. and Tech.
Nanyang Technological
University
Asia (ASPIRE League)

U.S. (10 universities)
Brown U., Caltech
Carnegie Mellon
Georgia Tech
MIT, Stanford
UC Berkeley
U. Minnesota-TC
U. Washington-Seattle
U. Wisconsin-Madison

Tokyo Tech International Research Opportunities Program (TIROP)

4

Summer Program Calendar

Event	June	July	Aug.	Place/Org.
Lab Research			↔	Host's Lab
Survival Japanese	4-17, 18-27	1-10, 14-24		S6-409A
High Tech Japan	17-25			Campus & Off-site
Opening Ceremony		2		W8-10F, 13:30
Summer School			↔	Various
Tea Ceremony		8		International House
Special Lecture		14		W9 MPD Hall 15:00
Tokyo Bus Tour		21		Life Safety L Center
RAKUGO Live			5	H-111, 15:00
Workshop (MISW)			7-8	TTF
Closing Ceremony			22	W8-10F

Note: Aug. 9 start of summer vacation, Aug. 9-10 e-off, 11-12 Univ. closed

Implementation Guidelines for TKT CAMPUS Asia Consortium

1. Organization to Implement the Program
2. Forms of Exchanges
 - (a) semester long exchanges with course study and/or lab work
 - (b) summer programs
 - (c) research-oriented joint educational programs
3. Number and Eligibility of Exchange Students
4. Exchange of Information on Educational Programs and Research Opportunities
5. Procedures of Program Announcement, Selection, Nomination, and Acceptance
 - 5-1. Program Announcement
 - 5-2. Selection
 - 5-3. Nomination
 - 5-4. Acceptance
6. Planning of the Study and Research Activities
7. Study and Research Plan/Record
8. Status of Exchange Students at the Receiving University
9. Financial and Other Responsibility
 - 9-1. Tuition Fees
 - 9-2. Financial Support to the Participating Students
10. Report of Students' Educational and Research Results by the Receiving University
11. Recognition of Students' Educational and Research Results at the Sending University
12. Implementation of Monitoring of Students and Evaluation of the Program
13. Cooperation with Education Ministries and Quality Assurance Councils of the three countries
14. Appendix
15. Term of Validity

2. Forms of exchanges

			
(a) semester long exchanges with course study and/or lab work	Yes, Application time for spring semester is from October 15 to November 30 (previous year while for fall semester is from March 15 to April 30 (present year))	Available	(Tokyo Tech receives students from KAIST and Tsinghua university under the bilateral MOU)
(b) summer programs	No summer program at university-level offered by Tsinghua now.	Available	The objective of the programs is for students to participate in a lab-based research project and to attend summer school. Students are required to stay for more than 2 months.
(c) research-oriented joint educational programs	Research only program for doctor course students is available.	Available depending on mutual agreement between the research or academic advisors or department head of two universities.	The objective of the program is for students to participate in a lab-based research project, while taking some courses. The program starts in October and ends in February.
Other forms of exchanges	Students under Tsinghua - Tokyo Tech Joint Graduate Program may be supported.		Students under Tokyo Tech-Tsinghua Joint Graduate Program may be supported.

Appendix to the Implementation Guidelines

Part 1. Organization and Outline of the Program

1. Project Leaders and other personnel
 - 1-1. Project Leaders and Coordinators
 - 1-2. Faculty members and administrative staff in charge
2. Forms of exchanges.....7
3. Academic calendar.....8
4. Status of exchange students.....9
5. Financial support.....10
6. Recognition procedure of the credits obtained at partner universities
 - 6-1. Coursework.....11
 - 6-2. Research activities.....12

Part 2. Educational Systems

7. Semester system/Requirements for graduation
 - 7-1. Semester system.....13
 - 7-2. Number of academic years for graduation.....14
 - 7-3. Number of credits for graduation.....15
8. Credit system/ Credit transfer system
 - 8-1. Number of credits per class.....16
 - 8-2. Definition of credit.....17
 - 8-3. Calculation of credit.....18
 - 8-4. Limit of credit recognition.....19
 - 8-5. Regulations on credit recognition.....20
 - 8-6. Formula of credit recognition.....21
9. Grading system
 - 9-1. Form of Grades.....22
 - 9-2 GPA system.....23

3. Academic calendar (2014-2015)

			
Start of Academic Year	Sep. 1	Mar. 1	Apr. 1
Start of Spring Semester	Mar. 2	Mar. 3	Apr. 7
End of Classes for Spring Semester	Jun. 16	Jun. 20	Jul. 25
Final Exams of Spring Semester	Jun. 22 – Jul. 5	Jun. 16 – 20	Jul. 28 – Aug. 7
Summer Holidays/ Summer Session	Jul. 6 – Sep. 31	Jun. 22 – Aug. 31 Jul. 30 – Aug. 14	Aug. 8 – Sep. 30
Start of Fall Semester	Sep. 22	Sep. 1	Oct. 2
Winter Break	Jan. 1 – Jan. 3	Dec. 20 – Jan. 30	Dec. 26 – Jan. 4
End of Classes for Fall Semester	Jan. 10	Dec. 19	Jan. 31
Exams of Fall Semester	Jan. 12 – Jan. 24	Dec. 15 – 19	Feb. 2 – Feb. 13
Spring Break	Jan. 26 – Mar. 1	Feb. 1 – 28	Feb. 14 – Mar. 31

4. Status of exchange students

		
Recognized as full-time non-degree seeking students at Tsinghua. The students can take courses both at undergraduate and graduate levels, as well as join laboratories for research once get professors' acceptance.	Recognized as international exchange student who does not need to pay tuition and admission fees. They will be treated as part of the regular non-degree seeking students at the moment and provided with the on-campus housing. The dormitory fees should be paid by the incoming students.	The status of incoming exchange students under the TKT CAMPUS Asia Consortium is "International Exchange Student (non-regular, non-degree seeking student)". Tokyo Tech waives the entrance, admission, and tuition fees. Students are assigned to a laboratory where they study and conduct research under the guidance of a Tokyo Tech academic advisor.

6. Recognition procedure of the credits obtained at partner univ. 6-1. Coursework

		
Similar or related courses and credits earned at partner universities can be transferred and recognized once approved by academic office of related departments.	Credits can be transferred by the University as pass/non-pass base depending on the approval by the professors at the department who are teaching the similar topics or department head.	Before departure, students are requested to consult with department head (UG) or academic advisor (G) concerning the recognition of the credit. After returning to home university, students must submit academic transcript and other documents such as course syllabus, academic calendar, class schedule issued by the host university to the registrar. Credits obtained at partner universities are recognized by the President based on the decision of the faculty meeting. Grading of the recognized credits is "pass".

5. Financial support

		
to sending students		
Air Ticket	Not available	Not Available
		Economy class round trip air tickets are provided
to receiving students		
Stipend	A stipend of 1,700 YUAN/month for general exchange students while 2,000 YUAN/month for senior exchange students (with master degree)	800,000 Korean Won for undergraduate students while 900,000 Korean Won for graduate students
Accommodation	On-campus room is provided. (Free of Charge)	On-campus housing (Fee should be paid by the incoming students.)
		A stipend of 80,000 yen/month will be provided.
		Off-campus accommodations (free of charge) are provided.

6. Recognition procedure of the credits obtained at partner univ. 6-2. Research activities

		
Research at partner universities, which is conducted during summer and winter holiday, can be recognized as 1 credits for research of one week. The calculation is by inference and the maximum period for research is 5 weeks. The recognition also need the approval from academic office of related departments.	Credits can be transferred by the University as pass/non-pass base depending on the approval by the academic advisor or the department head (undergraduate) or research (graduate) advisor at the department.	Before departure, students are requested to consult with department head (UG) or academic advisor (G) concerning the recognition of the credit. After returning to home university, students must submit academic transcript and other documents such as course syllabus, academic calendar, class schedule issued by the host university to the registrar. Credits obtained at partner universities are recognized by the President based on the decision of the faculty meeting. Grading of the recognized credits is "pass".

7. Semester system/Requirements for graduation

7-1. Semester system

Question: How many semesters/terms does your university have? When each semester/ term starts and how many weeks it continues?

 • 3 semester-system (fall, spring, summer) • Fall semester (semester 1): 18 weeks (incl. exams) - Starting in September • Spring semester (semester 2): 18 weeks (incl. exams) - Starting in February • Summer semester (semester 3): 12 weeks starting in June	 • KAIST has semester system, i.e., two (spring and fall) • Spring semester (semester 1): 18 weeks (incl. exams) - Starting in September • Fall semester (semester 2): 18 weeks (incl. exams) - Starting in February • Summer semester (semester 3): 12 weeks starting in June	 • 2-semester system (spring and fall) • Spring semester (semester 1): 15 weeks starting in April+1 week exam • Fall semester (semester 2): 15 weeks starting in October+1 week exam
--	--	---

7. Semester system/Requirements for graduation

7-3. Number of credits for graduation

Question: What is the minimum number of credits that are required to obtain for the graduation of undergraduate and Master's programs. Also, please describe if your university have additional condition for graduation (e.g., thesis).

 • Undergraduate programs: 170 credits • Master's program: 33 credits (In addition to 23 credits, thesis is required) (Medical school: for the specialty of bio-engineering, no less than 24 credits)	 • Undergraduate program: 130 credits • Master's program: 33 credits (at least 21 credits for course work. In addition, 12 thesis or additional credits and thesis are required. • PhD's or MS-PhD's Program: 60 credits including 30 credits for coursework plus 30 research credits) and thesis are required	 • Undergraduate program: 124 credits • Master's program: 30 credits (In addition to 30 credits, thesis is required for Master's degree.)
---	--	--

7. Semester system/Requirements for graduation

7-2. Number of academic years for graduation

Question: How many academic years are needed to complete the undergraduate and graduate programs?

 • Undergraduate program: 4 years (Medical school: 4-8 years, School of Architecture: 5 years) • Master's program: 2-3 years (Medical school, for clinical 3 years and no longer than 4 years)	 • Undergraduate program: 4 years (Medical school: N.A.) • Master's program: 2 years (Medical school: N.A.) • Ph.D program: 4 years • MS-PhD program: 5 years	 • Undergraduate program: 4 years (Medical school: N.A.) • Master's program: 2 years (Medical school: N.A.) • Ph.D program: 3 years • Integrated Doctoral Education Program: 3-4 years
--	---	--

8. Credit system/Credit transfer system

8-1. Number of credits per class

Question: What is the most common number of credits per each of the classes (lectures, lab works, seminars, etc.)?

 • One lecture class is usually 2-3 credits. • One lab work class is usually 1-3 credit (only for undergrad.) • One seminar class is usually 1-2 credits.	 • One lecture class is usually 3 credits. • Lab class(es) can be included in the lecture. • One seminar class is usually 1 credit.	 • One lecture class is usually 2 credits. • One lab work class is usually 1 credit. • One seminar class is usually 2 credits
--	--	--

8. Credit system/Credit transfer system

8-2. Definition of credit

Question: Whether the credit is defined based on hours of lecture, lab work and seminars (only contact hours), or based on students' overall workload (including homework, self-study and preparation for exams)? Are there any differences in definition between undergraduate and graduate programs?



KAIST



- Credit for undergrad is recognized based on **hours of lecture and seminar** (both 16 hours a credit), **lab work** (32 hours a credit).
- For graduates, 16 **hours of lecture** is a credit and 10 **times of seminar** with a summary earns one credit.

- Credit is recognized based on **hours of lecture, lab work and seminars** (meeting times).
- There is no difference between undergraduates and graduates.

- Credit is recognized based on **hours of lecture, lab work and seminars** (contact hours).
- There are no difference between undergrads and graduates. (MEXT guidance stipulates 45 hours of students overall workload equals one credit.)

8. Credit system/Credit transfer system

8-4. Limit of credit recognition

Question: Is there any limit on credit recognition when students obtain academic credit in foreign countries (e.g., 66 out of 130 credits are recognized at universities overseas)?



KAIST



- Undergraduate program: **No limit**, but **some credits** earned for course attendance may **not be recognized**.
- Graduate program: **At least 1/3 credits should be earned in Tsinghua.**

- **66 credits out of 130** credits for undergraduate program
- **24 credits out of 33** credits for master program (students have to study at KAIST at least one year to obtain KAIST's master degree)

- Undergraduate program: **60 credits out of 124** credits
- Graduate program: **10 credits out of 30** credits

8. Credit system/Credit transfer system

8-3. Calculation of credit

Question: What is the basis of calculation of the credit? [For example, One credit is given for a lecture of one hour per week for a semester (16 hours lecture in total) or for a lab work of two hours per week for a semester (32 hours lab work in total)]



KAIST



- For undergraduates, 1 credit is given for a **lecture/seminar of one hour per week for a semester** (16 hours lecture in total) or for a **lab work of 2 hours per week for a semester** (32 hours lab work in total)
- For graduates, 1 credit is given for **16 lectures of one hour per week for a semester** (16 hours lecture in total), or for **attending seminar 10 times**.

- 1 credit is given for a **lecture of one hour per week for a semester** (14 hours lecture in total plus two exams such as midterm and final) or for a **lab work of two hours per week for a semester** (32 hours lab work in total).

- 1 credit is given for a **lecture/seminar of one hour per week for a semester** (15 hours lecture in total) plus exam or for a **lab work of two hours per week for a semester** (30 hours lab work in total) plus exam.

8. Credit system/Credit transfer system

8-5. Regulation on credit recognition

Question: What are the regulations on credit transfer system? Does your university only admit foreign university's credits that are compatible with the classes listed in your own curriculum, or do you have any scheme to admit foreign credits of the classes that are not offered at your university?



KAIST



- Each department has an authority to admit undergraduate credits obtained in other universities based on the courses.
- For graduates, the Disciplinary Degree Committee is fully empowered for credit recognition and transfer.

- The similar courses in KAIST curriculum will be transferred to 'major' category which had not been taken before at KAIST. But if the course is not in our own curriculum, it is accepted as 'elective.'
- Each department has an authority for approval for credit transfer.

- Each department has an authority to admit credits obtained in other universities, and the credits that are not in Tokyo Inst. of Tech. curriculum may be admitted as an exception.

8. Credit system/Credit transfer system

8-6. Formula of credit recognition

Question: Does your university have any formula of credit recognition between foreign universities, including universities in Europe and the U.S.?



- For undergraduates, each department has an authority to admit credits and there are no concrete formula for credit transfer, but the courses must meet the course standards of Tsinghua U. for the credits to be transferred.
- For graduates, the Disciplinary Degree Committee is fully entitled to decide how credits earned abroad are calculated and transferred.
- Depending on hours of lecture, laboratory, practice, the credits can be transferred to KAIST credits as pass or non-pass base depending on the approval from the professors, department head or advisors.
 - Lectures:
 - over 16 hours- 1 credit, over 32 hours- 2 credits, over 48 hours- 3 credits, over 64 hours- 4 credits
 - Laboratory work:
 - over 32 hours- 1 credits, over 64 hours- 2 credits
- Since the credits obtained at foreign universities are usually transferred to similar class of Tokyo Institute of Technology.
 - Only in case there are no responding class at TIT, the formula to convert 2 ECTS credits into 1 TIT's credit may be used (Conversion of other foreign credits are decided by the departments in a case by case basis).

9. Grading system

9-2. GPA system

Question: Does your university introduce GPA (Grade Point Average) System? What is the point attached for each grade? [For example, A=4, B=3, etc.]



- Tsinghua University does not have GPA system for grading students.
- Tokyo Institute of Technology has started implementing GPA system for 2-4 years since 2012 as a trial.

A+: 4.3, A0: 4.0, A-:3.7,
B+: 3.3, B0: 3.0, B-: 2.7,
C+: 2.3, C0: 2.0, C-: 1.7,
D+: 1.3 D0: 1.0, D-: 0.7,
F: 0

9. Grading system

9-1. Form of grades

Question: What kind(s) of letter grades or other form(s) of grades are commonly used at your university? What are the intervals between each grade?



- Tsinghua U. does not adopt the letter grade system, but has **actual number scoring system**. Full score is 100, and 60 is the minimum requirement to obtain a pass. As for some courses which does not require an examination, excellent (only for undergraduates), pass and fail are given based on the result of review.
- Tokyo Inst. of Tech does not adopt letter grade system, but has **actual number scoring system**. Full score is 100, and 60 is the minimum requirement to obtain a pass. As to credits obtained at foreign univ. (and in some other cases), only pass/fail scores are given. In case letter grade is needed, the actual numbers are converted as **100~80: A, 79~70: B, 69~60: C, 59~: Fail**

A+: 100-95%, A0: 95-90%,
A-: 90-85%,
B+: 85-80%, B0: 80-75%, B-: 75-70%,
C+: 70-65%, C0: 65-60%, C-: 60-55%,
D+: 55-50%, D0: 50-45%,
D-: 45-40%,
F: 40-0%,
or
Satisfactory or Unsatisfactory

TKT CAMPUS Asia & TiROP 2014

Tokyo Institute of Technology



COLLECTIVE ACTION FOR MOBILITY PROGRAM
OF UNIVERSITY STUDENTS IN ASIA

岡山大学

「東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム」

長 塚 仁（岡山大学グローバルパートナーズ副センター長（大学院医歯薬総合研究科教授））

小 野 真由美（岡山大学グローバルパートナーズ講師）

<発表の概要>

岡山大学では全学体制で取組みを進めており、非常に高いモビリティを発揮している。現在まで、既に442名の学生の交流実績を挙げている。プログラムには、「共通善」と「中核的人材育成」の2つのキーワードがある。多彩な学生を受け入れるなかで、東アジアの共通善というキーワードを共通認識化させて、教育を展開していきたい。3か国共通教科書の編纂や、地域の文化、環境問題などを通じた地域コミュニティに根差した授業の開発、リージョナル・カンファレンス、多言語セミナー、ナノバイオ・自然系セミナーなどのアクティブラーニングを活用して地域の中核人材を育成していく。ナノバイオコースでは、薬学系のダブル・ディグリー（DD）も始動しようとしているところである。

岡山大学の語学カフェは、全学に開かれたソーシャルラーニング・スペースとして、L-Cafe と Campus Asia Cafe の2つが開設されている。特に「キャンパス・アジア」プログラムでは、長期派遣の事前・事後学習や留学生のオリエンテーションの場として Campus Asia Cafe が活用されている。図書や教材も豊富で、「キャンパス・アジア」の学生サークル等の場としても利用されている。一方、L-Cafe では、色々な言語のカフェを開設しており、学生イベント等も開催している。異文化理解や交流の場として、語学カフェは重要な役割を果たしており、学生の満足度も高い。

派遣される学生が全員加入する独自のオーダーメイド保険も整備した。ドクターヘリ等手厚い保障のほか、危機管理オリエンテーションや、緊急連絡等がサービスに含まれ、現地での対応も行なっている。

プログラムでは、各大学が独自に「キャンパス・アジア」科目を設置し、そのうえで、中韓ワークショップやサマー・スクールなどを共同教育プログラムとして3大学が開発した。アクティブ・ラーニングを拡充しており、現地語・文化学習として、「リージョナル・カンファレンス」と題した座学とフィールドワークを合わせた科目を実施し、学生間での議論に加え、地域の方から指導してもらうなどの CBL 型科目を充実させている。

現地語修得を重視し、その発展として多言語を用いたアクティブ・ラーニング型授業を開発している。日中韓英の言語で授業を行うことにより、中韓からの学生や留学から帰国した学生による深い議論が可能となっている。日常生活の中での地域学習および現地語・文化学習の場を充実するためにシェアハウスも設置している。学生主体で問題発見型の多言語交流ができる環境を充実させている。

教育プログラムの充実により、アジアクラット（東アジアの中核人材）の育成にも成果が見えてきた。

提携大学

中国：吉林大学

韓国：成均館大学校

平成26年度「キャンパス・アジア」モニタリング説明会シンポジウム
岡山大学キャンパス・アジア推進プログラム

Multilingual Seminar

CAMPUS ASIA
OKAYAMA UNIVERSITY

Okayama University's Campus

特徴的取り組みの紹介

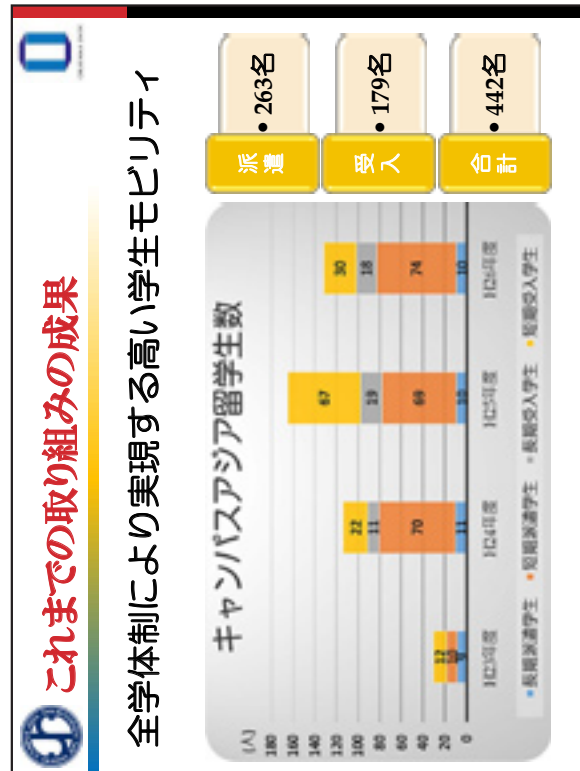
学生の潜在的共通善意識を引き出す教育

東アジアの共通善を実現する深い教養に裏打ちされた中核的人材育成プログラム

特長：

- 東アジア共通の伝統的価値を再解釈し共有化
- 共通善教育研究
- 教科書編纂
- 実験教室を通じたPBL、CBL授業開発
- リージョナルカンファレンス
- 多言語セミナー
- ナノバイオ・自然系セミナー

3国の学生が本来持つ共通善への意識を引き出し、アクティブラーニングで相互に確認し合うプロセスを通じ、東アジアの地域中核人材を育成



先駆的取り組み

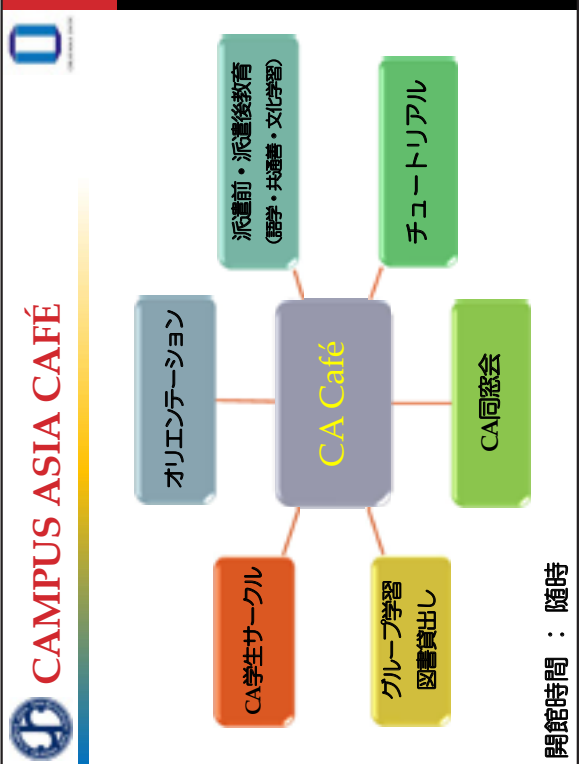
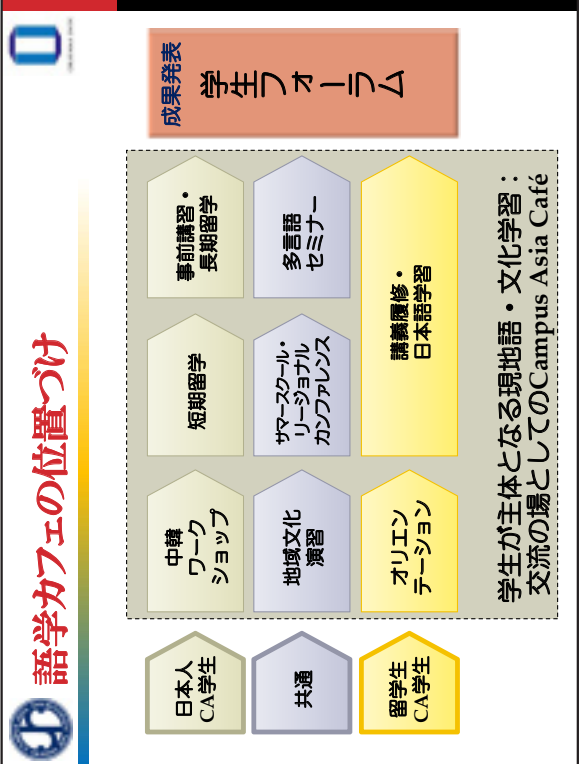
語学カフェ(L-cafe)
オーダーメイド保険整備
現地語・文化学習

Language Cafe

China-Korea Workshop

Multilingual Seminar

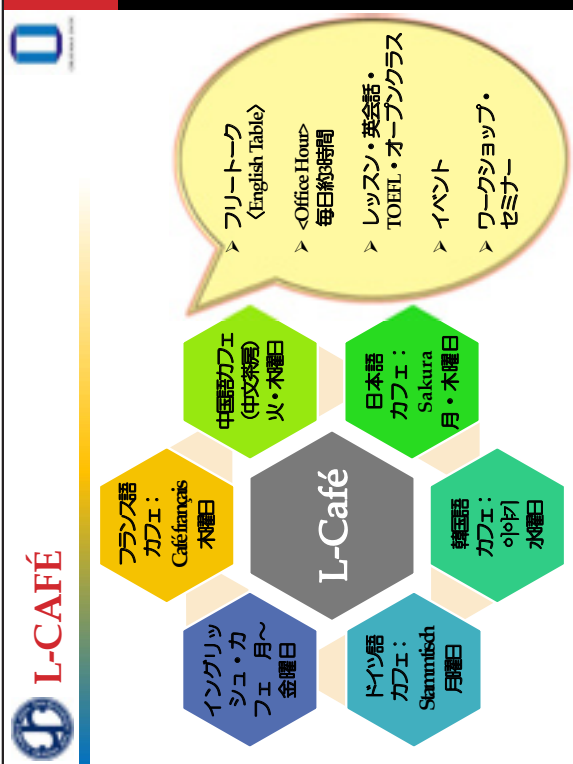
Completion Ceremony at Sanggyunkwan University



ソーシャルラーニングの促進

- 学生生活に関する様々な情報共有
- 学生等身大の異文化体験
- 楽しく語学が身につく
- 学生主体の空間

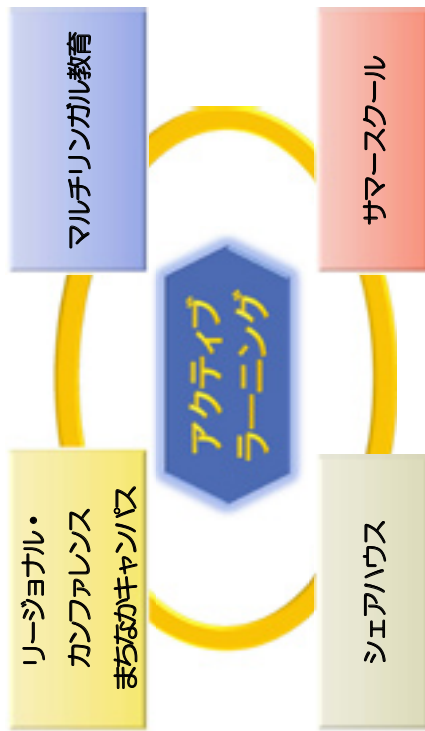
- 自習スペース、多目的スペース
- 留学した先輩による無料語学講座
- 外国図書の貸出
- 語学カフェ（日・英・韓・中・仏等）



語学CAFÉの一番良いところ



現地語・文化学習



オーダーメイド保険整備

岡山大学から派遣される学生が全員加入

導入の背景

派遣留学生の増加
海外での危機管理対応人員の不足
迅速でプロフェッショナルな対応の要望

サービスの範囲

危機管理オリエンテーション、緊急連絡（大学、家族）
保証：死亡、治療、救援、個人賠償、携帯品損害、手荷物遅延、航空機遅延

海外デスクサポート：海外18都市、中国医療・生活サポート

事例：
2014年11月
留学中に事故

緊急連絡
ドクターヘリで搬送
大病院で精密検査
家族の渡米・看護
日本への移送、家族同伴
日本の病院での入院

東アジア型 グローバル教育

ナノ・バイオ、自然系セミナー
中韓ワークショップ、学生フォーラム、サマースクール

成徳大学校（韓国）

キャンパスアジア科目
東アジアの歴史と文化
東アジアの文学
東アジアの言語入門
東アジアの相互理解と異文化理解

岡山大学（日本）

共通教育
日中韓三国関係と社会
東アジア国際・地域文化特別講義
共通教育多言語セミナー
近現代日中韓三国関係史
リージョナルカンファレンス

吉林学（中国）

キャンパスアジア連携シリーズ
東アジアの発展と協定
米中及東アジアの一体化
世界正義の発展
中日韓関係の
相互理解と異文化理解
中国の文化政策

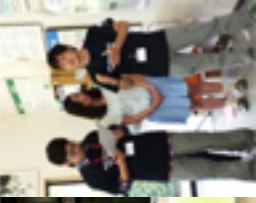



リージョナル・カンファレンス

CBL: Community Based Learning 型科目の充実

地域をキャンパスに、座学とフィールドワークにより、高梁地区の山田方谷による地域財政の再生、水島地区の公害環境問題、閉谷学校の儒教教育、生糸地区の朝鮮通信使、矢掛町の歴史文化保存、倉敷の町屋トラスト、津山の洋学、岡山の街づくり、曹源寺の仏教思想など様々な問題を提示し、PBL・CBL学習を実践してきた。

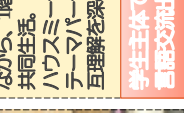







シェアハウス



（学生フォーラムでの学生発表）

日中韓三国の学生が、それぞれ2階のプライベート空間を持ちながら、1階の共同スペースで共同生活。ハウスミーティング、家庭菜園、テーマパーティー等を通じ、相互理解を深める。

学生主体で、国際親善と多言語交流出来る環境を構築

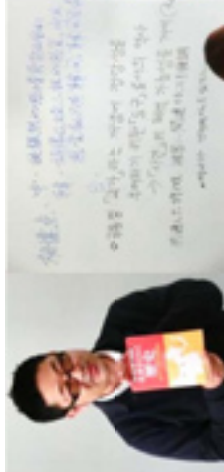



マルチリンガル教育の拡充

現地語習得を重視し、多言語を用いたアクティブラーニング型授業を開発
実験教室：「まちなかキャンパス」「共通善教育多言語セミナー」の開設

- 歴史認識や教科書問題をテーマに、中韓への長期派遣帰国学生とCA受け入れ学生がともに学ぶ

日中韓の言語（或は、共通言語としての英語）のいずれか一つの言語に限定することなく、多言語を用いて授業を行うことにより、中韓からの留学生と中韓留学から帰国した日本人学生が、言語習得の領域を超えたより深い議論が可能となる







ご清聴ありがとうございました。






名古屋大学(法) 「東アジア『ユス・コム・ネ』(共通法)形成にむけた 法的・政治的認識共同体の人材育成」

宇田川 幸 則

(名古屋大学大学院法学研究科教授)

<発表の概要>

名古屋大学のプログラムは、東アジアの政治・法を理解し、東アジア共通法の形成に参画できる人材の育成をめざしている。半年に一度、クオリティー・アシュアランス会議(QA 会議)を開催しており、2014 年 12 月の会議ではまだ実行されていないデュアル・ディグリーについて協議をする予定である。

本大学のプログラムは、6大学、7学部・研究科が参加しており、学部中心であることが特徴である。大学院と異なり、国の規制が多く、中国においても授業科目名など教育部の規制が厳しい。ジョイント・ディグリーについても各国にそれぞれ規制があり、日本ではようやく閣議で認められ、これから具体的な規定作成に入る状況である。プログラムでは、認められた場合に早く対応することを目的・目標としてきた。

社会科学、特に法律学の観点からは、英語で授業を実施することが言語のバリアフリー化にはつながらない。裁判例、教科書、国の通達など、日中韓ともほとんどが母国語で書かれているため、事前教育では法や政治を理解するために派遣先の言語の学習を中心的に取り上げている。

プロジェクトの目的、理想とする人材は、学生のニーズと必ずしも一致するものではないが、目的やニーズを学生が理解できるような環境作りのほうが重要ではないかと思われる。リーダーの育成であれば、自分で開拓出来るような人材を作るため、全てお膳立てすることはしないほうが良いと思う。

日中韓における単位数の違いは協定で解決できたが、各国のニーズは異なっており、中国、韓国は大学院の学生の交流を特に強く要求している。日本では法学研究科に進学する者が少ない上、法科大学院では海外との単位互換認定が難しく、交流が困難である。学生の就職活動も日中韓共通の問題で、就職活動をするため、滞在予定を早く切り上げて帰国するケースもある。

学生は、正規の授業以外に派遣先の言語や法、政治の授業を受ける必要がある。学部生には放課後に授業を行うこともあり、負担が大きい。プログラム担当教員の負担も重い、「キャンパス・アジア」プログラムの実施が大学入学の動機になったケースもある。今後もプロジェクトが継続され、有意義な人材を育成するという目的が達成できるよう、資金面でもご支持をいただきたい。

提携大学

中国：中国人民大学、清華大学、上海交通大学

韓国：成均館大学校、ソウル国立大学校



東アジア「ユス・コムーネ」
(共通法) 形成にむけた法的・
政治的認識共同体の人材育成

名古屋大学

宇田川 幸則
(名古屋大学法学研究科・教授)

2

Quality Assurance 協議会

3

Quality Assurance 協議会

- 年2-3回各国持ち回りで実施

回	年月	場所	回	年月	場所
第1回	2012.01	中国/北京	第6回	2013.07	韓国/ソウル
第2回	2012.02	日本/名古屋	第7回	2014.02	日本/名古屋
第3回	2012.03	中国/上海	第8回	2014.07	中国/北京
第4回	2012.07	韓国/ソウル	第9回	2014.12	韓国/ソウル
第5回	2013.03	中国/北京			

4

Quality Assurance 協議会

- 協議内容
 - ー 派遣・受入学生の選抜・確定
 - ー 参加大学のカリキュラムの確認
 - ー 共通科目
 - ー 成績評価方法
 - ー 単位認定
 - ー デュアル・ディグリー



5

学生支援

7

学生支援

【受入学生】

- 費用支援
- 中国人・韓国人教員によるフォロー
- 生活・語学・履修関係のオリエンテーション
- 日本語教育の多様な選択肢
- チューターの配置
- 日本人のキャンパス・アジア学生によるサポート
- 電子機器の貸与

6

学生支援

【派遣学生】

- 事前教育
- 事前研修
- 費用支援
- テレビ会議等による面談
- フォローアップ訪問
- 電子機器の貸与
- 現地コーディネーターとの情報交換
- 誓約書によるリスク管理



8

学生への事前の情報提供

学生への事前の情報提供

9

- 情報の提供方法
 - －事前オリエンテーション
 - －現地への事前研修
 - －前年度の学生の報告書配布
 - －留学経験者の報告会
 - －留学経験者・留学生との交流
(Skype、交流会、Facebookなど)

学生への事前の情報提供

11

- 情報内容
 - 【生活に関する情報】
 - ・寮
 - ・生活にかかる費用
 - ・生活のコツ
 - ・生活上の困難点
 - ・どのような生活が送れるか

学生への事前の情報提供

10

- 情報内容
 - 【学習に関する情報】
 - ・履修可能な講義とその単位数
 - ・講義内容と成績評価方法
 - ・帰国後の単位認定方法
 - ・時間割
 - ・学習方法
 - ・学習上の困難点

学生への事前の情報提供

12

- 情報内容
 - 【その他】
 - ・インターンシップ
 - ・留学先での支援
 - ・留学先の相談窓口
 - ・困難な状況に直面した場合のガイドライン



モニタリング学生部会

～後輩に伝えたいこと、次の CA 学生のために何を考えていくべきか(質保証の観点から)～

「キャンパス・アジア」プログラムの日本における 1 次モニタリングでは、外部質保証活動への学生参画という観点から、各プログラムに参加経験のある学生によるモニタリング学生部会が設けられた。2013(平成 25)年 12 月の「モニタリング学生部会ワークショップ」でまとめられた「キャンパス・アジア提言書」ではプログラムに対する学生部会としての提案が示されており、2014(平成 26)年 1 月のモニタリング委員会に報告された。モニタリング委員会は、提言書に示された意見を「キャンパス・アジア」の 2 次モニタリングの検討に活用していくこととしている。

本シンポジウムでは、「モニタリング学生部会ワークショップ」の様相を紹介する映像が上映されたのち、「キャンパス・アジア」プログラムを経験した日中韓の学生により、ワークショップ後の活動、留学生としての経験から得たこと、課題などについて発表がおこなわれた。なお、モデレーターもプログラムの修了生が担当し、司会・進行をつとめた。



－モデレーター、発表者による自己紹介と発表の概要－

【中田 佳珠美(モデレーター) 神戸大学大学院国際協力研究科修士課程修了】

－自己紹介－

神戸大学大学院国際協力研究科在学中に、ダブルディグリープログラムで高麗大学国際大学院に一年留学し、両大学で修士号を得ました。現在は、Teach For Japan のフェローとして中学校で英語の先生をしています。神戸大在学時は、教育開発学、経済、平和学、防災論について学び、修士論文では教育と貧困に焦点を当てホームレス問題を取り上げました。また高麗大では哲学、ビジネス、統計学、人権、日本文学、国際政治などを学び、韓国における多文化家族について修士論文を執筆しました。

【伊藤 光理 名古屋大学法学部】

－自己紹介－

名古屋大学法学部4年生。東アジア共通法の形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成を目指したプログラムに参加。中国人民大学で言語、比較法・比較政治学の授業を中心に履修。とくに中国の憲法、人権思想について学び、障がいをもつ学生との勉強会で日本の障がい者教育法制について報告するなど、障がい者人権の保護制度の日中比較を行った。

－発表概要－

学生部会ワークショップ後、東京大学を中心にビデオ作成を試みたが、全大学からは集まらずに頓挫し、大学間や国を越えて学生主導で挑むことに課題を感じた。直接顔を合わせるようなアニアルミーティングがあるとよい。名古屋大では学生シンポジウムや同窓会報の発行により、学生が参画している。大学内の取組みを多くの大学でシェアする必要性を感じるが、大学外への発信は学生だけでは難しい。卒業生がキャンパス・アジア(CA)にどうかかわっていくかが重要で、就職時の CA の経験がどう生

かされたか周知していきたい。

-モデレーターからの質問「学生部会ワークショップ後に CA の知名度は上がったか？」への回答-

CA の知名度をあまり実感できていない。なるべく大学間の交流に参加しようとしているが、CA の枠内にとどまっている。知名度の向上を考えていきたい。

— 【パク ボムジュン(Park Bumjoon) 東京大学大学院公共政策学教育部】 —

-自己紹介-

My name is PARK Bumjoon from the Republic of Korea. I am pursuing a double Master's degree at Seoul National University's Graduate School of International Studies (GSIS), and The University of Tokyo's Graduate School of Public Policy (GraSPP) through the BESETO (Beijing-Seoul-Tokyo) Campus Asia Program. I am currently working on my graduation thesis, which is tentatively titled "Japan's Education Politics". I have attended GSIS for one year, and am currently in my second semester at GraSPP. In this year I have also participated in Campus Asia Summer Program, and had a summer Internship with KDDI Research Institute. I will be at Peking University's School of International Studies next spring for one semester.

-発表概要-

個人的にはプログラムに満足しているが、改善点を2つ示したい。まず、CA 学生として参加できるプログラムについて、事前の情報が十分でないと感じた。そのプログラムがCAのカリキュラムとどう関係づけられるかという情報も少なかった。もう1点は、初期定着の支援についてである。東京に来るのは3回目で、個人的には問題なかったが、初来日の学生もいる。新たな環境で自ら挑む姿勢も大事だが、携帯電話の契約や、生活圏の地理や有用な店の情報を効果的に発信する仕組みがあると助かる。知識の体系的な継承が重要で、カリキュラムであれ生活情報であれ、情報を効果的に提供することで、学生はプログラムに効果的に取り組めるだろう。

-モデレーターからの質問「プログラムにおいて論文は何本執筆するのか？」への回答-

3大学を回遊して、論文は1本執筆する。

— 【ズ リシン(Zhu Lixin) 九州大学大学院総合理工学府】 —

-自己紹介-

My name is Zhu Lixin from China. I am studying for my master degree in Pusan National University and Kyushu University. Research topic is offshore wind turbine.

2014.03 enrolled in mechanical engineering department of Pusan National University

2014.08 participated a two-week CAMPUS Asia EEST Summer School in SJTU, Shanghai, China.

2014.10-2015.02 study in Kyushu University

-発表概要-

今回のキャンパス・アジアへの参加が、初来日である。来日前にも、日本の製品をよく使っていたが、来日してみて、清潔な環境と人々の礼儀正しさに感心している。学術的な経験もさることながら、3国の文化の理解に役立ったのは貴重な機会だった。プログラムには大きな可能性を感じている。1週間に11コマ受講するのは正直大変ではあるが、2年間で2つの学位が取得できるのは驚きである。

-モデレーターからの質問「日本語が上手く話せたら来日留学は今より簡単であったか？」への回答-

片言の日本語でも、生活には不便を感じない。

学生会ワークショップを終えて

中国人民大学留学
名古屋大学法学部4年 伊藤光理

学生会 ワークショップ

- CAMPUS Asia! に関しての **フィードバック**
学習面、生活面、その他
- **提言書**



2

フィードバック 学習面

良かった点

- 専門外のことも学べる
- 多様性・異文化交流
- 雰囲気がいよい
- 自分のペースで勉強できる
- 現地語の勉強ができる



改善点

- 事前研修
- 授業選択
- 学校体制の違い(単位互換、成績評価、学期制)
- 学習のサポート体制
- 学生との交流の機会
- 大学院生(指導教員間のネットワーク、研究室の情報)が不足)

3

フィードバック 生活面

良かった点

- 母国を客観的にみることが
できる
- 交友関係
- 自由な時間が多い
- 奨学金などのサポート



改善点

- 保険
- 奨学金(タイミング、額)
- 教科書代
- 全般的なサポート
- 言語面での苦勞
- 寮費・施設
- 現地学生との交流の機会

4

フィードバック その他



- **就職活動**について
 - － 就活への影響
 - － インターンシップの機会
 - － 留学生用の就職合同説明会
- **Campus Asia制度**そのものについて
 - － プログラムがいくつかあってわかりにくい
 - － プログラムの周知
 - － 学生間の交流（Facebookの活用）

5

ワークショップ後の活動

- 恋するフォーチュンクッキー
 - 学生主導による大学間の連携の難しさ
- 東アジア認識共同体形成に向けた**学生シンポジウム**の開催
- **同窓会報**の作成
- 日中韓関係に関する**討論会**

7

学生からの提言

- **学生総会**の開催
 - ＝ CAMPUS Asiaの知名度の向上
 - 学校・国を超えた学生の交流
- **認定証**の発行
 - ＝ CAMPUS Asia の授業を履修することで認定証を発行

6

課題

- 学生主体の活動
- 大学外への発信
- 卒業生の関わり方



8

CAに関する感想

PARK Bumjoon
BESETO Double Degree

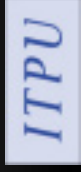
改善の余地

- 各大学院の色々なプログラムに関する事前紹介
- 初期定着支援の効率化

2

CA学生として参加できる研究
ユニットなどの様々なプログ
ラムに関する事前説明

- 一年の短い期間を最大に活用
する為には事前に計画を立て
る必要がある
- ウェブサイトの膨大で複雑な
情報では計画を整理すること
が難しい
 - CA学生も参加できるか
 - CAのカリキュラムとどう合
わせるのか
 - 日本語能力が必要か

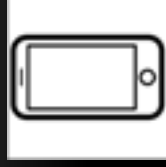


海外政策教育・研究ユニット

3

初期定着支援の効率化

- CAの学生の中には日本での生
活の経験があるが日本語がで
きる人もいるが、日本が初め
ての外国で日本語ができない
人もいる
- 自分で色々調べたり間違えな
から新しい環境に慣れること
も良い経験だが、**現状ですら
効率的に生活**をする場合もある
- CA学生の定着を助ける
「チャーター」があるが、**人
によって外国人学生にとって
有用な情報やノウハウに差が
ある**
 - 安くお得サービスを買う方法
 - 生活する周辺の地理や有用な
店など
 - 生活に必要な物品を買う方法



4

要点：知識の継承

- 経験があるCA学生をチューターとして積極的に活用
- CA係で情報を集めて管理



My impression on

CAMPUS-Asia, KU, Student exchange program, aiming double degrees (master course) in the filed of Energy and Environmental Science and Technology (EEST)

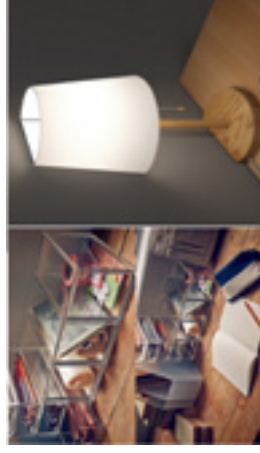
- Name : Zhu Lixin
- Nationality: China
- Course: Graduate student enrolled in EEST courses in two Universities,
Department of Energy and Environmental engineering,
Interdisciplinary Graduate School of Kyushu University
and
School of Mechanical Engineering, Pusan National University

1



➤ Impression of Japan

- Clean everywhere; town, streets
- Serious and earnest about whatever doing



→ Goods designed by Kenya Hara and sold by Mujirushi-Ryohin

3



Activities During Campus Asia Program

Period	University	Remark
2014.03 -	Pusan National University	Graduate course, Mechanical Engineering, Energy System Research: Offshore wind turbine
2014.09		
2014.08. (2 Weeks)	Shanghai Jiao Tong University	Summer School (Lectures, Seminars, Experiments)
2014.10 -	Kyushu University	Intern. graduate course, Energy and Environmental Sci. & Tech. Dept. of Earth System Science and Technology Research: Offshore wind turbine
2015.02		
2015.03 -	Pusan National University	Lectures and Lab works for thesis
2015.07		
2015.08. (2 Weeks)	Pusan National University	Summer School (Lectures, Seminars, Experiments)
2015.09 -	Pusan National University	Lectures and lab works for thesis
2015.02		
2016.02	Graduation	Normal graduation (2 Years)
2016.03	Graduation	Graduation with shortened period (1.5 Years)

2



➤ Impression on CAMPUS Asia



- Precious opportunity for communication
 - Academic, language, Culture
- The schedule in KU, SJTU, PNU arranged properly by CA program
- 2 years double degrees - incredible

With participating students from KU, PNU and SJTU in Summer School

4



Problem - Institutional difference

	Mon	Tue	Wed	Thu	Fri
8:40-10:10	Energy science				
10:30-12:00		CFD	Modeling		Solar energy
13:00-14:30	Fossil Energy			Mathematics	
14:50-16:20	English	English	English writing		
18:00-19:30			Japanese	Japanese	

- We DD students have to work so hard. In my case, 11 courses in one week! Not enough relaxing or free time.

Enrollment at PNU

Enrollment period: PNU 2 years

Thesis Defense Submission

Graduation from PNU

SS1

>14 credits

Enrollment at KU

SS2

KU 1.5 years

Short-term completion

Autumn Seminar

Graduation from KU



Group Photo at Summer School at Shanghai Jiao Tang University in 11-22, Aug. 2014



In addition to studies on EEST, all students had nice time, together with all lectures, professors and staff member, exchanging ideas, opinions , dreams etc. among different countries, age groups, professions, sexuality and so on.

Thanks for your attention !

第3部

パネルディスカッション

モデレーター

岡 本 和 夫 大学評価・学位授与機構理事

パネリスト

モニタリング委員長

佐 藤 東洋士 学校法人桜美林学園理事長・桜美林大学総長

モニタリング委員・専門部会長

牟 田 博 光 一般財団法人国際開発センター理事

文部科学省

松 本 英 登 高等教育局高等教育企画課国際企画室長

「第2部」のプログラム発表者及び学生代表者

(当日プログラム P. 2～3参照)

パネルディスカッション

（概 要）

第1部及び第2部のフォローアップとして、事前に来場者に「質問票」を配布し、発表内容についての質問は、第2部終了までに会場内に設置してある「回収箱」に提出してもらった。第3部には、プログラム発表者、学生代表者、モニタリング委員、文部科学省がパネリストとして参加した。モデレーターの進行により、提出のあった「質問票」の内容を中心に、パネリストに対して次のような質問を行いながら、プログラムの内容や課題、今後の方向性について、それぞれの立場で意見交換を行い、議論を深めた。

＜パネルディスカッションでの質問事項＞

- プログラム発表者に対して
 - ・ ダブル・ディグリー・プログラムやジョイント・ディグリー・プログラムの質保証の考え方
 - ・ プログラムを修了した学生のキャリア・パス
 - ・ プログラムの今後の方向性
- プログラムの学生代表者に対して
 - ・ プログラムでの経験を活かした今後のキャリア
 - ・ 今後「キャンパス・アジア」プログラムに参加しようとする後輩へのアドバイス
- モニタリング委員に対して
 - ・ 日本側1次モニタリングを実施した感想
- 文部科学省に対して
 - ・ 「キャンパス・アジア」の今後に対する期待と展開

岡本 それでは時間になりましたので、第3部を始めます。第3部では、会場の皆様から質問票が届いておりますので、質問をしてパネルディスカッションを進めていきたいと思っておりますが、始めに簡単に、パネリストで並んでいらっしゃる方のお名前だけ私から紹介させていただきます。

向かって右側から、一橋大学の一橋先生、続いて東京大学の宮本先生、名古屋大学と東北大学の共同プログラムから、東北大学の土井先生、政策研究大学院大学の細江先生、九州大学の田邊先生、神戸大学の田中先生、立命館大学の廣澤先生、東京工業大学の原先生、岡山大学からは小野先生、そして名古屋大学の宇田川先生。また、学生からは今壇上に上がっていただいた伊藤さんと中田さんに出席いただきます。また、文部科学省高等教育局高等教育企画課の松本英登国際企画室長です。そして、モニタリング委員を務められました牟田先生と、最初にご挨拶いただきました佐藤委員長でございます。

それでは、会場からの質問をしていきたいと思います。一橋大学では、3週間のインテンシブ・コースを設計されていますが、その期間を定めた理由を聞きたいということです。

一條 世界的にこのような合同プログラムが行なわれている場合がありますが、3週間程が集中度を維持するにも丁度良いということもありますし、3校の3拠点で行ないたく、1週間ずつで計3週間と期間を設定しました。また、それに応じたコンテンツも作り上げてきました。

岡本 九州大学では、単位移管と言いますか、3週間程で単位の換算方法を共通化しているとお話がありました。その辺の考え方をもう少しご紹介いただければと思います。

田邊 実際の授業時間を単位の換算手段としています。演習につきましては 30 時間ということになっております。それに従いまして、15 時間の授業で与えられるのは1単位、45 時間の授業時間で3単位と、上海でもどこでもそうですが、基本的にはこうなります。演習はその倍になります。45 時間であれば3単位、日本では 30 時間ですので2単位と、お互いに時間換算で単位を動かしております。それでよろしいでしょうか。

岡本 会場からの質問で一番大きな質問は、ダブル・ディグリーやジョイント・ディグリーと質保証の関係ということでした。例えば、九州大学では修士論文を1本、神戸大学では2本書くとのことでした。専門分野にもよるでしょうが、質保証という観点から言いますと、どう3カ国で調整していくのか、また、外へ出た時にどのように質保証がきっちりとされているのかとの疑問が、このようなハイレベルのプログラムになると出てきます。その点について、まずは神戸大学のお考えから伺いたいと思います。

田中 3か国の大学が最初に会合をした際に、我々が行うダブル・ディグリーについて、それぞれ論文はどのような方針かと確認しましたら、それぞれが修士論文を課すこと、しかも二つの大学で共通ではなく必ず大学のオリジナルを書くという方針が3大学共通していたので、そのまま2本書いてもらうことになりました。ちなみに、我々の国際協力研究科では他でもダブル・ディグリーを行っており、例えばインドネシアの大学との場合では、神戸大学で修士論文を書くと、あちらで論文を審査し、あちらの修士論文として認める、といった制度を採用しているところもあります。ですので、国や大学によって異なってくると思います。我々はたまたま、高麗大学校、復旦大学、神戸大学がそのような方針でありましたので、こうなったということで、それぞれの大学院の方針を尊重したという結果です。

岡本 九州大学の田邊先生はいかがでしょう。

田邊 基本的に、規則に外れないことが原則だと思います。修士論文は必ずしも書かないといけないということにはなっていません。大学それぞれが決めて、修士論文を課すと学内規則で決めておられると思います。従いまして私共は、九州大学の学生が九州大学へ提出した修士論文は九州大学の修士論文であり、同じものを上海交通大学へ提出しても、上海交通大学はそれを修士論文として認める、と合意したのです。一つの修士論文で学位を出すのはいかがなものか、と学内にて確かに議論があり、私自身もそう思います。ただ、修士論文の位置付けが変わってきており、従来の、修士論文は新たに論文に発表するものか、自分の学習プロセスを論文にするだけで良いのではないかとそのような考えに立ったとすると、教育の過程としての論文であれば、それで良いのではないかと基本的に合意をしたわけですが。これは博士論文ではそのようには行きませんので、今のところ私たちは博士論文のダブル・ディグリーを1本の論文ですることは出来ないと思っています。

岡本 ありがとうございます。3大学に色々な学生が行くことになりますが、例えば東京大学の場合、どの国の学生でも必ず3カ国に行く。その際、学生の学籍は元の大学にあるとの理解で良いのでしょうか。

宮本 基本的に東京大学の場合では、最初に交換留学とダブル・ディグリーと二つのトラックがありますが、例えば、交換留学に関して、と考えますと、まず1年目は東京大学に來ている間には基本的に東京大学に籍がある形になります。その後、半年ずつ北京大学、韓国のソウル大学校へ行くわけですが、その際には向こうの大学に籍がある形になります。我々はそういった形で運営しております。先ほどの質問とも少し絡んでくるかと思いますが、修士論文に関しては、例えば、東京大学の公共政策大学院にてダブル・ディグリー・プログラムに入った場合には、研究論文を書くことは専門職学位を取るための修了要件になっていません。リサーチ・ペーパーもしくは研究論文を書けば、単位としては認めますが必ずしも書く必要はありません。ただしダブル・ディグリーで東京大学に在籍している学生が韓国や北京の大学に行くことになった際には、あちらで修士号を取るためには、当然、修士論文を書くことが修了要件になっていますので、その際には先方の条件を満たすよう学生は勉強をしなくてはならず、修士論文を書かなくてはならない、ということになっております。

田邊 学籍に関しましては、正規の修士論文を提出しますので、例えば九州大学で取る際には九州大学の学生である必要がありますので九州大学に入学させます。同時に、上海交通大学にも、時期はともかくとして、入学させます。ですので、同時に二重の学籍を、例えば日本と韓国、あるいは日本と中国の学籍を同時に持つことになります。

田中 神戸大学の場合には、授業料相互免除協定を結びました。自分の在籍する大学に学費を払えば相手先では学費を払わなくて良いということです。ですので、本学から高麗大学校や復旦大学へ留学した時には、神戸大学の学籍を持ちながら向こうでも学籍を持つ形に、自動的にになります。

こちらで学籍を失うと授業料は払えませんので、留学先で請求が発生しますし、実際問題として向こうの大学のほうが学費は高いです。したがって、我々の場合は授業料免除協定の前提として、学籍は自動的に維持されることになります。

岡本 ダブル・ディグリーの話が質問に出ています。早く退席される先生がいらっしゃるの、そのことに関する質問をしました。制度の問題は、各コンソーシアムで非常に苦労された点であろうと思います。おそらく一番問題なのは、質保証と言った時にアウトプットはこれだけある、ではアウトカムが何なのかという所で計られていくのかと思っています。これについては学生部会へ対する会場からの質問も多いので、これは後ほどまとめて伺いたいと思います。難しい質問ではないので、難しく考えないでください。

その前に、これも大きな質問ですが、一橋大学、東京大学、政策研究大学院大学では公共政策やMBAの色々な学生が居ます。まだ実際に卒業した人がたくさん居るわけではありませんのでまとめたことは言えないとは思いますが、その人達のキャリア・パスを、大学としてはどのように想定していらっしゃるのでしょうか。一橋大学のほうからお願い致します。

一條 本学の様な経営大学院へ来る学生は、キャリア・アップ、自分のレジュメにバリューを加えて更なる次の大きな役割を果たしたいと思っていますから、当然、付加価値を高めるという観点で教育を行なっています。特に今回のABLPに関しては、グローバル・リーダーでありながら、中国やソウルに関しての強いネットワークと知識を持っているようなリーダーを育てることが目標です。グローバル・リーダーだけれども特に今後の

世界の成長エンジンであるアジア、とりわけ中国と韓国についての深い見識とネットワークです。経営大学院では教育をすることも大切ですが、経営大学院の付加価値はネットワークであります。今回の ABLP に参加することにより、海外の素晴らしい大学を通じて企業家との色々なセッションもありますので、そうしたネットワークを非常に大きな財産とするようなアジア発のグローバル・リーダーを育てたい、というのが大きなキャリア・ビジョンです。

宮本 東京大学に関して言いますと、主な就職先とは、やはり政府関係と国際機関、この二つになります。この「キャンパス・アジア」の学生のみならず、そもそも公共政策大学院では1学年 120 名程の学生が居りますが、現在、半数程が留学生となっております。その内、就職する人の8割近くが国際機関あるいは政府関係に行きます。それは自国の中央銀行や財務省といった所、留学生であれば国に帰って同じような省庁で働く、あるいは民間で働く方はコンサルティングですとか、金融といった、経済に近い分野の仕事に就くといった大きな傾向が見られると思います。

細江 政策研究大学院大学も東京大学と同じような感じです。ただ、我々は就職に関してはそれ程考えなくて良いです。なぜかと言いますと、学生は政府から派遣されてくる人ですので、元の職場に戻る事が前提になっています。強制するわけにも行きませんけれども、就職先についてはあまり悩むことはありません。

岡本 立命館大学、岡山大学、名古屋大学の3大学にも同じ質問をします。卒業して修了した学生のキャリア・パスとして、どういうものを期待しているか、という視点でお答えいただければと思います。まず立命館大学からよろしくお願い致します。

廣澤 はい。立命館大学の「キャンパス・アジア」の学生は現在3回生で、来年4回生になっていくところです。立命館大学の場合はアジアのリーダー＝エリートと考えているわけではなく、普通の社会へ入り、グローバルな環境の中で活躍してくれるリーダーと捉えており、キャリア・パスとしても、もちろん企業に入りグローバルな働き方を想定して人材を育成しております。今のところ、キャリア形成プログラムというものを作りまして、そこで、所謂グローバルな展開をしている色々な企業の方々に来ていただいたり、あるいは、企業訪問などをさせていただいたりして、そのようなコネクションを作りつつあるところですが、学生が具体的にどのような所へ就職するかは、学部学生なので、自分達でこのキャリアを活かして考えるように、といった指導で、現段階ではやっております。

岡本 一番年上の学生は何年生になりますか？

廣澤 今3年生になります。

岡本 岡山大学はいかがでしょう。

小野 岡山大学「キャンパス・アジア」プログラムでは、国際的な視野を持ちながら、同時に地域の文化に精通した地域の公務員を養成することを人材育成の目標に掲げ、このプログラムを実施して参りました。先ほ

どの発表の中でも「アジア・クラット」という言葉を使いましたが、地域の公務員、つまりは東アジアの公務員となる人材という認識でアジア・クラットを育成することが達成目標となっております。そして、先程の報告の通り、「キャンパス・アジア」プログラムで1年間中国の吉林大学へ留学した学生のなかで、実際に国家公務員試験に合格し、アジア・クラットの第1号として4月から働く人材育成ができたことが、今までの取り組みの成果としてあがっております。また、医療、環境エネルギー、そして循環型社会の構築などの領域におけるリーダー養成も、特に自然科学系と医歯薬系、ナノバイオコースで実施しております。自然科学系や医歯薬学系は教育課程が長期になるので、現在人材育成の途中にあります。また、技術開発や生産、販売のすべてにおける日中韓の産業にリーダーシップを発揮できる企業の中堅幹部候補生となるような人材育成を目指しています。岡山大学では、「キャンパス・アジア」の留学を経てグローバル企業に就職が決まった学生が多数います。また、現在「キャンパス・アジア」で育成中の学生は、やはり「共通善」が一つの大きな理念の支柱になっております。例えば、法学部の学生で「キャンパス・アジア」の長期派遣留学で韓国に一年間留学し、帰国後は法科大学院に行き弁護士を目指すという学生がいます。

宇田川 ご承知のとおり、そもそも法学部卒業生に対して日本の社会、とくに企業が求めている人材は法律専門家ではありませんよね。たとえば、私が学生だった25年ほど前の司法試験の合格率は1%程度で、合格者は400名程でした。全国の私立・国立を合わせた法学部が100ぐらいもあるのに、400人しか通らない試験を貴学で真剣に取り組むようにという要求は非現実的であったわけです。ですので、法的政治的な素養を身につけて、一般社会で底辺から社会を支えていく人材を養成するのが、元々法学部に課されていた社会的な使命でありました。今回、このプログラムを実施するにあたっての目標は、アジア共通法を政治的、法的に認識できる人材を養成するというものです。そう聞くと研究者や高度職業専門人を養成することが主たる目的となっているように理解されかねません。正直なところ、私ももそのような人材を養成したいと思っておりますし、実際、それを希望する学生は一定数、確実に存在します。例えば、今日参加している本学の伊藤さんも大学院への進学を考えてくれています。しかし、地理的にも、経済的にも一体化している中国や韓国とは、表現は悪いですが付き合わざるを得ない関係にあります。その意味では、従来型の人材育成、つまりそのような関係の中で各方面で活躍できるジェネラリストを養成することが重要であるとの認識にもとづいて、私も本プログラムに取り組んでいます。

少し話は逸れますが、私も名古屋大学大学院法学研究科・法学部がウズベキスタンから多くの学生を受入れているということについて、同じ業界の一部からの批判があることは確かです。つまり、そのことが同国の独裁体制を肯定するだけでなくその強化につながっているのではないかと、選抜されてくる際に何らかのバイアスがかかっているのではないかとというものです。私どもの認識はそれとは異なり、教育という手段を通じて真の意味での民主主義、法治国家、人権等の民主主義の基本的な価値観が理解できる人材を育成し、帰国後に彼・彼女たちが活躍することによって民主的な国づくりに取り組んでもらいたいという意図で受入れています。このプログラムでの中韓からの学生受入れもまた、同様の考えにもとづいています。

原 東京工業大学では、理工系の「キャンパス・アジア」の中で、実はキャリア・パスのセミナーをやっています。その中のキーワードが、プロブレム・ソルビングと言いまして、問題解決型をどう考えてもらうか、特にアジアの問題解決型をこの2、3年やっております。学生たちは最先端の研究をすることで必死になっているのですが、それをいかに現代のもっとシリアスな問題、環境問題やきれいな水を提供することなど、色々なことにどう活かせるか討論会などをしています。また、韓国や中国から色々なキャリアを持っている先生方にきて

いただいて話をしてもらっています。我々の「キャンパス・アジア」夏のプログラムの最後の評価、プレゼンをする際に、例えば、あなたは大使館で科学技術担当になりました、自分の国と日本とでのバイラテラルなジョイント・プログラムを作り問題解決をどう進めるかの提案をプレゼンしてください、と言うと学生たちは、始め、何をしたら良いか迷います。ですが、一度もっと社会に還元できる問題解決に目を向けようとする、色々な意見が出てきます。ですから、どういう人材像ということを考えると、最先端もありながら、アジアという言葉を付けるか付けないかは別として、やはり問題解決が出来る人材、かけ橋になる人材ということで最近指導をしている所です。

岡本 ありがとうございます。それでは卒業された方も含めて学生の皆様に伺いたいのですが、こういう人に育ってほしいと大学の先生たちは、ある意味では勝手なことを言っていると取れなくもないですが、それを一切無視していただいても良いです。将来、このキャリアをどう活かしていきたいか、という視点から、前向きな話を学生の方から伺いたいと思います。最初に既に卒業されている中田さんから口火を切っていただければと思います。

中田 今はもう私は卒業して働いているのですが、大学院では教育開発学というものを専攻していました。そこでは教育と貧困に焦点をあて、論文はホームレスの問題を書きました。そこで、今、ティーチ・フォー・ジャパンという所からフェローとして派遣されているのですが、正に、その理念がどんな子供に対しても良い教育をということを掲げていて、そこではまず、2年間現場の先生として入って、そこから2年後は自分のキャリアを進んでいくという団体の方針ですので、2年後にはおそらく国際機関にアプローチをしていこうと思っています。

伊藤 私がこのプログラムに参加したのは1年生の終わりで、事前指導が始まったのが、1年生の春休みから、派遣が2年生の後期からでした。当時はここまで大きなプログラムということを知りませんでした。なぜ参加したかと言うと、中国語も英語も出来るし、言語の勉強が好きだったので、言語能力を伸ばせるな、くらいの感覚だったのが本音です。それで派遣となり、この「キャンパス・アジア」の意味を考えるようになったのは帰国後、共通法だったり、法的、政治的な交流をする意義だったりを考え始めました。なので、参加してくる学生は、もしかしたら意識の高い学生だと共通法、認識共同体が大事だと考えて参加してくる学生もあれば、良い留学の機会だから経験のために、と考えて参加してくる学生も居て、ニーズが色々あると思いました。私は、将来はアジアの人権保障に携わりたいと考えていて、今、学部4年生ですが、そのために大学院に進学しようと考えています。他の参加者の話を聞いていると研究者になりたい人や、法律家になりたい人、また、法や政治の専門ではないけれども韓国や中国の知識を活かせるような企業に就職したいという学生が多く居ると思っています。

岡本 ありがとうございます。学生の方には派遣先に行って環境が違って大変じゃなかったか、語学勉強するのは大変じゃなかったかと、皆さんから心配される質問が出ています。壇上に登っている人は、たいした事はない、ないからここに居るのだ、と言えばそれまでなので、もう一つの別の質問ですが、一言でまとめて、これから「キャンパス・アジア」に参加しようとしている後輩にアドバイスをしようと思うと、どのようなことを伝えますか、という質問をしたいのですが、お答えいただけますでしょうか。

中田 そうですね、これから参加する学生に向けては、まず「キャンパス・アジア」では国柄もあると思いますが、自分がやりたいことは積極的に言う結構受入れてくれたりします。例えば私が韓国語を勉強したいと言うと、こっそり塾に行くお金を出してくれ、行って来いという感じでしたので、ハングリー精神を持って、やりたいことをどんどん主張して、自分で開拓するぐらいの気合いを持った方が良いと思います。私はインターンもビッグイシューというホームレスの方が雑誌を売る団体にさせていただきましたが、それも体当たりで行って、韓国語が出来ないとここではインターンは出来ないと言われたので、まずは韓国語を徹底的に勉強して、インターンの枠も実はなかったのですが、電話で交渉をしてインターンの枠を作ってもらい、行きました。なので、やりたいことはどんどん自分からぶつかって行けということをアドバイスしたいと思います。

伊藤 名古屋大学では事前研修を行なっていて、それが学生からしたら評判が悪く、夜9時まで残らないといけない、ですとか、時間がない、ですとか、大変なことばかりが言われていて、なかなか良いところが伝わっていないと思います。なので、中田さんも言っていたとおり、本当にやりたいことがフレキシブルに出来る、というか、法律も勉強できるし、政治もできるし、英語能力も伸ばせる、中国語、韓国語も出来る、というふうに本当に自分のやりたいことが出来るので、どこに焦点を置くかで自分の能力をどんどん伸ばしていけるプログラムだと私は思うので、それを後輩に伝えたいと思います。

岡本 ありがとうございます。私がずっと見ていて、一番印象に残っているのが去年の学生部会でのことです。岡山大学のプログラムの「共通善」とはなんだ、と皆思うわけです。学生部会で学生たちが自己紹介をしているときに、岡山大学の学生が「共通善って何？」と聞かれたのです。その時の学生の答えが、「共通善を作るのが私達の役目だ」と言ったのです。立派だな、学生に任せておけばこれでだいたい大丈夫じゃないかという気もしました。

ここで、評価を務められた牟田先生から、印象話になっても結構ですけれども、思うところを一つか二つ述べていただければと思います。

牟田 はい。モニタリングを担当しました立場で感想を述べさせていただきたいと思います。いくつかの大学には実際に訪問させていただきまして、色々とお話をお伺いすることが出来ました。その中で思いましたことは、今回の日中韓の「キャンパス・アジア」というプログラム、どこも非常に苦勞をされ、しかも本日発表があったように非常に立派なプログラムに仕上げられているわけですが、それはやはり基礎があって出来たことだと、どこへ行っても思いました。日中韓という「キャンパス・アジア」という補助事業があって、手を挙げてお金が出たということもありますが、これを成功させるためには、それ以前に例えば研究室と研究室、あるいは学部と学部、そういった長い結びつきがあり、それをこの補助事業を機会にして拡大をしていかれたのだと理解しました。今日のお話でも研究科単位のところもございますし、全学という非常にチャレンジングな大学もおいででしたが、やはり、ステップ・バイ・ステップということで、従来からやっておられたことをこういう機会に立派なこういう大きなプログラムに仕立てられたのだと思います。単にお金をもらったからプログラムが出来た、ということではないのだと思います。そういう意味で、これを余所がすぐ真似出来るかというと、なかなかそうは行かず、そういう下地がない所で、こういう立派なプログラムはなかなか出来ないとは思いますが、今回のようにいろんな大学でご苦勞をされて実施された中で、それぞれに多くの制約があったのだらうと思います。理

系と文系では違うとか、一つの研究科と全学では違うとか。そういう中で、今回、優良品例集というものが出来ているわけですが、私共モニタリング委員がやりましたことは、この優良品例として何を選ぶか、ということが一番大きな仕事でした。そういうものを上手に機構でまとめていただき、全部読みましたが、大変良く書かれています。これからこういうような事をやろうという大学にとっては、いろんな事例があって役に立つであろうと思います。学部だけでやろうとする所もあるでしょうし、全学でやろうと思われるところもあると思いますが、そういう所にとって、とても良い事例が出来たのではないかと思います。

「キャンパス・アジア」はまだ道半ばということで、もう一度モニタリングの機会があると聞いております。今回は、最初にこれをやります、と言ったことに対してどこまで出来ているかをモニタリングすることが大きかったのだと思います。しかし、今日のお話でも、もうだいたい仕組みは出来ていると思いますので、この次モニタリングする際には、その仕組みを使って、その後どうするかという将来に向けてこの「キャンパス・アジア」プログラムをどう大きくしようとしているかという所が大事になるかと思います。逆に言いますと、これから残りの期間、是非、仕上げるということだけではなく、後程、文科省からも色々お話があろうかと思いますが、このプログラムが終わった時に、これをどうするのか、このままの形で、自分で継続をするのか、あるいはお金が来ないからやめてしまうのか、あるいは、他のプログラムの形に変えていくのか、あるいは、最初に佐藤委員長がおっしゃったように日中韓にとどまらず、本当のキャンパス「アジア」になるのか、あるいは、キャンパス「世界」になるのか、そういったことが重要です。今まではとにかく作り上げるのが一生懸命だったのだと思います。しかし、これからは作り上げたものをどうしていくかという視点も考え合わせながら、是非、素晴らしい活動を続けていただければと思います。

やはり、作ったものをどう活かすかに関しては、仕組みだけではなく、先ほどから学生が色々とおっしゃっていましたが、この「キャンパス・アジア」プログラムで生まれた卒業生も、非常に大きな資産だろうと思います。この資産をどう活用していくのかということで、先ほどから例えば同窓会というお話も出ていますが、そういうことも大事なのかと思います。それから、先ほど、岡本理事からも就職の話がありましたが、こういう立派なプログラムをやっているのだということを、やはりもっと宣伝すべきだと思います。機構でウェブページがあるから見てくれとおっしゃるのですが、見てくれと言うだけではなく、積極的に色々な企業や官庁などに、こういうものが出来た、是非これを見てくれと、売り込みに行くぐらいのことがあって良いのではないかと、私はそのぐらいの価値のあるものが出来たのではないかと思います。今日ご発表を伺い、本当にこれはやる価値があった、立派なものが出来たと、非常に嬉しく思っております。

岡本 ありがとうございます。何となく文部科学省のほうへ振られているようなので、ここで、松本室長に、今日の感想も含めて、今後に対する期待と展開とを手短にお話しいただければと思います。

松本 文部科学省の松本でございます。まず、ここまで4年間、プログラムを進めてきてくださった大学関係の皆様方に、まず御礼申し上げたいと思います。それから、横串の評価実行を入れた形で適切な評価をしてくださり、優良品例集を作成頂いた NIAD の皆様方のご努力にも感謝を申し上げたいと思っております。今になってこの事業の背景を思い返しますと、民主党政権が発足した時に、当時の鳩山総理が東アジア共同体ということをおっしゃって、共同体の象徴的な取組みとして始まり、その後色々ございましたが、今日の取組みを聞かせていただき、当初政策的に意図されていた、日中韓3カ国を理解して社会をけん引していく人材を育てていきたいという所が具現化されて来ているのではないかと思います。また、大学の個別の取組み

言えば、実際に新しいプログラムの開発が一生懸命行われ、今回 11 月に制度化されましたが、ジョイント・ディグリーを今後進めていく上でも色々な経験が蓄積されてきているのではないかと思います。今後そのような面でもこれまで先生方が蓄積されてきた経験を、私共としても色々と伺っていきたいと思っています。それから、留学生の受入れという点においても体制整備が進められてきているとのことで、今回、「キャンパス・アジア」の採択大学のうち、多くの大学がスーパー・グローバル大学創成支援事業の採択大学ともオーバーラップしていますので、そういった面でもこの事業で取り組まれたことが基盤として活かされていくのではないかと期待している所です。

今後の話になりますが、日中韓の3カ国の政治的な状況はなかなか厳しいものがございます。政府間で調整をしている事業の推進会議の枠組みがあるのですが、実際ここしばらく動いておりませんでした。首脳外交が進展を見せた中で、次の会議の日程調整が進んできており、やり取りを通じて反応が返ってきているのは、中国にしてもやはりこの動きを止める気はなく、より一層規模を拡大し、将来的にはASEANを含めたアジア地域に展開をしていきたいとの希望は持っているようです。我々として、今後どうするかということですが、今の採択されている事業に関しては来年度の終わりを持って一区切りとはなりますが、「キャンパス・アジア」というものは成り立ち自体も外交的な意味合いを持って発足したという点もあり、これ自体が外交政策の一部にもなっているということで、何らかの形でどうするかを考えないといけないと私自身の宿題と思っている所です。またタイミングを見て皆様方にも見える形にさせていただきたいと思っています。

岡本 ジョイント・ディグリーなどが進んでくると、制度的な問題、学籍の問題も含めて、色々と問題があるので、その時には是非ご相談に乗っていただきたいと思います。最後に、今後、これをどういう方向に発展していくか、夢と希望を、各大学から、まずは理系である、東北大学の土井先生と、九州大学の田邊先生、東京工業大学の原先生から、一言ずつ伺いたいと思います。

土井 私共としては、化学系を率いていく日本の科学技術というのは手厚い教育で非常に良いと韓国、中国からも非常に評価されています。しかしそれを持ってリーダーになっていくというのは、また一つ違った所があると思いますので、是非、そういうリーダー像を作っていく所に広げていきたいと考えています。

田邊 このプログラムで私たちの最大の喜びは、日本人の海外に出掛けた学生が、非常に積極的になったということです。最近では学生が日本の居心地が良いということで外国に行きたくない学生が多いのですが、グローバル化の一端ではそれは非常に矛盾しているわけです。一人でも多くの日本人学生を外国に送り出すことは、そういう意味では留学生を受入れるよりもはるかに効果の高いことだというのが、私たちの認識です。私たちのプログラムは比較的上手くいっていると思います。3大学ともに非常に満足しておりまして、基本的には続けたい、ただ、私たちのプログラムはサマー・スクールがないと成り立ちません。交換留学のための奨学金は自らの手立てで出せるかも知れない、しかし、サマー・スクールという特別なプログラムとなっていますので、やはり何がしかの援助がないと継続するのは難しいのではないかと言うことで、今現在、色々な財団等も含めて3大学それぞれにどのように援助をもらっているかを探っている所です。ですから、文科省の方が来られていますけれども、スタッフを雇うまでのことはないかも知れませんが、学生の交流という実質面だけでも構いませので、そういう形での金はやはり継続的にお願いしたい。最初から5年で終了という約束ではありますが、教育とはそういうものではなく、10年や20年、最低10年間はやらないと、私たちも企業に売り込

みたい学生を、特に中国の学生は環境問題に目覚めてくれましたので、そういう学生が増えることは非常に嬉しいので、そういうのが5年で終わってしまうのは本当に効果がないと思います。今このプログラムではスタッフを雇うお金もいただいています、それはそれとして、是非、最低限でも学生の交流を続けていける継続したお金を10年間はお願ひしたいと思います。勝手ですが、お願ひしたいと思います。

原 東京工業大学は今3つポイントがありまして、来年度、最終年度ということもあり、例えばサマー・スクール、サマー・プログラムを自立したプログラムにするには、課金してでも出来るようなビジネスモデルにどのようなものがあるのかを、現在海外も含めて調査を始めています。特に韓国、香港、シンガポールというのは例えば30万、40万の学費を取っても学生がかなり集まっています。それは特徴あるプログラムを作っているからですが、特に韓国を調べてみますと、サマー・スクールでかなりの学生を受入れ、送り出しています。我々東京工業大学としてもせっかく、サマー・スクール、サマー・プログラムを作りましたので、スーパー・グローバルという入れ物もあるかも知れませんが、課金してでも自立して出来るようなビジネスモデル、つまり民間企業を導入するとか、いろんなスカラシップを入れるとか、NSFと協力するとか、アメリカはやはりNSFと協力しなければいけない所がありますので、アジアだけでなく欧米へも広げたいと、来年度の最終年度を迎えるにあたって調査を始めています。

2番目はダブル・ディグリーをKAISTとも実施することを進めています。ただ、先ほどジョイント・ディグリーという言葉が出てきましたので、我々としてはジョイント・ディグリーだと非常に作り易くインプリメントし易いと実感しております。ところがジョイント・ディグリーという言葉がまだ出せない、ダブル・ディグリーで苦労をして、ダブル・ディグリーを作ればジョイント・ディグリーへ上手に移行出来るのではないかと考えています。ダブル・ディグリーの難しさは、資料の一覧表をみていただければ分かると思いますが、ほんの一つの違い、日付の違い、論文をどう書くか等、各大学で違う意見が出てきます。ただ、それを一回でもクリアしてしまえば、後にジョイント・ディグリーに移行することが可能だと考えています。

3番目は、例えば欧米の学生や大学の先生とコンタクトをしていると、やはりアジアに人を送りたいと、NSFの枠で日本にも数10人送れるとかいろんな枠があるのですが、そういう学生がスカラシップを取る前にお金を出してでも来たいような魅力のあるプログラムとはどういうものなのか、ということです。東京であるとか場所を考えるのか、2020年にオリンピックがあるので、ダイナミクスがあるとか、そういった海外から人に来てもらうような魅力のあるプログラムに、どう作り込むかというのは、実はブランディングも含めて専門家と一緒にやろうとしています。「キャンパス・アジア」で今サマー・プログラムを一生懸命作ったのですが、ではそれが本当にブランディングやビジネスモデルとして成り立つのかを、専門家を呼んでまとめていこうと思っていますので、サマー・スクール、サマー・プログラムの自立化、ダブル・ディグリー、ジョイント・ディグリー、それから、特徴あるプログラムで魅力のあるプログラムへどうするのか、というのを進めている所です。九州大学からもありましたが、予算が来るには越したことはありませんので、自立したプログラムとは言え、やはりベースは必要です。ナッシングから始めるのは非常に難しいので、是非ともベース、予算獲得は、我々も努力をしていきたいと思っています。ありがとうございます。

岡本 ありがとうございます。何となく意図した所へ落ちた気がします。では、佐藤委員長から印象等いただけますか。

佐藤 今日は色々なケースについて聞かせていただき、特に学生の発表については、学生部会の際にも一度聞いており、学生の役割は大切であると思っています。お話を聞きながら考えていたのですが、私が最初に国外へ出たのが1960年代の末の頃、1ドル360円で日銀に申請をして300ドルだったか500ドル買ってそれで行きました。当時海外に出るということは、フルブライトのような奨学金にアプライをするか、あるいは自分でスポンサーを探して行くか、お金があれば自費で行くということも可能でした。ただ、その時のことを考えてみると、今日はダブル・ディグリーとかジョイント・ディグリーとか、様々な取組みについてのお話がありましたが、当時は4年間で学校を終わらなくても良いという感じがしましたので、途中で抜けても、それがカウントされなくても自分のためになるのであれば良いという考え方でしたが、今は効率を考慮するので、例えば4年間の間に2つのディグリーというようなことが進んでいて、あの頃同様のシステムがあれば、それほど苦勞もなかったと羨ましく思いました。本来4年であるところが6年かかって学部を出ても、それは自分のための事であるから、それはそれで良かったのだと思っています。しかし、この「キャンパス・アジア」のプログラムは高等教育にとって大切なプログラムだと感じています。と言うのは、高等教育の世界がグローバル化されていく中で一番大切なのは、学生のモビリティ、あるいは教員のモビリティであると信じてずっとやってきたからです。そういう面で言うと、学生のモビリティにとってプラスのツールが色々と出来てきていると感じています。

「キャンパス・アジア」パイロットプログラムのパイロットというのは要するに、言うまでもなく水先案内人ですから、これでもって終わるということではなく、先の道筋をつける、道案内をするという意味で、この10大学の取組みがもっと広がりを持ったものになって欲しいと思います。先ほどからご苦勞も伺ってきました。例えば成績評価も日本の優・良・可・不可からA+・A-・Bというふうに行っているところもあれば、国によって制度が違ったり、GPAはやっていない所もあったり、色々だと思います。ただ、それは、単純にそれぞれの国のカルチャーや制度が違うことです。それはそれとして受入れながら、お互いのコミュニケーションの中で価値を共有することが重要です。例えば1単位15時間の授業にしても、時間だけ単位だけでもってよしとせず、内容についてきちんと教えるだけの仕組みがあるのかどうかを評価し、今後も続けていけば良いのではないかと考えております。

この「キャンパス・アジア」のモニタリングについて準備委員会が作られたとき、声を掛けていただき、その後、継続されたモニタリング委員会では委員長をお引き受けしました。その取組みの中で当委員会の重要性を感じております。本日は、文部科学省の方もおいでいただいておりますが、私もモニタリング委員会の委員長として、「パイロット」と付けているのですから、継続をするだろうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。ありがとうございました。

岡本 ありがとうございました。時間通りに終わるのが教師の務めと昔から言われております。会場に顔見知りがたくさん座っているので、油断していたら当てようと思っていたのですが、それはできませんでした。ここでパネルディスカッションを終了とさせていただきます。パネリストの皆様、ありがとうございました。今一度大きな拍手をお願いします。

(参考)

ウェブサイトでの当日配布資料および 「キャンパス・アジア」日本側 1 次モニタリング資料のご案内

- 当シンポジウムの当日配布資料(電子版)は、下記 URL に掲載されています。



NIAD-UE シンポジウム
国際共同教育プログラムの質保証：
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは

http://www.niad.ac.jp/n_kenkyukai/1254751_1207.html

- 「キャンパス・アジア」プログラムについて当機構が実施した1次モニタリングの詳細や各種資料については、下記のウェブサイトをご覧ください。



「キャンパス・アジア」モニタリングウェブサイト
http://www.niad.ac.jp/n_kokusai/campusasia/

※上記ウェブサイトには以下の冊子も掲載されています。

「キャンパス・アジア」
日中韓三国による質保証の取組み
ー日本における1次モニタリングの報告書ー



優良事例集：
質保証からみた「キャンパス・アジア」



NIAD-UE シンポジウム「国際共同教育プログラムの質保証：
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは」

報告書

平成27年3月発行

編集・発行

独立行政法人大学評価・学位授与機構評価事業部国際課

「キャンパス・アジア」モニタリング事務局

〒187- 8587 東京都小平市学園西町1- 29 - 1

メール : ca-monitoring@niad.ac.jp

電話 : 042- 307- 1634、1623 / ファクス : 042 - 307- 1559

NIAD-UEシンポジウム 報告書

国際共同教育プログラムの質保証：
日中韓の連携による教育の質モニタリングを通して見えてきたことは

独立行政法人 大学評価・学位授与機構

〒187-8587 東京都小平市学園西町1-29-1
<http://www.niad.ac.jp>